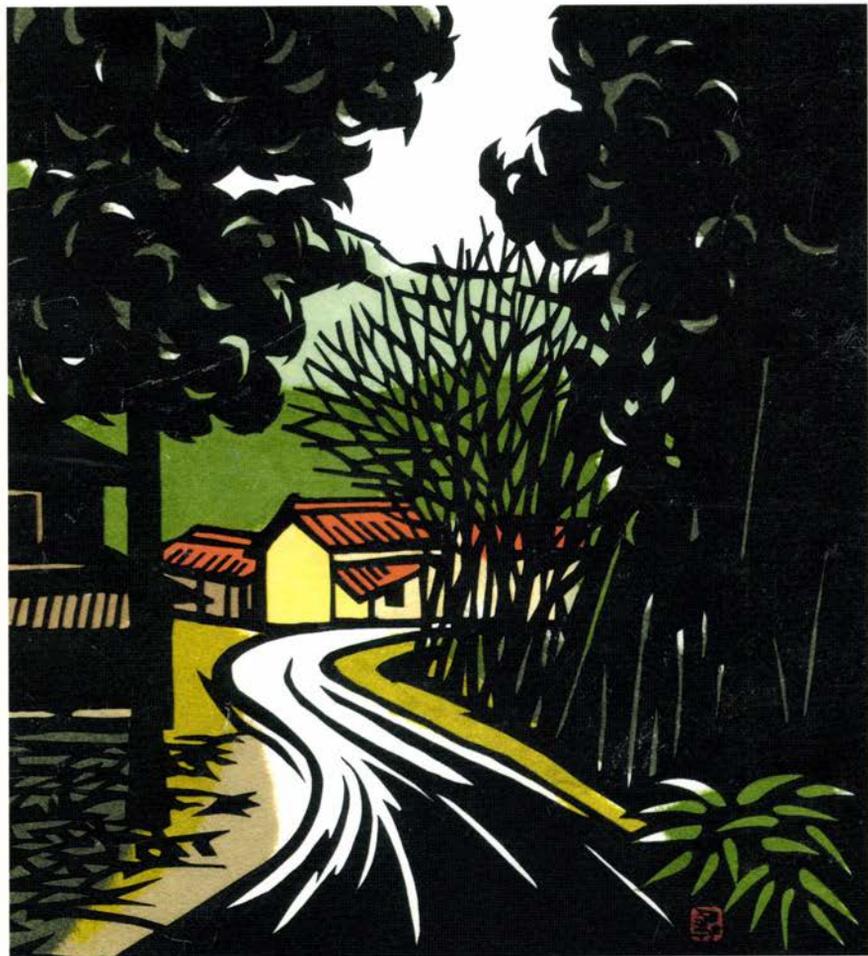


# 川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可  
平成十二年三月一日発行（毎月一日発行）  
創刊大正十三年 通卷九九四号



日川協加盟

No. 994

三月号

川柳雑誌・川柳塔 通巻一〇〇〇号記念

## 「私の珠玉の一句」大募集

通巻一〇〇〇号発刊を記念して、同人・

誌友の皆様「川柳」を募集します。

川柳を始められてから今日までに詠まれ  
発表された句の中から、これぞ「私の珠玉の  
一句」と思われる句を投句して下さい。

締切日 平成二十二年六月十五日

掲載誌 平成二十二年九月号

投句用箋 巻末の専用柳箋を使用し、本

社事務所に郵送して下さい。

(葉書・FAXはご遠慮下さい。)

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



# コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023  
TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021  
(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

## 交流

河内 天 笑

一、〇〇〇号記念の大会へ半年余りを残すのみとなった。出来得る限り多くの仲間に参加して頂くことを望むのは当業者として極く当り前の事であるが、漠然とした考え方は到底満足した結果が得られる筈もないので、参加者目標を五〇〇人と設定。この目標に向かい同人・誌友心を一つにして動き出した。二月十五日の各地代表者・役員拡大会議では活発なご意見を頂いたので、これらを叩き台に三月の常任理事会で結論を出し実行して行く。

二月十日(休)に開催された日川協理事會及び関東常任幹事総会では川柳塔一、〇〇〇号記念大会のちらしを配布、出席者にこの記念大会を認識していただいた。また六月十日の日川協鳥取大会のポスターを白板に貼り出して会場への足などを説明。鈴木公弘実行委員長以下スタッフ一同が素敵な雰囲気づくりで皆様をお待ち申し上げるべく、奮闘している旨お伝えした。

総会終了後、大野風柳理事長は、

「現在、日本国中どの柳社に於ても構成人員の減少傾向に憂慮はするものの、だからどうするという考えのまともでないまま解散してしまふ。どんな機会でもいいから何人かの仲間が集まっつて、ああしよう、こうしようという熱

い心を育てて、それが大きな輪に成長してこそ減少傾向をくい止める手段となる」と熱く語られた。

川柳塔社も同人・誌友の減少傾向の全国的な波の中にいるが、自身で成し得る事を考え、仲間へ伝え行動に移すより手は無い。

新会員発掘の努力はこれまで通り続けるとして、さし当り一、〇〇〇号記念大会への参加者増にはつながり難い。そこで私個人の考えを述べると、同じ川柳会で何人かのグループをつくり、これまで参加した事のない最寄りの会、または他柳社の会へ出席してよるこんで貰う。これを何回か重ねている内に新しい友達も出来、新しい交流が生まれる。

こんなグループがたくさんたくさん出来る事を望んで止まない。それが川柳塔をここまで育て上げた先人たち、そして自分を川柳の道へ導いてくれた諸先輩達への恩返しにもなると思う。

この際、他柳社の方々とも風通しのよい交流をはじめようではありませんか。

この世とは月の満ち欠け見るところ

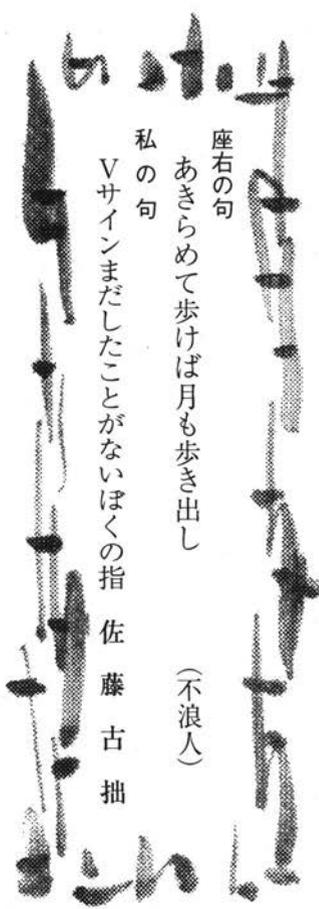
天笑

一つの世もいくさの絶えぬのがこの世

この世とは生の地獄が見えるところ

この世とは裏と表があるとこ

この世とはおいしい酒が飲めるところ



座右の句

あきらめて歩けば月も歩き出し

(不浪人)

私の句

Vサインまだしたことがないほくの指 佐藤古拙

## 川柳塔 三月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「吹屋」

### ■巻頭言 交流

成功させたい全日本川柳鳥取大会

河内 天笑 …… (1)

川柳塔 (同人吟)

春木圭一郎 …… (2)

川柳塔の川柳讃歌 (63)

河内天笑選 …… (4)

自選集

木津川 計 …… (47)

温故知新

川上大輪選 …… (51)

水煙抄

三宅保州・高田美代子共選 …… (52)

檸檬抄「耳」

新家完司選 …… (71)

愛染帖

新風柳多留一篇研究 55 …… (74)

新風柳多留一篇研究 55 …… (78)

## 成功させたい

### 全日本川柳鳥取大会

春木 圭一郎

今年の全日本川柳二〇一〇年鳥取大会の参考とするため昨年の札幌大会を視察してきた。鳥取大会を主管運営する鳥取県川柳作家連盟(鈴木公弘会長)では、二十人の視察団を編成、六月二十七日(土)、空路羽田空港經由新千歳空港へ飛んだ。バスに乘車、クラーク博士の「少年よ大志を抱け」の銅像もある羊ヶ丘展望台で遊んだあとホテルへ直行、まもなく前夜祭の会場へ向かった。会場は本大会と同じ「京王プラザホテル」だった。

前夜祭はアトラクションに北海道民謡などもあり華やかで和やかなものだった。来年の開催県の紹介があり、鈴木会長以下二十人全員が壇上に上がり、六十万人と全国一人人口の少ない鳥取県を力強くPRした。また持参した横断幕(かくして伝統は引き継がれたきなんせ鳥取へ)第34回全日本川柳2010鳥取大会を掲げて今年の鳥取大会への参集を呼びかけた。

六百人以上の参加者で盛会の二十八日の川柳大会へは全員が参加、大会を盛り上げた。本大会でも横断幕を掲げ、鳥取県をPR、

一路集	「親しい」	倉益一瑤選	(80)
	「節約」	小寺花峯選	(80)
	「ベスト」	板山まみ子選	(81)
初歩教室	「メール」	鈴木公弘	(82)
秀句鑑賞	同人吟	山本希久子	(84)
	水煙抄	籠島恵子	(86)
麻生路郎句抄			(87)
二月本社句会			(88)
各地柳壇	(佳句地十選／根岸方子)		(92)
■エッセー	狂句と川柳	井上桂作	(107)
三月各地句会案内			(108)
柳界展望			(110)
■編集後記	(ひとこと／源田啓生)	尚士・朱夏・富美子	(112)



座右の句

道頓堀の雨に別れて以来なり

私の句

本能に逆らえなくて太り過ぎ

(水府)

堤 楯代

大会への参加を呼びかけた。また大会旗が北海道から鳥取県へ引き渡された。

翌二十九日、鳥取県ゆかりの川柳作家田中五呂八の句碑(住吉神社)、ニツカウイスキ一余市、小樽市内などを見学した後一路帰路についた。六月の北海道は最高の旅行日和であった。視察してきた経験を生かし、本年の鳥取大会を何としても成功させたいという気持ちがあります。高まつてきた。札幌大会を通じて感じたのは、各関係団体や組織のご協力やご支援なくしては、とても成功はおほつかないということだった。

全日本川柳二〇一〇年鳥取大会実行委員会(鈴木公弘実行委員長)では、さらに大会の成功へ向かって着実に業務を實踐してゆく予定である。

いづれにしても日本で一番人口の少ない鳥取県ではあるが、やればできるんだということを示さなければならぬ。社団法人全日本川柳協会の指揮のもと、文化庁・鳥取県・鳥取市・各種文化団体・ほか関係の団体や組織の方々、川柳愛好者の皆さん方の絶大な協力ご支援を心からお願ひしたいと思います。

なお鳥取大会は本年六月十三日(日)鳥取市とりぎん文化会館梨花ホール、前夜祭は六月十二日(土)の開催である。

皆さんもぜひ感動と熱気をご体験ください。



河内天笑選

茨木市 藤井正雄

心配が無駄で終って美味しい酒

辛口の酒にびったり匂の味

連休が迫ると翼生えてくる

人使い上手な社長菜っ葉服

独り居の母には切れぬ長電話

ぐっぐつと蓋をずらして冬を煮る

河内長野市 山岡富美子

水仙の群生春の鼓笛隊

バスツアー元気な杖もご一行

自販機の温もりを買う春の冷え

健康という贅沢を忘れがち

ほどほどに老けてるひとへ安堵感

輝くというのは重荷背負うこと

尼崎市 山田耕治

屑籠へ投げて連続フォアボール

のんびりのはず七十が忙しい

自転車に乗る姿にも年を取り

半分は自己満足の義理はたす

飲んだ夜も揃えて脱いでおきましょう

順番に電化製品だめになり

ゴミの山 性悪説に傾斜する

自販機で買う少年の好奇心

真心の余熱で溶かすわだかまり

何不足ない家の子の不行跡

一病を息災として年新た

通れ得ぬ雪だ握手をして生きる

弘前市 高橋岳水

一回忌潮騒に母月に母

泣きながら踊る日もあるフラダンス

だし巻のこれも命を焼いた色

好きな人ますます好きに冬至の湯

ゆるい靴そろそろ老いを受け入れる

偉い人だ腹の底から笑ってる

橿原市 居谷真理子

松山市 古手川 光

貧乏神も追いつまず暮れの大掃除  
究極の仕分け閻魔にしてみよう

パパが居る日の爺ちゃんはそっちのけ

ヨチヨチで始まりよちよちで終る

お隣は元気が窓は開いてるか

身震いを地球がすると恐ろしい

鳥取市 鈴木公弘

新年のあいさつまずは仏さま

仏壇が明るい今朝の爽やかさ

欠伸する女性の口のでかいこと

カーナビも妻も手放せなくなつた

完結はまだまだ先の絵巻物  
星空とあすを約束して眠る

和歌山市 木本朱夏

わたくしを置き去りにしてゆく月日

値崩れを詫びてうつむくシクラメン

艶のない林檎の方がいい匂い

オバさん度アツプウエストゴムにして

卵かけごはんにだつてある格差

詩人にはなれぬ数字に強すぎる

三田市 北野哲男

過疎のバスまず運転手から年賀

時刻表開くと放浪癖が出る

独り旅二合目あたり観自在

鉛筆のちびた分だけ脳の肥え  
甘酸っぱいイニシャルがある古日記  
よろけつつ二人三脚しています

吹田市 穴吹尚士

生き下手な親父の背なを見て育ち

プライドを捨てて男は老いはじめ

美しい人に肩入れしてしまふ

宝刀をすらりと妻は抜き放つ

満ち潮になるまでじつと鳴りひそめ

まだ燃えるものあり赤いシャツを買ふ

真庭市 福嶋智恵子

改札の向い手を振る郷の母

母の居る家族揃うた屠蘇の膳

頼もしい孫に誘われ初詣で

マニフェスト踊つた民の間抜けぶり

子育てを税金がする様変わり

伝来の土地売つた後ダム中止

大阪市 熊代菜月

賀状書く右手休業ケガのため

点滴中出来た一句はすぐ忘れ

まだ色気残しています紙オムツ

人生のあんな坂こんな坂また越える

煩惱のまだ消えやらず百八ツ

笑わせて泣かせる友にいやされる

三田市 福田好文

粗相した犬がしょぼくれ目を逸らしす

半額セール待つて店内一回り

記念日を知らぬ振りして遣り過ぐす

励ましに行つた友から励まされ

度が過ぎたお世辞だんだん腹が立つ

遊び人ばかりが増える長寿国

鳥取市 夏目一粹

布団にも貧乏神がもぐり込む

大雪にとどく新聞ありがとう

わが娘鬼灯吹くと母思う

追い込みに塾という塾煌々と

人の道踏み外すからおもしろい

どうしようもないことだつてあるのです

西宮市 西口いわゑ

せつかくの毘達はまつてあげましょう

山茶花が燃えるわたしも負けられぬ

空の青軽い嘘です許してね

鶴を折る今日わたくしの誕生日

水族館まるで乙姫様気分

咲く時も散る時も要る気品

尼崎市 長浜美籠

心ある人の賀状があたたかい

町内に引越しが来た初祝い

ニアミスを避けてそそくさ裏通り

ああこの世三文オペラ見る如し

着道楽食い道楽も熟女たり

立読みで今夜のレシビ拾い読み

真庭市 国米 きくゑ

初日の出希望をたくす新政治

生かされて七回巡る庚寅

支えられ生きております家族の和

結納の鬘斗晴れやかに床一杯

牙抜かれ草食系と化した虎

笑いの渦二歳のひ孫持つて来る

堺市 和田 つづや

万札をくずせば蝶の群になる

いつからか求人欄にさようなら

羽根布団ほこほ今朝は罰ゲーム

外食はお箸で食べる店えらぶ

齒科予約キャンセルをするそと氷雨

いのちひとつこの世の弥陀に介護され

藤井寺市 鈴木 いさお

大根の白さに妻が嫉妬する

恥ずかしい煩惱たんを持つて古稀

辞書ひいて寿命の意味を確かめる

少しずつ記憶が消えてゆく恐怖

歳重ね存在感を増した妻

マンネリの暮しを救う孫ふたり

河内長野市 村上直樹

朝日浴び今日の勇氣を身にまとい

A型でのんびりして暇がない

トラ年はケチに徹して生き延びる

徹いた種雁字搦めのマニフェスト

踏まれてもそこで芽を吹けこぼれ種

腕組んで妻ときらめく御堂筋

愛知県 早川遯行

早くて安くて旨い店見つけた

天プラがやっぱり好きなBランチ

髭生やしたいけど妻が許可しない

許されて許して夫婦五十年

事故に遭い車を怖いもの知り

寝返りの腕の痺れが戻らない

大阪市 古今堂 蕉子

マイナスへ行きたがる脳舵を切る

咳一つ二人つきりになる合図

いけいけどんどん縮んだ脳に活入れる

聞き上手言わずもがなも喋らされ

彼岸への船に道行きしたい人

一口のビール生きてるって感じる

和歌山市 松原寿子

風花のつぶやき耳を離れない

こんな手もあるからちよつとひと休み

反論も出来ずに絶える紅椿

逢いたくて切り取り線を飛び越える

涙腺が我慢できずに弛み出す

手短に届くメールに切り込まれ

島根県 持田多輝子

旅三日我家の良さが見直され

歩が悪くなったら変える選挙法

一瞬に未来絶たれるテロ爆破

信仰は極楽行きの自己暗示

居心地が悪いか論吉おちつかぬ

底辺で人の情けをかみしめる

枚方市 安達忠央

月明かりみな善人に見えてくる

どれほどのこすれあいした丸い石

叱り甲斐密かに舵が利いてくる

濁流に堤防やつとたえている

値札見てこっそり好み変えました

切り札を握りゆったりした構え

堺市 加島由一

発泡酒かけがえのない友である

三億を当てた気分で飲むお屠蘇

赤ちゃんも母を育てているようだ

見覚えはあるが離れて会釈する

泣きに来て水の流れを見て帰る

婚活を神に丸投げする親子

鳥取市 倉益一 瑠

階段を走って上がるまだ元気

太陽の季節がわたしにもあった

振り向いて欲しいわたしも咲いてます

パパペポ夫に本音言わぬまま

気がつけばひとりぼっちで立つ荒野

かばい合い坂をのぼってゆくふたり

四條畷市 吉岡 修

影武者が本人よりも強そうだ

輪の中にいてもなんでか好きさらい

あっち向いてホイよく笑うから続いている

信用がなだれのように落ちる歳

振り向けば吐息まじりの轍あと

嫁さんのさとへ帰ってゆく息子

鳥取県 佐伯やえ

母介護ごんた人間らしくなる

誰の手もかりず自宅で母看とる

ほんものの笑顔で声をかけてくる

あばずれ衣脱いで休まるごんたの背

二度と母さん泣かすでないよ抱きしめて

これからが君の人生くたばるな

堺市 志田千代

婆ちゃんの昔話を聞きたがる

子に孫に話したりない事あまた

追伸に父も元気と書いておく

ボケた人にもブライドはあるのです

今年から姉への年賀ケアハウス

監督の器ではないお人好し

弘前市 高瀬霜石

秒針の音が気になる負け戦

言い訳はイヤだがやはりしてしまふ

付けざるをえなくて付ける鬼の面

手に職があると小銭が降ってくる

生と死の間に欲しい恋の文字

うきうきはするがはてさて妻の留守

鳥取県 松川行男

正月飾り間引かれて行く町並み

三日目も健康器具があくびする

君が代を歌わなくても年が明け

初詣で四駆で行くか降りしきる

さあやるかよしやろう今煮詰めてる

初夢は金魚の糞の後仕末

檀原市 安土理恵

千両万両小さく活けて春を待つ

燃えて燃えてまだ足りないかなななかまど

燃え尽きてしまえば楽になれるのに

カラフルな嘘ポケットが騒がしい

日が落ちる踏ん切りつける時は今

ポケットの由緒と冬の街を行く

堺市 柿花和夫

朝酒のトラを宥めて初詣で

パチンコ屋の自動扉はサツと開く

真ん中に座ったことのない写真

ポロポロの言い分け妻は聞かぬ振り

かさ蓋を引っぱがしにきた柵

パトカーがゆっくり走るので遅刻

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

お豆腐を切る包丁をといでいる

笑いたい時に笑えるいい身分

頼りないけれど好かれているらしい

計りごとありそう赤い薔薇くれる

坂を越す荷物は軽くしておこう

歌えない曲と小皺が増えてくる

八尾市 生嶋 ますみ

ブライドをちよっぴり添えてお年玉

南天の赤で華やぐお仏壇

上品な皇后さまにあるカラー

子はあてにせぬと心にないことを

今日もまた自分を笑う物忘れ

マスクの花すこし盛りを過ぎたらし

鳥取市 武田 帆雀

ペンキ屋の制服油絵の如し

塩爺も用心棒で役が付く

餅腹で搔く一尺二寸の雪

かあちゃんの余所見で酒を満たしたり

空模様古いラジオがよく当てる

車があるからチャイムを押し続け

まつさらに心リセットする初日

賀状来ぬからと心配してくれる

お節を作らずにホテルでバイキング

帰らない子に東京へ会いに行く

自立して欲しい側にも居て欲しい

老いて子の夢を邪魔せぬよう生きる

スーパーの近くに地産野菜店

スーパーにこの頃目立つお爺さん

三角のてっぺん強い風当り

富士山に負けぬ三角伯耆富士

手招きをすると逃げ出す迷い猫

雪が降るあの猫どこに寝るんだろ

初春の祝儀に株価ちよいと上げ

草食のイケメン踊る歌合戦

どん底に居てもパプルの夢を追う

酔いしれるほどは呑めない忘年会

口いっぱいあけてとにかく笑いたい

牛井の十倍妻の化粧代

大阪市 板東 倫子

倉吉市 松本 よしえ

— 9 —

豊中市 水野黒兎

引力を味方につけて砂時計

子に孫にあれこれ習うことが増え

菜箸に慣れぬ男の味加減

マニフェスト全部守れば破算する

俗塵をいとわず冬は縄のれん

二階まで来た目的を考える

神戸市 両川無限

長いことこき使われた女偏

憧れの都会で孤立するロマン

長い道亀に拍手を惜しまない

不器用で一途な恋もいいもんだ

握手から始まる長いお付き合い

円周を回っただけの片思い

羽曳野市 三好専平

オキナワに行って耳鳴りひどくなり

太陽をアテにしているエコブーム

運鈍根その上カネのないわたし

曲がつてることがきらいで外される

パチンコで擦って生活保護を受け

天元の一着勝ちにこだわらず

阪南市 森村美花

寒に耐え蘭が決意をくれた朝

トトロ口の温泉心まで洗う

頑固になってしんどくなつたまま夫婦

午後のコーヒー少し優しい風になる

結び目に水仙の香のふんわりと

二人しかいませんそんな怒鳴り声

堺市 村上玄也

入試より就活目立つ絵馬の願

目配せを気付かぬ振りでやり過ぎ

臓器移植役立つ部位は何もない

先々の約束出来ぬ歳となり

閉店と決まると惜しむ声が出る

落しどころ心得ていてする主張

三田市 久保田千代

行き届く介護受けるに金不足

安っぽい涙流した悔い残る

耳よりな話へ風が騒ぎ出す

関わったことで私が育てられ

追伸にまだ言い足りぬことがあり

古傷を忘れなさいと落葉舞う

堺市 大久保のん子

他人には希望退職したといひ

あれば買う前頭葉に効く薬

病室へ気休めの嘘置いてくる

忘れることが普通になつてくる怖さ

粗大ゴミ思い切れない戦中派

金儲け何でもありの世の中だ

枚方市 伊達郁夫

風の謀反妻が確かに聞いている

明日まで待とう必ず道出来る

話し合う形で並ぶ筈二膳

髪一本こころの一部だと思ふ

約束はないが爛つけあなた待つ

冗談を許せる酒と怒る酒

豊中市 松尾美智代

一病を宥めすかして元気です

気合入れ手作り詰めるお重箱

除夜の鐘夢と現の境にて

夫と二人のんびり過ごすお元日

また太る少し悲しいお正月

ふる里に帰らずふる里を思ふ

大阪府 野田栄呼

店員と親しくなってお買物

耳と目は人並み保ち散歩する

心配ごとないのか朝のひと眠り

繕って平和維持する三世代

家族みなパン好きですが米作り

感情のコントロールに鳩気骨

羽曳野市 安芸田泰子

新成人昭和も遠くなりけり

急に来た寒さへ老いはうろたえる

短日へ家事それなりに省くなり

衝動買い鍵をつけたくなる財布

憎しみを握りつぶした手を洗う

用意した嘘がすんなり出てこない

鳥取市 福西茶子

仏壇を持って親しくなる花屋

イエスノー言えずニッコリして躲す

お日様があたる窓辺に昼寝する

戒名の凹みに蜘蛛が住んでいる

千円の道はCO<sub>2</sub>の海

松葉ガニ横目にサンマ買ってます

鳥取市 山宮愛恵

上肉か特売品か手が迷う

添加物それでも食すほかはない

反論のセリフはじっと時を待つ

ありのまま言う積木がぐずれそう

赤裸裸になるには修業が足りぬ

自己採点三角にして今日閉じる

奈良県 渡辺富子

目を閉じるときふるさとの大銀河

思い切り叫びたき日の冬木立

音信不通の友の訃報が届く冬

福祉の灯待って凍てつく青テント

薄味の夫婦になつて露天風呂

もう一人の私が夢をけしかける

竹原市 岩本笑子

野仏の温さ優しさ春を待つ  
ラッキーな雪花びらにそつとのり  
鍋奉行夫の白菜甘いです

ゆつくりとおでんが煮えている午後だ  
幸せの種を毎日蒔いてます  
お葉さんとガンと仲良くしています

高知市 小川てるみ

ときめきもたくさん欲しい古希の春  
生きている実感朝の深呼吸

振り向いて欲しくて買った春帽子  
引き金を引くには遠い射程距離  
笑顔には倍の笑顔で返します  
ケセラセラそんな日だつてあるのです

鳥取市 西川和子

閉じ込めた本音が頭出したがる  
さりげなく本音で胸を突いて来る  
袋から本音次つぎこぼれ出す  
こぼれ出る本音を友が聴いてくれ  
本音からそのお人柄見えて来る  
本音からとんとん決まるいい話

神戸市 田中章子

浮かんだ句三步で沈む記憶力  
へりが舞うそれだけで空さわがしい  
脂肪減り寒さ骨身にしみてくる

何ごとも面白がつて生きんかな

手から手へ晦日の市の温かさ

解決が難しくなる先伸ばし

大阪府 初山隆盛

がむしゃらに愛は奪えと春あらし

封印の愛を解いた春の風

物言えば唇寒し不況風

極楽も覗いた法話花が咲く

善良なところで綴る愛の文字

つぎの世もきつとあなたの舟にのる

吹田市 須磨活恵

譲られた席へお辞儀をして座る

生きてゆくパワー太陽から貰う

不況風追い打ちかける大寒波

歩には歩の飛車には飛車の悩みあり

幾山河越えた夫婦の根深汁

寒風に無言の強さ冬木立

三田市 堀正和

大丈夫ビールで嗽しています

身長の縮み具合も知るドック

妻の辞書時効の文字はないらしい

年だなあボディープローがすぐに効く

勉強になりましたとの負け惜しみ

銀傘と芝生を替えて春を待つ

高石市 浅野 房子

トートバッグ忘れるなんてドジを踏む

バイキング食べ放題はもうあかん

五時からモンゴル相撲見えています

オクターブ上げて熟女も谷間見せ

シルバー席杖で立っても無視される

大晦日百人一首買いました

吹田市 太田 昭

元日に家族の絆確かめる

七十五歳に切り取り線を入れられる

禍も福もごた混ぜにしてどんど焼き

褒められて愚痴の捨て場を見失う

憂鬱の闇を絵筆で塗り替える

身の丈に合ったチャンスがまだ来ない

豊中市 安藤 寿美子

ちよい呆けの八十五歳日向ぼこ

賀状見ましたと旧友から電話

お神酒上げお相伴してダウンして

太陽暦大つもごりに満月が

うしろから来て葬儀社のチラシくれ

しらぬ間にはばくさいこと言うている

鳥取市 吉田 弘子

神棚を掃除ゴキブリを拝んでた

温暖化太陽君はしらん顔

ある時は人を帰さぬ冬の山

巻き戻しするのはよそう明日がある

いくばくの余生この世に遺すもの

戦前派昭和レトロが懐かしく

大阪市 升成 好

すぐ書けば一行で済むお礼状

居酒屋で拾うおんなじ周波数

拾う神捨てる神ほど居てくれず

明日の夢白い頁で待つ日記

してみたことの一つに弾き語り

暴言を打ち消す倍のエネルギ

大阪市 原田 すみ子

矢面に立てる女になれてない

若くなく老人でなく成熟期

それなりの自負がわたしを働かす

あれ以来ふつ切れ笑顔板につき

平凡な明け暮れ感謝できる歳

元気な友病む友もいてひとつの輪

大山市 関本 かつ子

日の丸の赤元日の雪に映え

甘口が似合うロマンス聞くお酒

持ち越した掃除春まで先延ばし

無事着いた電話で終る三ヶ日

消しゴムの跡もうれしい年賀状

デパートの店員ばかり目立つ階

神戸市 山口 光久

気休めに張子の虎と遊んでる  
安い酒量が過ぎたか虎になる  
虎刈りも女の愛だと思つてる  
究極の暖には猫を抱きましょう  
ふる里にじっと見守る友ひとり

神戸市 山口 美穂

DNA亡母そっくりの丸い背  
震災と戦争まだトラウマを持ち続け  
ひとりひとりちがう傷もつ十五年  
言わんところ年相応の老いとして  
笑顔笑顔朝の鏡に教えられ

神戸市 山田 婦美子

お人柄分かる手書きの年賀状  
お歳かな少し震えている書体  
個性ある賀状だんだん消えてゆく  
お雑煮が喉に危険な家族です  
未知数があるから挑戦したくなる

神戸市 木村 貴代子

寅さんの録画失敗ふて寝する  
孫連れてお食事鳥の親になる  
御自慢の酒器に水仙匂わせる  
年取れば損得よりも軽い方  
かくれんぼ見つかるように隠れてる

神戸市 伊勢田 毅

古里の川にきつちり還る鮭  
まるで姉妹と言われて母の得意顔  
泣き上戸まるで幼児のような友  
満二十子等の老後をふと想う  
震災後路地の温もり消えた街

相生市 中塚 礎石

三つ目の足を頼りにして歩く  
桜花酒の喧嘩にかかわらず  
八十路坂まだ捨てられぬ鬼の面  
縄のれん正論を注ぐ独り酒  
失敗を許してくれる百八つ

芦屋市 黒田 能子

台本通りしゃべってるからつまらない  
輪の中のわたしの椅子がきしみ出す  
やわらかくタツチやさしい手のひらで  
横糸が丈夫縦糸くたびれる  
赤いシャツ迷い子になった男の子

尼崎市 軸丸 勝巳

紅白の葉ぼたん植えて新春を待つ  
もう着ないもう読まないが捨て切れず  
懐しや手書きの賀状声がする  
お雑煮もめでたく通過老いの喉  
腸検査無罪放免最敬礼

尼崎市 春城年代

なでなでしてそつと立たねば痛む膝

追憶がここにもあつた通過駅

おせちさえ略し略したひとり膳

日の丸の校門くぐる霜柱

指定席はずれてからの自由人

尼崎市 加川靖鬼

適当に息を抜くから生きられる

道草が肥やしとなったメタボ腹

放射冷却地球が窓を開けている

乾盃の中味はいつもウーロン茶

棟梁は頭の中で家を組む

伊丹市 山崎君子

胡蝶蘭つばみふつくら春はそこ

お正月雑煮のあとはコーヒーで

さくらさくら昔を憶う琴はじめ

今年こそ身辺整理すつきりと

お年玉子供のように待っている

加西市 金川宣子

大画面皺のアップにはつとずる

あれこれと誘い込んでるコマーション

ピンヒール見栄と気負いで音をたて

肌チエツク若く見られて笑み消えず

草食系領域犯す化粧品

川西市 西内朋月

心配の白内障が無事に済み

焦点を絞ると謎が解けてくる

着膨れたマスクの顔で乗る電車

仏壇の喧嘩相手に鉦たたき

塩漬けの株を抱いてる不整脈

川西市 米原雪子

冬枯れの庭に芽を出すチューリップ

なんとなく気になる朝の立ち話

団欒に二歳児主役演じてる

たっぶりの嘘で丸めた褒め言葉

世界遺産文化のすごさ見るテレビ

三田市 白井二英

入れ忘れオジャンになったシクラメン

マスクとり堂堂入るキャツシング

トラの像マンガチックが親しめる

リハビリの遅遅と進まぬもどかしさ

リハビリの指にボタンの煩わし

三田市 石原歳子

切り抜き料理記事から晩ご飯

サンブルに惹きつけられてレストラン

立ち話小犬が傍で欠伸する

夫の昼寝少し時間が長くなり

珍しい野鳥がいるぞ忍び足

三田市 上垣 キヨミ

西宮市 山本 義子

別人の心が宿るお正月

年寄りの忘れた振りも処世術

黒猫のバイトを使うサンタさん

大掃除三日もすれば元通り

ばあさんは手持ち不沙汰の大晦日

西脇市 七反田 順子

ワクチンをチクリと射つて歩いてる

賽銭は大きな音で鈴鳴らす

駅長の猫に絆されメールする

湯にひたり一年の計考える

本年もレモン一滴命綱

西宮市 藤本 直

人生は道場などと思う日も

ブランドを捨てた時から老いたよう

いつ起きていつ寝ても良い身分にて

月光にさらしてみるかこの憂い

子のためと母は言わずに励むのみ

西宮市 牧 潤 富喜子

この駅に来ると今でも会えそうなの

失敗を少し語れる立ち直り

仕分け人ひとり欲しい年の暮

窓拭きも無事にこなしていとうれし

着替えると新成人の顔になる

ぐんぐんと加速してます認知症

手離した風船おいでおいでする

春夏秋冬ぐんぐん変わるテリトリ

ぐんぐんと森けずられてから会議

連風のなかの一つがへそ曲り

西宮市 亀岡 哲子

手も足も脳もまずまずおらが春

水ポタリ小さなエコの栓止じる

有名人でなくてネタにもならぬ罪

大吉から凶まで揃う初詣で

だまし舟のような変化に乗せられぬ

西宮市 秋元 てる

老夫婦のつないだ手と手冬日和

賞味期限自分で決めて日々元氣

今朝の夢過労死の蟻丸くなり

目を病めば好きな敷石道遠い

距離置いた付き合い出来ぬ親ゆずり

西宮市 緒方 美津子

息子の声リフレインして受話器とる

居眠りが出来ぬ招待席のバラ

ビニールの傘たまってる共稼ぎ

ニッカポッカー脱いで成人式の席

感動の黒い太陽二〇〇九

西宮市 片山 忠

切れ者がひとり混じると座が白け

アカペラで祝ってもらう披露宴

悪いのは私ですという強気

割り勘が好きな男の下り坂

お流れに生きて妻子を困らせる

明石市 梶谷 和郎

余白まだ残して越えていく六十路

悪たれを吐くと寒さが口に沁む

怒るまい胸に納めた五寸釘

靴音の響かぬ町が老いていく

図書館の本の折り目が気にかかる

姫路市 古川 奮水

普段より早目の出社霧の朝

心筋梗塞体重減らす努力中

とんかつにビール体重また増える

牌触る欲を抑えて寄席入る

成人式明るい風の街歩く

奈良市 米田 恭昌

背信の傷癒えぬまま年暮れる

国債という借金背負い呱呱の声

零歳の孫の名もある祝い箸

夕暮れの壁を相手に母待つ子

木簡が古代のグルメ自慢する

生駒市 飛永 ふりこ

熱爛で苛つく虫が喉を越し

バーゲンにサイフもエコを叫んでる

どんど焼き炎に籠める寅の吉

湯気囲むみんな元気が宝もの

釣りバカの芸域惜しむ花道に

香芝市 大内 朝子

もう一度燃えて吠えたい年女

飲助の形ですごく三が日

世につられユニクロも着るおばあちゃん

なまくらへ冬將軍の平手打ち

立ち直る気力へ四股を踏む心

大和郡山市 坊農 柳弘

追い越した位置に初心を置き忘れ

ピアノソロおぼろ月夜のノクターン

向き合えばそつと恥じらう沈丁花

晩節に余白残して職を辞す

見つめれば和音楽でるシクラメン

和歌山市 喜田 准一

自信つき声が大きくなって来る

片付かぬ話はいずれ四捨五入

子守唄聞えて母が甦る

この辺で泣けば効果があると知り

妥協点探り当ててる年の功

和歌山市 古久保 和子

和歌山市 武本 碧

お隣の魔女がリンゴのお裾分け  
書き損じまたごみ箱へストライク  
エレベーターエスカレーター探す足  
薄っぺらいカードに詰まる記憶力  
たわいない嘘を転がす冬の酒

和歌山市 松尾 和香

成人式荒れる心の悲鳴聞く  
遠い日の道草ばかり続く旅  
順の無い片道切符手に生きる  
今日からは普段通りに進む時  
寒梅に元気をもらう古希の春

和歌山市 岩本 美智子

小正月小豆粥炊き母想う  
一輪の蠟梅馨り寒の入り  
紅梅も負けじと蕾冬陽吸う  
梅南天水仙木瓜と庭の新春  
鏡開き水餅を待つ寒の水

和歌山市 堀 富美子

ファミリィが今年も揃う屠蘇の膳  
除夜の鐘一つひとつに消した罪  
折り合わぬ日も許し合う血の絆  
オセチにも飽きて目刺しをちらつかす  
巫女の孫をそっと覗いた初詣で

わだかまり溶けてほのぼのかごめの輪  
足るを知る心が眉を丸くする  
テレビ音上がつて気付く老いの耳  
幸せを貯め込む袋持っている  
棚はたを掴むとささる後指

和歌山市 坂部 紀久子

今年こそがもう崩れ出す小正月  
百円の募金深々お辞儀され  
カーテンを二重に閉めて孤独なり  
一人こたつお湯のみで手を温めてる  
他言せぬ事で水面穏やかに

和歌山市 福本 英子

咲いた咲いた春待ちかねた紅椿  
おみくじを結ぶ枝にも待つ蕾  
成人式終え振袖の手に煙草  
成人式せぜずに来ました八十五  
ワインのコルク上手に抜けたことがない

和歌山市 玉置 当代

大吉のみくじに心引き締める  
明日への夢を咲かせる種を蒔く  
顔色をバロメーターに始動する  
世の変化じつと見ている木守柿  
持っていたみかん潰した大相撲

和歌山市 田中みね

土砂降りに遭おうが欲しい総理の座  
節約に節約重ねどこか抜け

旅人となるには財布軽すぎる

とんずらの行方突き止め目が覚める

鳩山家ほど要らないけれどお金欲し

田辺市 岡本昇

スパイスが手の平にある握り鰯

あの人はいい人だった黒リボン

かみさんの作り笑いに負けました

来賓の派手なリボンに座が白らみ

定年後やっとおさらばアデランス

海南市 堂上泰女

イチゴ大福食べてる孫が羨し

好きという心生命の潤滑油

年末もハローワークは忙しい

悠々と師走の月は照っている

潔癖を叫ぶ総理の億単位

鳥取市 土橋はるお

今ここで本音言わすと角が立つ

斜めから見ている人の目は寒い

徳利が奏でる音が大好きだ

待ち伏せのお巡りさんが切符切る

戸を開けるたびに舌打ちするでない

鳥取市 土橋睦子

春待った野菜も土を持ちあげる

丁寧な書いたレターが舞いもどる

盛りあがる宴にひとりで蟹つつく

吊し柿食い頃待てず味見する

玉子酒飲んだ順から寝てしまふ

鳥取市 加藤茶人

総懺悔そんな昔に似たマスク

金返せ借りた感謝はすぐ忘れ

ない袖は振れぬ無理マニフェスト

あの人に逢える死なんか恐くない

ひと通りやって無様なりバウンド

鳥取市 中村金祥

まっ白い新年迎え奮い立つ

水仙の強さに勇氣もらい受け

ミス日本迎え知事室春が来る

まだ寒い桃の季節と言うけれど

民主党一度ご破算したかろう

鳥取市 岩崎みさ江

脇見している間に変わる世の流れ

絶望はしないよ若い芽は育つ

人間は阿呆阿呆と鳴くカラス

躓いた道の小石へ礼を言う

失ってしみじみ思うありがたさ

鳥取市 近藤佳子

思い切り泣いて私に句読点  
芒野の風は母恋う歌になる  
日本語が生き生きしてる喋りよう  
路地に黄が映えて石路咲きのこる  
奨励金にのぼせた杉で花粉症

鳥取市 池澤大鯨

池一周今日の予定を消化する  
雪の肌目くらしとは知りながら  
雪見酒気の合う友の一二入  
旅行には朝五時起きで出発す  
収入が決まってるので似た予算

鳥取市 池原天馬

サクラサク祈った孫も卒業す  
廃校の校門前の桜咲く  
死なないと思えた友の知らせ聞く  
同窓生八十の坂落伍増え  
無住の家二十年かけくずれ落ち

鳥取市 春木圭一郎

開け放つ心へ縁は見えてくる  
一步でもいいから前へまず進む  
今日よりも明日は良い日と信じ切る  
歳をとるこんな素敵なことはない  
目標や夢持ち明日が待ち遠し

鳥取市 岸本孝子

虎年に猛虎手ぐすねひいて待つ  
いよいよと思う一千号の初春  
ふた月を雪と戦い春を待つ  
気がつけば他人の苦勞までかかえ  
欲張ってどれにも目的が定まらず

鳥取市 宮脇道子

会うたびに老いが増してる我が友よ  
温暖化夢みた冬も雪世界  
雪降って喜ぶ子等も居ない里  
宝くじ一時の夢消えて逃げ  
夢を追う孫の頭を覗きたい

鳥取市 岸本宏章

顔洗う顔は冷たいとは言わぬ  
節約は美德でしょうか総理殿  
靴の中の砂一粒がいけずする  
凹凸がなければ地球海ばかり  
落ち目には風も斜めに吹いてくる

鳥取市 田村邦昭

そこまでもブライド捨てて生きられる  
よく映る鏡の方に足がむき  
パソコンにからかわれてる八十路坂  
老後とはいわれぬほどにまだ元氣  
悲しみをかくすのれんが待っている

雪しんしん母への粥も炊き上がる  
老後にも人生模様と織る

鳥取市 奥谷彩子

肝っ玉妻で我が家は婦唱夫隨  
減反に我が物顔のあわ立ち草  
聖人もときに内緒の鬼も抱く

鳥取市 福永ひかり

仲直りできず止まっている時計  
大打撃ドバイショックは我が家にも  
七草がおなか休めにちょうどいい  
来客のてんやわんやも幸のうち  
不確かな明日へ予定入れている

鳥取市 太田幸枝

あれこれとカードで財布ふくれている  
カードさしドアがあいたりしまったり  
仲良しの友が元気でいい気分  
灯を消してゆつくり今日も感謝する  
新婚の賀状幸せそうな顔

鳥取市 中宇地秀四

快い笑顔を見せる恐い人  
波瀾万丈あのどん底が懐かしい  
石一つあって流れが右左  
財布にはカード一枚守り神  
もう止めて恥の上ぬり負け惜しみ

鳥取市 永原昌鼓

正月も盆も介護の手は抜けず  
ご先祖へご無沙汰詫びる介護の日  
夢を追う靴は老いてもよく弾む  
やあやあと言い合う仲間減っている  
日本の庭を彩る錦鯉

鳥取市 平尾菜美

ざらざらの私を磨く鍋磨く  
集中力貧乏ゆすりだけとはね  
これしきの我慢彬の碑を思い  
掃き溜めで見つけた母の知恵袋  
成長へ家族背負って燃える父

鳥取市 有沢せつ子

今年こそぱっと一花咲かせたい  
音もなく三十センチほど積もる  
マスクしてにこやかな目が会釈する  
買った値が処分させない着れぬ服  
飽食の舌が大根好きになる

倉吉市 最上和枝

一匹の蚊を追う両手喧嘩する  
グーとパーこれも凸凹かも知れぬ  
宝くじ得を求めて損を買う  
白菜が雪をかぶって甘くなる  
放浪は地図の上だけ目で歩く

倉吉市 山中康子

樂せよと好き放題もらくでない  
鈍行を促すように肩たたき  
芯のある男性選つて娘は未熟  
表には出さぬ男のど根性  
頭コツン叩かれたいか浮かれ過ぎ

倉吉市 野口節子

身の内の鬼を鎮めるロゼワイン  
考えがやつと纏まり飯にする  
考へては居るが躓く日に三度  
四季折々の風を楽しむ散歩道  
石段の途中で膝が駄々こねる

倉吉市 猪川由美子

有り余る資産と愛で母乱す  
年賀状出した途端に訃報来る  
住んでえな名古屋税金安いぜよ  
一ランク下げてお節の今年です  
ポスト鳩山またゾロ真紀子担ぎ出し

倉吉市 牧野芳光

山陰は冷凍瀬戸は冷蔵庫  
蕾のない枝にも春が来ますよう  
躓いた石先生にして生きる  
泣きに行く故郷だけは放さない  
童謡に六十年がひとつ飛び

米子市 白根ふみ

乱世に虎が参上何とかせい  
喪中はがきにわたしは未だ生かされる  
冬ごもりどつぶり余命リフレッシユ  
計画は身の丈ほどで丁度よい  
余情なんてはや日めくりはせかせかと

鳥取県 深田俱久

職退いて二十数年またたく間  
高齢化体内時計要修理  
杖を休ませて鍛える足や腰  
しあわせな山椒魚がメタボ気味  
はずれ籤とんに燃して厄払い

鳥取県 細田裕花

ほか弁がすっかり冷えた立ち話  
くだいなあまた悪口を言うテレビ  
陽だまりへ人恋しくて寄つて行く  
冬眠のうちに修復痛いキズ  
還暦のたましい模様替えをする

鳥取県 竹信照彦

元旦は雪降り積り寝正月  
孫がいて忙しかった冬休み  
山陰はやっぱり山の陰である  
虎の尾も踏んでみなけりやわからぬ  
吼えてみるだけで老いても年男

鳥取県 北村 稔

熱爛に松葉蟹とほいい気分  
朝風呂にユズをうかべて深呼吸  
髪飾り親がうれしい七五三  
野菜たち仕訳の気持わからぬ  
飲んで寝てまた起きて飲む雪雪雪

鳥取県 山本 正光

腹の虫ぶつぶつばやく休肝日  
議事堂へ天狗の鼻を折りに行く  
沖繩の基地を背負って年明け  
借金がかさみ年の瀬家ごもり  
晩酌はいつもの如し昼は昼

鳥取県 石谷 美恵子

いい顔で帰ろうあかりついでいる  
健やかに軽いコントで越す老後  
夢一つやがてやがてと捨て切れず  
冷やめしの味知りつくす大物だ  
神さまがわたしにくれた肝っ玉

鳥取県 山下 節子

火の恋がまねいた波紋大き過ぎ  
リハビリに全エネルギーかけている  
遅刻した罰で上座に座わらされ  
冗談を本気にされて後ひけず  
漬物を褒められやと主婦になる

松江市 三島 湊丘

根雪溶けわだかまり溶け春がくる  
二人逝き一人生まれる過疎の町  
虎の子を握って老いの縄のれん  
傷口が開かぬようにチャックする  
卵かけご飯に七味唐辛子

松江市 川本 畔

初夢は卵を三つ生みました  
行きずりの天神様に手を合わす  
三人寄って文殊の知恵を生みました  
父さんの部屋の温度が気にかかり  
神様が逢わせてくれた夫と居る

松江市 松本 知恵子

虎寅トラあちこち飾り猛ダツシユ  
大寒を待つまでもなし雪の責め  
還暦なお深夜ラジオが止められぬ  
ラジオから拓郎の声出る元気  
半額値もう売れはせぬ正月品

松江市 安食 友子

珍紛漢眼を閉じて聴く浅学よ  
フアイトだね長生きごっこだね蓄  
凜とした杉に負けないよう加齢  
面映ゆいでも好きだもの綿飴を  
紙とペンやおつかなくなつた指

松江市 小川 注湖

リハビリに妻の手温くまた一歩  
無人駅生け花匂う通り抜け  
釣り逃げた魚より話大きけり  
ワイングラスしつとり指が玩ぶ  
台所スーパ―に持つ若夫婦

松江市 津川 紫晃

くすり飲む時間時計が知っている  
屁理屈をぴたりと止めた咳払い  
こんやくがうるさい鍋に蓋をする  
自慢話茶を注ぎ足しておしまいに  
傘なくす一日一善したあとで

出雲市 富田 蘭水

大根の七草ガユに拍手する  
まっ先に暦をめくる今日の運  
二匹の金魚仲よくもう七年目  
病院のマスクマスクで外へ出る  
信じてた女のゆくえ分らない

出雲市 石倉 美佐子

三月の菜の花畑まっさかり  
白い句集の虜になって二三日  
日傘くるくる歩いてるのは亡母のよう  
お皿がとんで茶碗が飛んで治まりぬ  
塩瀬の帯結んで会いに行こうかな

出雲市 多久和 敬子

音痴でもばあばの歌ですやすやと  
虎の子のタンス貯金が孫に消え  
人生の支えに亡母の虎の巻  
ここに来てやつと互いに感謝する  
四十五年あなたの色に染まって来

出雲市 小白金 房子

鏡餅めでたい杵の音で搗く  
祥月へ先祖をまつるお赤飯  
御神前の笛に額づく初もうで  
去年今年励む牛舎の窓明り  
四世帯感謝で暮らす雑煮はし

出雲市 岸 桂子

背を軽く押されて古稀の坂登る  
また春が来るから夢の種を蒔く  
一月を角度を変えて見る世間  
ほめられて集中力が乱される  
にっこりと降参すれば勝ちになる

出雲市 森 茂美

日本海沿うて鐵路は北へ伸ぶ  
尋ねたら小さいお声で白寿とか  
飲むことを忘れてました朝葉  
照明灯パチリパチリと点る路  
亡妻の小言聞きたくなってきた

島根県 伊藤 寿美

府中市 藤岡 ヒデコ

来た道に転んで起きた跡がある  
墓道に手摺をつけて喜寿を越え  
ネジ捲けば昭和を喋る古時計  
キトラ古墳の虎は草食かもしれぬ  
メール渦巻く街でゆつくり老いてゆく

倉敷市 撰 喜子

府中市 馬場 利子

開けごま閉ざす心に呼びかける  
退職した夫に外出ふえた妻  
年とれば願いは一つ長寿だけ  
真実は一つ冤罪なぜできる  
余生いま趣味の外食して太る

美作市 山本 玉恵

府中市 岩本 雅代

センスアップ老いの頭にのる帽子  
ひとり身の背なにやんわり風は春  
待ってたよの優しい声を道づれに  
卒寿今夢二つ三つ抱いて候  
散って行く命へ今日をねんごろに

美作市 福原 悦子

竹原市 石原 淑子

拳をしつかり握り出し渉る  
冬母朝の幸せいつまでも  
充電に新刊書読む夜が深い  
冬木立生き抜く話聞くように  
人並に生きると光る風景画

暖冬と油断寒波に縮こまる  
町起こし肩に重荷のお雛さま  
ギンギラの波にハンドル盗られたか  
さしむかい熱いコーヒーに溶けるうつ  
寒の月水音だけが支配する

長つづきする親友へ踏み込まぬ  
姉妹とて違う器量も性格も  
人並みと申す器は大きすぎ  
あっち向いてホイ気付かぬうちにそうなった  
身から出た錆に終生肩すばめ

錆ついた心を洗う流れ星  
スーパーの競り合うチラシ客を呼ぶ  
救急車茶の間の話題とんでゆく  
JR狂わぬダイヤ世界一  
母と子の笑いの中で鎌を研ぐ

春の雪椿の花が凜と落つ  
とんど祭襖新たな仏間の灯  
我が部屋でやつと落着き仮面脱ぎ  
吹雪舞う窓の景色に夫偲ぶ  
寅の年きびしく明けた春風

竹原市 時 広 一 路

目の高さ合わせば意見合つてくる

標札の一つ一つが持つ誇り

十指みな元気で僕を助けてる

年齢に応じてくれている手足

どちらでもどうぞ直球変化球

宇部市 平 田 実 男

蜜のある人には媚びる夜の蝶

孫二人成人式で細る脛

小の虫持て余してる民主党

ワンカップ肴は妻や子の笑顔

喜寿過ぎた指をからかう小さいネジ

美祿市 安平次 弘 道

シンプルなくらしジヨークが足りませぬ

呼吸も脈もあるが気になる不整脈

びっくり箱開ければ疲れどつと出る

渋滞の中で五欲を捨てて来る

アナログの脳がわたしを責めてくる

東かがわ市 川 崎 ひかり

ふる里に生まれた家も父母もなし

妥協するたびに理想が遠ざかる

一泊以上してはならない妻の里

動揺を隠すマスクとサンングラス

もうとまだの狭間でひとつ年をとる

東かがわ市 伊 勢 八重子

日向ぼこ愚痴三昧を聞かされる

年金の中で生活を組み立てる

都合良い事だけ聞く耳あれば良い

穏やかに介護されずに終りたい

自然体生きるこの道喜寿の春

東かがわ市 清 川 玲 子

歳月が沁み込んでいる丸い背な

母の背がゆりカゴだった幼年期

美人ママから渡される請求書

渡せなかったチョコは自分の口に入れ

寅年に男の孫が増える幸

東かがわ市 原 賢

連れだった病に負けず三十年

夜が明けて寝るまでの世話ありがとう

本心を話せば誤解とけてくる

厳寒を耐えた大地に芽吹く春

不景気が悲鳴となった年を越す

松山市 高 橋 宏 臣

襟足をすつきりさせて去る唇

一言が添えられ賀状呼吸する

逃げ道を塞いだ嘘が慰める

おしゃべりが過ぎた二人のオルゴール

末席の美学だ背骨真つ直に

松山市 宮尾 みのり

正月の箱根見事なハイビジョン  
ユニクロへ人は流れて街沈む  
ささやかな平凡でよし回る寿司  
咲いて散る人も自然も四季巡る  
カラオケへ行く八十の雀の子

大洲市 中居 善信

凧も独楽も消えてしまったお正月  
雑貨屋が消えて久しく凧が無い  
墓掃除ふと思いつく年の暮れ  
年賀一枚繋ぎとめてる縁です  
啓蟄の頃には野良へ出る積もり

西予市 黒田 茂代

自分ではコントロールの出来ぬ夢  
どう塗ってみてもわたしの顔である  
守る人居ないお墓は作らない  
何食わぬ顔で持つてる一家言  
存在感茶の間に残し父が逝く

高知県 小澤 幸泉

さよならの子らが可愛ゆく見えてくる  
秘められた歴史をさがす龍馬伝  
古財布母の涙が貯めてある  
へそくりの財布の底が破れだし  
傷ついた鳩に平和を聞いてみる

唐津市 市丸 晴翠

孫自慢したいが嫁が見付からぬ  
兼好も酒万病のもとと説く  
脚腰の弱り繕う糸が切れ  
手抜きしたおせち私の胃に眠る  
擦れ違う家族取り持つメモ用紙

唐津市 山口 高明

干潮の岩礁に微笑む浮き不動  
艱難辛苦与え給えと祈らない  
銭で購う平和何時まで続くやら  
我が家にも機密費認可願います  
甘言で国民騙す詐欺集団

唐津市 坂本 蜂朗

妻はトラ怯えて過ごす檻の中  
妻はトラ息を殺して耐え忍ぶ  
昨晩のトラが上目で妻を見る  
幅広い知己は得難い虎の巻  
虎の尾を踏みつけてみる好奇心

唐津市 井上 勝視

企業より下方修正続く民  
有難い裁判員になれぬ輪  
生きている者の都合で年回忌  
出番なき隠居の日暮れ静かなり  
朗らかな嫁は姑と仲が良い

唐津市 樋口輝夫

八十路来てどつと染み出す赤い痣

沈黙は金とむかしは教えられ

畑土産どつさりもらう里帰り

真つさらのタオルで包む呱呱の声

新政権野党の癖が抜け切らず

熊本市 永田俊子

わたしの道に句読点打つ除夜の鐘

新しい風が苔むす樹をゆする

義理捨てて寝返りをする空きつ腹

仮面など要らぬよ土に生きている

最後までじわり聞かれる恐ろしさ

熊本市 岩切康子

失礼を一つずつ減すゆとり出来

突然に乾杯音頭指命され

小春日に隣と久しく立話

立話夫に呼ばれてさようなら

店内を三回巡って歩数足す

熊本県 高野宵草

背伸びせず生きてた御蔭今の幸

幸せはウツ打ち明ける友が居る

就寝の頃に宵寝の眼が冴える

兆予算ますます一円玉軽い

悔いぬ日を行こう平均寿命越え

シドニー 坂上のり子

ブツツリと切れそうで未だ切れぬ糸

ストレスをかかえ引つ越し見やる猫

思いつ切り捨てて決断して移転

ふらりと散歩して見えて来た隣

つまんなさそうにゴロ寝をしてる猫

黒石市 佐藤古拙

村を出た若者たぶん帰らない

言いそびれ妻の寝顔を盗み見る

古文書をひも解く外は雪催い

家畜断ち無臭になった過疎の里

身綺麗になつてじわじわ農亡ぶ

黒石市 相馬一花

ぺしゃんこの胸も偽装で蘇る

姿見で私の魅力探す夜

すぐメモを取らぬと錆びる石頭

スタミナが切れてサブりに縋り付く

失恋の副産物だダイエツト

平川市 小寺花峯

孫の小指が知っている年金日

夫婦茶碗互いに欠けて虹を見る

定年を迎えて遠い縄暖簾

ときどきは小さな炎燃え盛る

古里の岬は涙弄ぶ

弘前市 今 愁 女

一里塚いくつ越えたか夕焼ける  
この先は足を踏みしめ一步二歩  
振り向けば足跡ひとつ見えもせぬ  
忘れっぽさ惚けではないと言ひ聞かす  
猫柳ふつくら春は直ぐそこに

弘前市 岡 本 花 匠

鱈汁の温みに冬の愚痴解かす  
予防注射終えて感謝の初詣で  
幸せそうヒヨは歓喜の木の実採る  
元旦の終日気負うスノーダンブ  
冬將軍暴れ狂った三ヶ日

弘前市 須 郷 井 蛙

ワタシより若いお方が計報欄  
百均へ小さな幸を買いにゆく  
パソコンが出来ぬ履歴書寒くいる  
満員車メタバ大きく幅をとり  
主婦業の苦勞が解る菜の料理

弘前市 相 馬 銀 波

野心ある参政権は吟味する  
糸口をつかんで汗を積み上げる  
荷が軽く今日を明日へ振り替える  
椅子取りの足腰試す冬休み  
湯豆腐の箸食欲を模索する

弘前市 福 士 慕 情

雪のんのん裸木ただ今化粧中  
例年と比較されてる雪の高  
屋根雪が気になりだした戸の軋み  
ドンと雪正月三日雪を掻く  
雪を掻くスノーダンブという味方

青森県 松 山 芳 生

オクターブ下げると耳が痒くなる  
根回しが人間らしさを見失う  
古稀過ぎて雪の重さを確かめる  
耐えて咲く花へ理由など問うなかれ  
約束を守らぬ気だなくち重い

さいたま市 星 野 育 子

晴れ着着て優雅といかぬカルタ取り  
炊き出しのニユースの裏で食べ放題  
変えろ守れ賛否両論マニフェスト  
政治より次期の選挙に忙しい  
飼ひ猫と夫に門限ありません

東京都 岸 野 あやめ

童心を忘れぬパパが頼もしい  
新生児やっぱりママの胸が好き  
宰相にママの過保護は足枷か  
強情な医者かメス執る神の手で  
わたくしを舞わせてほしい春の風

東京都 清原悦子

帰省した子がいて部屋が暖かい  
小春日に尾を振る犬と散歩する

玉砂利の道埋まるほど初詣で

不器用に生きて努力を絶やさぬ

メール打つ文字が本音を語り出す

国分寺市 野崎 勝

目をつぶる夢の続きを見たいから

敗戦を知った母との昼下がり

忘れずにまた巡り来る誕生日

目だけ出すナースはみんな美女に見え

葦原の風にトンボは流される

八王子市 播本充子

寅歳の抱負 努めて淡淡と

大化けをするかしないか投資する

喉ごしの良さを謳った内視鏡

ハレの日にひょっこりと来た蕁麻疹

史記を聴く予習復習サボれない

武蔵野市 亀井円女

まだ卒寿熱くならうぜその日まで

なんべんもだまされながら憎めない

お宝の曾孫二歳で芸達者

私にだってドラマの二つ三つ

うれしい日終日ジェロの歌に酔う

川崎市 三浦きぬ

鈍行に乗って自分史辿りたい

青春を戦争に生き今に老い

初夢に恩師と歩み目覚め泣く

真似事の好きな人種のクリスマス

ホームでは雑煮菌ごたえ物足りぬ

横浜市 小野 句多留

この歳も中途半端で除夜の鐘

ナツメロか訳のわからぬ歌ばかり

三箇日パンから餅に代え区切る

ゴミの部屋にするほど僕は呆けてない

なくなつた噂の人にいずれなる

横浜市 菊地政勝

ごきぶりが投降をする大掃除

ぐらついた歯をあつけなく抜く歯医者

綱引きのように大根引っこ抜く

拉致された海を渡つて来た寒波

風邪に臥す妻をひたすら祈る子等

静岡県 菌田 猿 杏

神棚で女の浮気見たたるま

足裏に軟くて黒い冬の土

深霜を表で呼んだ妻の声

奥様が出掛け気候に餅を焼く

神妙におつむを下げる初詣で

富山県 島 ひかる

二〇一〇元旦除雪朝昼夜  
愛犬のお年玉をも喜ばれ  
雨漏りのゆめ正夢で拾う銭  
書き終えて見ると斜の宛名書き  
電子音一つ何かと考える

犬山市 吉田 幸子

余分には要らぬと清楚貫かん  
サクサクの雑煮愛着覚える日  
快復のきざし賀状に見える文字  
大らかな顔は貴女の自信作  
モノトーンで決断鈍る雪の朝

犬山市 金子 美千代

歳末のムードに酔って飛ぶ論吉  
赤ちゃんのホッペつついてみたくなり  
感謝する事ばかりなり除夜の鐘  
小切手の賽銭神の目を止める  
フレームを赤にメガネも若がえり

可児市 板山 まみ子

ほどほどにできないものが酒らしい  
広告は値引きしてみるロードショウ  
男にはなれぬ女の江戸落語  
シベリアを生きて帰って認知症  
心まで少女になれぬ若作り

京都市 高島 啓子

牙城くずれて補助金をカットされ  
桃太郎をまだ恨んでる鬼の城  
コンビニで買う籠城のカップ麺  
空くじなし親切な抽選券  
ふるさとを捨てる列車が加速する

京都市 榎本 宏子

雪ダルマデビユー待つてる寒い冬  
自分にはちよつとたしたいものがある  
大きいなア牛もたまげるイヤリング  
もひとりの私困らず嫉妬心  
議定書に関係ないが電気消す

京都市 三宅 満子

東の間の家族に戻る子の帰省  
下戸二人しんみり食べる晩御飯  
連立もゴネ得がいて座礁する  
ええ年して今年も虎に狂いそう  
スピーチ済みやつと味わう酒料理

京都市 坪井 孝一

真つ新の心で臨む青い空  
時代経てじつと手を見る齢となる  
ロボットは信じられないほど律儀  
花びらを二人ちぎった遠い夢  
ウインドの美女みな春を謳つてる

亀岡市 井上森生

大阪市 津守なぎさ

有難く生き熟年の有難さ

落の臺頼りがいある春の使者

お迎えは来ない元気でいる限り

水取りの松明ほどに燃えている

冥土への仲間が少しづつ増える

長岡京市 山田葉子

約束の果せないまま日が暮れる

影法師縮み悪女が顔を出す

寒いのを口実にして怠けてる

夕焼けがきれい明日の元氣湧く

縮んだんじやないよ孫が伸びただけ

大阪市 中村れんげ

じわじわと地球が変わる人変わる

鍵一つ抱いて生涯真行草

強く生くあしたのために杭を打つ

赤ちゃんも国の借金おんぶして

癖のある味だからこの店が好き

大阪市 長井善純

派遣には聞こえてこない春の音

はや薄れてきた年始めの決意

男らしくメールに頼るのはやめる

身も心も待ち遠しい春の風

未だ年上の女性に引かれます

血圧に相談してる入浴日

ひと袋ごと丹精の桃育つ

リゾートで日の出拝めぬ朝寝坊

暇はあるが熊野古道に向かぬ足

気がつけば杖忘れてたバイキング

大阪市 榎本舞夢

仕分けられ亭主小遣いゼロとなる

捨てるもの捨ててすかつと大掃除

それぞれにカウントダウン年明け

受験の子さすが神妙初詣で

子等も去り平常心の喜寿二人

大阪市 小糸昭子

言ってはならぬ言わねばならぬ重き口

過去の事謝まっつてます墓参り

残月の短さ故に慌て出す

口ぐせはああもつたないかなんなあ

何もかも重くなつてる齡感じ

大阪市 坂裕之

舞台裏見せたくなくて朗らかに

平等にピンチとチャンスあるらしい

考えの纏まらぬまま年が開け

知らん振り出来る程度のお付き合

下戸だつてたまたに飲みたい時がある

大阪市 伊藤 博仁

久し振りポスト賀状で腹膨れ  
さあやるぞ掛け声だけで重い尻  
百万円する自転車に触れてみる  
メロディーに慌て飛び出すゴミ袋  
違う膳つつき合いする親娘連れ

大阪市 大川 桃花

美人とは並ばぬように席選ぶ  
鉦太鼓にぎやかだけど法事です  
堅物の父にもあったラブロマン  
松かざり横目に母の野辺送り  
チラシ並べ値段比べてから走る

大阪市 吉村 一風

書初めの墨の薫りの心地よし  
美しく生きるよなんてむずかしい  
いたわりの言葉もらって老いの酒  
冬將軍お手やわらかにたのんまず  
三箇日ずる休みした万歩計

大阪市 伏見 雅明

仲直り握手しながら足で蹴り  
お互いに結論出さぬ話し合い  
真ん中の美味しいところ妻にやり  
人混みでチラシ拾った国なまり  
美人だと軽く片目をつむる癖

大阪市 小泉 ひさ乃

御利益が一年だけというお札  
先見えぬ世にこころ何処かへ置き忘れ  
明るい兆見えないままに年を越す  
欲を捨て自分らしさで枯れていく  
なつかしい雅号にどきっとする柳誌

大阪市 小谷 集一

言い足らぬぐらいが丁度良いわたし  
喜寿の春これから先は丸儲け  
初夢も見ずに熟睡する元氣  
旧友の賀状に時を巻き戻す  
脇役に回って光る燻し銀

大阪市 神夏磯 典子

親切な風痛い足押してくれ  
見習いが一途に歩く風の街  
戎さんに会うと笑顔が湧いてくる  
半年も経てば支持率落ちてくる  
本当には出来ぬ話が転んでる

大阪市 森田 明子

鉢いっぱい並べ小人の森に住む  
三が日ほどは良い母演じ切る  
帰省子にお金も手間もかけた膳  
ジーンズに変えて六十路を闊歩する  
落とし蓋されて溜まっているマグマ

大阪市 近藤 正

小沢ダム四億円をすくい取り  
日航機赤字を乗せて飛んでます  
今日明日を凌ぎ切れたら春を待つ  
マニフェスト大風呂敷の畳み方  
投機マネー動き封じ重課税

大阪市 津村 志華子

八十五まだプライドは持っている  
茶飯事をこなして今日の日記かく  
ひとり居はたこ焼だけで昼がすみ  
大阪の隅でひっそり暮して居る  
友達とさくらの城で逢う契り

大阪市 岩崎 公誠

落語家の顔は見事に七変化  
ブルドックも狎も顔には自負を持ち  
堂々と踏んばる顔は頼もしい  
四捨五入したい顔ならあちこちに  
ごきぶりの顔をじっくり見る気ない

大阪市 奥村 五月

食事代減る頃増える薬代  
初詣で枝で泣いてる凶のクジ  
年金じゃ手も足も出ぬカニとフグ  
不況にも上へ上へと奴胤  
年賀状だしたい人は皆あの世

大阪市 岡本 久峰

豊作の予兆か雪が降りしきる  
風の子が雪合戦に戯れる  
賀状の束正月気分もり上げる  
雪中に戦友の亡骸葬りぬ  
風這うままに戦友こときれて

大阪市 岩崎 玲子

年始め心はいつも白でゆく  
初げいこあっちこっちに御挨拶  
新しい服袖通す気恥ずかし  
癒やされる日本の風景どこも好き  
今年こそ思った一歩踏みだそう

大阪市 中村 叡子

年賀状友の添え書き胸にしむ  
お雑煮も七草粥も亡夫と食べ  
成人式晴着姿に和ませられ  
寒の雨凍えた胸にしんしんと  
不況下に犬猫の餌惜まない

大阪市 江島谷 勝弘

呑むなよと遂にドクターに言われ  
勝負ごとなんでもあつさり負け  
鈍行で琵琶湖一周大はやり  
正論といい切る人はいだけぬ  
悪口を言われてもよい生きてやる

大阪市 川原章久

大阪市 平嶋美智子

マイカーが泊る気で飲む無料の酒  
すだれ干しスルメも縮む冬の風  
吊された渋柿甘さ増えました  
路地裏で秋刀魚を風が匂わせる  
残り火が揺れる私もまだ男

大阪市 谷口義

三月の生まれ可もなし不可もなし  
集中力が春の小川に浮いている  
集合写真の中で小雨が降っている  
生年月日を永久保存する  
懇ろに生命線とお付き合

大阪市 井丸昌紀

太陽が回っていると信じてた  
やれやれと油断したのは僕ひとり  
地方紙にくるまれ届く郷の味  
のんびりと空気を運ぶ路線バス  
ほろほろと嘘がこぼれる民主党

大阪市 吉内タカ子

介護して親子の絆厚くなる  
趣味だけは元気の元と励まされ  
新しい年も重荷を艇に生き  
ケアマネに笑顔を交わすありがと  
柳友の賀状一筆夢が湧く

お月様が恋してきます赤い顔  
招待を断る理由みつからず  
反論に咳二つ三つ間を稼ぎ  
初詣で仏神めぐるバスツアー  
願うのみお札参りの無い詣で

大阪市 川端一步

夫婦とや美学なくとも五十年  
五十年ぶりに安保が目覚ます  
一日一善なんて無理することはない  
争いの酒がさっぱり旨くない  
夫より分らんことは電子辞書

大阪市 松尾柳右子

到来のおかきバリバリ入歯なり  
ストープをつけて作句の昼下り  
デパートへ出掛ける二人足軽く  
優待証持つ人多くバス降りる  
裏通り訪う人知らず犬が鳴く

大阪市 榎本日の出

年輪を力いっばい生かしたい  
年金が溜まらぬように遣いきり  
歳とらぬ人の生き方見習おう  
神前で黙祷すると落着ける  
平和だな長寿のボケがふえている

大阪市 萩原大朔

泉佐野市 山本蛙城

同列で入ってヒラとトップの差  
軽鴨がベントを止めた大通り  
連れ添うと星に誓って五十年  
どの列が早いか賭けるレジの前  
転んだ子起こさないのも父の愛

大阪市 田浦實

池田市 栗田久子

かまくらで雪の温もり知りました  
お月さま愚痴をこぼして良いですか  
ウイルスも振り込み詐欺も進化する  
さすが富士抱える水も琵琶湖並み  
とつつあんは偉いと言われ出る元氣

和泉市 横山捷也

交野市 森本弘風

妻の愚痴許す一呼吸おいてから  
カップメンすすり握りを食う孤独  
下座にも一翼担う自負があり  
下戸なりに調子合わせて輪に入る  
子育てを終えて小さな旅に出る

和泉市 西岡洛醉

河内長野市 坂上淳司

高小卒まごまご生きる八十二  
残されて余命へ吉を積み重ね  
チャンネルは妻に任せて寝るとする  
まだ生きる欲有りまっせスーパーへ  
街角のネオン恋しい歳となり

老人に餅の事故なくよい年始  
デフレデフレ言うな年金減らすかも  
渋滞のニュースへ寝正月の幸  
ベランダで自慢の葱の自給率  
解釈のうまい読者よありがと

暖冬と構えていたが冬は冬

雨から雪心をゆるめてはおれぬ

手に取ってまじまじと見る蟹の裏

脚色をせぬ人生で素のまんま

江戸か御所 内裏の位置でもめている

はつきりとシワが出ているシルエツト

高齢者新成人の警備する

成人式親の苦勞を見る晴着

初詣でおみくじは凶喜寿の春

寄り添って松を光らす福寿草

紛争の火種いくつも抱く地球

燃料も積まず地球の浮く不思議

歳の暮れジングルベルが掻き混ぜる

荒屋にもおめでとさんと初日差す

昨日見た朝日と違う初日の出

河内長野市 井上喜醉

まだ車枯葉マークで乗るつもり  
生き残る覚悟で病てなすける

アメリカの指示へ沖縄四苦八苦

病院はぎよろぎよろマスク気味悪い

パソコンを味方につけた筆不精

河内長野市 水谷正子

水仙に気迫を貰う年初め

末っ子に年玉貰い胸つまる

飲んだつもりにくすり落ちてた摩訶不思議

初場所の魁皇花火上げてくれ

イチローを真似て朝からカレー食べ

河内長野市 植村喜代

首痛い腰も痛いと八十路坂

三箇日あつという間に過ぎました

だんだんと知恵付く孫を見て楽し

お正月来るたび無事を願うだけ

電車の中ケイタイを注意する婦人

河内長野市 黒岩靖博

スーパーが老舗の百貨店を呑む

いやされる何時も笑顔のたえぬ妻

妻の味慣れ親しんで古稀の春

共白髪で健忘症でいいかげん

献血で足もかるやか帰宅の途

岸和田市 井伊東吉

歌声の喫茶の人気カムバック

寿命だなアチコチ傷む電化用品

書道熱パフォーマンスに気を取られ

正月の明けて溢れるゴミ袋

国産の力士よ回し締め直せ

岸和田市 岩佐ダン吉

ふり絞る汗だ何にも恐くない

安売りの卵に明日が見えてくる

君達が核を持つのは許さない

輪を離れひとりになって解ること

基地返せくらい言うたらどうですか

岸和田市 森元ふみよ

喧しい風の音せぬ三十階

駅伝の襷につなぐ壮絶さ

腕相撲親爺負かした淋しい夜

パソコンを習った後の片頭痛

せち料理嫁姑と腕自慢

岸和田市 土橋房枝

現実からすこし離れて気楽な日

つい愚痴をこぼしてしまう自己嫌悪

スッピンをマスクが上手く隠してる

怠け癖つくかもしれないこの病

逆らわずすんなり古希になる私

岸和田市 林 力子

平凡が倅せと知る昨日今日  
ひらめきの一句に酔っている至福  
お返しに一言添える気の配り

現実の煩惱を消す除夜の鐘

デマでしよう言いつつ走る大安売り

岸和田市 原 さよ子

スーパ一の熱気なるほど五割引き  
スーパ一の手につた浪費癖

微笑めばほほえんでくる石地蔵

吹いてみる孫の忘れたハーモニカ

ひと時の憩水仙の香にひたる

岸和田市 雪本 珠子

一日が可も不可もなく過ぎてゆく  
幸せも愛もほどほど今が良い

お酒より貴方に酔っているのです

さよならをするたび脱皮しています

小気味好い台詞で啖呵切って見る

岸和田市 堤 楢代

ワンちゃんもおめかししてのお正月  
ゆつくりと歩んでいます八十の道

食っちゃ寝でまたもせり出す下っ腹

婿殿の洗濯術の手際よさ

正月のおせちは親の家で食べ

堺市 河内 月子

元気もりもりで貯金は痩せつづけ  
阿呆やなあとお人好し庇われる  
買物はまず猫達のごはんから

父ちゃんは野菜わたしは花へ水

小春日が続きわたしも陽を浴びる

堺市 奥 時雄

癌ですなあつけらかんと告げられる  
病院のベッド病人出来あがる

情けなや病院食の誕生日

筆談で見舞いの客を笑わせる

入院をしても恋しい街灯り

堺市 宮本 かりん

やさしさを秘めた笑顔に癒される  
水向けて待つひと言が予想外

すき間風心の闇を吹き抜ける

哀しみと怒り背負うて生きる群れ

別々の思いで見てる旅の空

堺市 西村 りつえ

ひとひとに人の背拜む初詣で  
戎さん五円で頼む残り福

登りより降りつきたい下り坂

着膨れにメタボ苦しい四人掛け

一人居になかなか切れぬ長電話

堺市源田八千代

松竹梅 三福の虎和み合う  
豪雪に暖冬予報揺らいでる  
表面はわからない腐れりんご  
傷みりんご現物保存して返す  
親戚の計続き喪服仕舞えない

堺市荻野象山

結納を交わして深い迷い断つ  
空き缶に罪はないのに蹴飛ばされ  
協力はし難いケチはつけ易い  
落としたら気が付くように鈴をつけ  
肺炎ワクチン値段効果で納得す

堺市大隅克博

金と言うちっちゃな欲がまだ取れぬ  
妻六分僕は四分の半分こ  
心には無いと言うけど嘘だろう  
あちら立てこちら立てたら転ける僕  
まず足に車社会のつげがくる

吹田市大谷篤子

坂道の小さな石が敵になる  
回復期今ゆつくりと歩いている  
好きな事考えゆるり生きている  
今日よりも優しさたして明日の風  
憧れの人の後に座ってる

吹田市山本希久子

カタカナ語漢字のルビをふりたいな  
なまけ癖敵は私自身なり  
冬の薔薇時にはトゲをむき出しに  
目に見えぬ敵が迫ってくる老後  
希望的観測もして春ごたつ

吹田市瀬戸まさよ

手抜きです手抜きでないと無洗米  
半分のその半分を買う野菜  
安すぎる弁当なんとなく怖い  
来年は賀状やめると賀状くる  
忠実な顔です埴輪哀れなり

吹田市木下敏子

書き初めに愛と一字を書き留める  
口紅の土産を貰う老いの春  
和服着て女らしさを取り戻す  
肩の荷をおろし静かな脈を打つ  
母さんの味しみ込んだ節料理

吹田市野下之男

浮き沈み直ぐに忘れる永田町  
鐘よりも物売り元氣寒山寺(中国)  
鸚鵡かて好きな人には返事する  
風の子に負けじとカラスはやしたて  
猫だつて帽子かぶれば駅長さ

高槻市 執行 稲子

道すがら拾う花梨の洗いこと  
それぞれの過去から脱皮して飛躍  
焦げついた義理人情の薄くなり  
歳のせいとさっぱり解けぬ国訛り  
相植は承知したとは限らない

高槻市 指宿 千枝子

お日さまへ目白もはしゃぐお元日  
春日の森異国の人も初詣で  
賽銭の飛び交う下で願いごと  
こっそりと神様だけに打ち明ける  
待ち合いのばあさん九人分喋べる

高槻市 井上 照子

この年でまだ生きたいと神だのみ  
当り年心身共に老いた虎  
生き物のさまざま森に生きられず  
ウイルスに負けないように手を洗う  
白髪もまたよし素直な八十の坂

高槻市 乙倉 武史

白寿からの賀状気概を乗せてくる  
健康は宝仲良し万歩計  
七草を数え息災粥啜る  
この世まだ残夢一献傾ける  
恙なく一と日の歴史記し眠る

高槻市 左右田 泰雄

炬燵から気乗りのしない生返事  
夕闇が迫ると足が向く酒場  
買溜めはすまい物価はまだ下がる  
追いかけて来るので仕方なく走る  
平凡がいいなと思う冬日向

高槻市 杉本 義昭

やわらかな夫婦になった五十年  
貧乏に耐えた素直な笑い笑顔  
桃の皮剥いてもらってからの恋  
真っ直ぐな亡父の背中に似て生きる  
家族愛その真ん中に母がいる

高槻市 富田 美義

並みに生き並みに死ぬのは贅沢か  
後悔の道は口から続いている  
思慕追慕尽きないボクの数え唄  
うそ重ね嘘が見抜けるようになり  
尽くし過ぎそれが男をダメにする

高槻市 峯村 勳弘

待っててね胎児おなかをキックする  
禿じゃない額が広くなっただけ  
内定の梯子外され湧くフアイト  
雲行きを見極め下山する勇氣  
掴まれた尻尾切り捨て与党の座

高槻市 佐 甲 昭 二

平熱の仮面をつけて会いにい  
近道を歩くと怒る万歩計

人生のドラマシナリオ不要です  
原稿を赤エンピツが斬りたがる  
捨てられぬ手紙タンスで息ひそめ

高槻市 生 田 義 一

幸せだ七度迎えた寅の年

初詣で小沢の宮は大繁昌

松の内だけよと医者は酒の許可

野村さんばやきを捨ててお笑いに

後頼む和尚につこりまかしとき

高槻市 安 田 忠 子

お正月のんびり過ごすこの平和

寅のとしトライトライで夢を追う

寅のとし五年日記の三年目

娘等が来て嬉し忙がしお正月

年賀状返事書くからまたくれる

豊中市 江 見 見 清

そよ風を感じる人に逢いに行く

サンタへの手紙孫から託かる

婿達が酒を一掃する年賀

監督をトイレに行かす凡プレー

不器用な口で主役をやらされる

豊中市 藤 井 則 彦

こっそりとくれたチョコレートは旨い

日の丸の赤に心を洗われる

うたかたの恋はコピーにとっておく

お隣に隠し子がいるうちのポチ

税務署を屈服させた口の泡

富田林市 井 上 じろう

あかぎれは年々位置を決めている

冬晴れに心穏やか寒椿

舞台裏名もない人が支えている

花柄のエプロンからもう半世紀

洗車して磨き上げるといつも雨

富田林市 片 岡 智恵子

魚の顔見ないで食べる生け造り

言葉は刃癒やされるのも言葉

石橋を叩けば夢が薄れゆく

剪定で風邪引きそうな松の枝

転ばぬ先の杖を使つてくれぬ夫

富田林市 中 井 ア キ

抽出しの火種じつとはして居ない

終章のゲーム味わい深くなる

方向音痴恋の港に行きそびれ

君の名をなぞると心満ちてくる

不景気には見えぬ他人様のお財布

富田林市 大橋 鐘造

寢屋川市 森田 麗

鍵握る妻に頭が上らない

喉元を過ぎればわかる薄情け

倅せを求めて溶ける雪女

親切と背中合せのお節介

根回しを忘れた今日の風当り

寢屋川市 富山 ルイ子

今日の仕事明日ないものと深夜まで

八十の坂しんどいと皆が言う

八十はまだまだ母は百越える

インフルにかかりマスクが離せない

毎朝の検温何時も五度八分

寢屋川市 森 茜

ほんと膝打った小さな思いつき

しあわせ度普通ふつうって何だろう

いやされて老子の言葉読む夜更け

古筆筒に私をあつくした封書

あなたより反応早い電子音

寢屋川市 太田 とし子

福を呼ぶ笹を枯らした不況風

聞か猿と言わざるが打つゴツツンコ

三度目の遺言笑う寅の年

正月の履歴書みたいお年玉

鳩を追う寅の尻尾が地をたたき

三箇日つけがまとわる万歩計

虎フアンが踊る初夢信じよう

今年こそ街中闊歩虎模様

年始め過疎の鎮守も明かりつき

春を待つ花も私も冬眠中

寢屋川市 籠島 恵子

真っ直な人にはいつもかなわない

身勝手な思い方だところがめられ

木々百態冬のさくらはなまめかし

欲深いあかしのように眼が泳ぐ

余生とは何歳からか悟れない

寢屋川市 平松 かすみ

一年生従姉譲りのランドセル

一番に穿いたモンペをからかわれ

七十年ほしがりません身に付いて

戦争は父の無い子が増え続け

飛行機になった仏具と金火鉢

羽曳野市 徳山 みつこ

金粉の酒を一口金の声

先送り憚らないで生きていく

六周目驕る心は見えぬまま

虚勢張りノーと健康アンケート

株無縁猫の額に葱大根

羽曳野市 永田章司

COP15終ると寒波皮肉だね  
厳寒にずぼらを決めた初詣で  
家計でも僕の小遣い仕分けされ  
囑託は捨扶持だった天下り  
連立で一面飾る小党派

羽曳野市 吉川寿美

老いふたりどちら引いてもゼロになる  
花活けて花とところを重ね合う  
ナツメロに若きわたしの海がある  
妻や子に腰の竹光みせられぬ  
妻の愚痴新聞斜め読みで聞く

羽曳野市 吉村久仁雄

友は情死はくは憤死で逝くとする  
釈迦の掌を踏み台にして子の育ち  
上向けば妻も上向日向ほこ  
髭剃りも三日休んで寝正月  
川の字の中に孫いて寝つかれず

羽曳野市 福田悦子

梅一輪咲いたと友が声弾め  
ホラ吹いて後に引けない身の置場  
赤飯を炊いて一人のペースデー  
年女やさしいトラでこの一年  
欲深く梯子をさせた初詣で

羽曳野市 酒井一壺

本心を告白したら楽になり  
逆境に耐えて野心の牙を研ぐ  
器ではないと悟っている頭  
難問へ頭かかえて出口なし  
アデランスとうとう似合わないまま

東大阪市 北村賢子

時流れ花咲く春はもうそこに  
今年また川柳フラは生きる糧  
活き活きと暮らして痩せてゆく貯金  
終章へまだ諦めぬ青い鳥  
未来まだわたくしなりの花咲かす

東大阪市 米田水昇

虎の威を仰ぎむかえる初日の出  
やさしさと描けば大虎猫になる  
初日記今年の収穫期待する  
年迎え初心に戻る心がけ  
イケメンの顔がかくれる大マスク

東大阪市 中岡妙

お正月神社巡りの酒に酔う  
お年玉貰える歳になりました  
血糖値忘れ楽しむ外食日  
コンビニのトイレ頼りにウォーキング  
三カ日エコを忘れて祝箸

東大阪市 佐々木 満 作

他人のこと構つておれぬ世知辛さ

我を張れば平行のまま物別れ

失敗を恐れてないか青年よ

人だかりふと覗き込む癖があり

販売機お釣時々多く出る

枚方市 丹後屋 肇

ほろ酔いに通りすがりが距離をとり

沙羅の花落ちて際立つ苔の艶

急追に先頭の靴呻き出す

寂しいと遺影にむかう甘え声

除夜の鐘仏間へポリュームを上げる

枚方市 海老池 洋

人生の節目に美酒と苦い酒

夕焼けへ祈る姿の木守り柿

陽に土に祈る棚田を守る父

終りまで聞いてはおれん妻の愚痴

刺刺しい方が私の裏の顔

枚方市 寺川 弘 一

野地蔵がふと止めさせるウォーキング

故郷を出てから越えたトンネル駅の数

味噌汁の香りが違う妻と母

オンリーワンと信じられたらそれが愛

気を抜くとすぐ幻に変わる愛

枚方市 小林 わ こ

恋は魔法よ明るい色で目が覚める

今年一年きりりとしたい衣食住

酒減らずどこか具合が悪いのね

一杯のビールに押され告白し

自我少し減らせば鳥になれそうなの

枚方市 二宮 紫 鳳

改革案かざし惑いの年が明け

迎春にポチの名も書き箸袋

絵に書いた餅のレシピが見つからず

今年こそ懲りず女のダイエツト

古都めぐり五官冴えきる風の音

枚方市 二宮 山 久

今年こそ本音で生きたい六十路坂

年明けてラジオ体操操集う朝

年賀状一年ぶりの顔うかぶ

趣味三味不景気なんかふつ飛ばす

すすくと孫が伸びてる柱さす

藤井寺市 伊藤 アヤ子

年の瀬のハードル少し高すぎた

温かい部屋にて拝むダイヤ富士

初詣で雪のすだれをくぐりゆく

お正月三日もすれば焼き魚

数の子が膳にのらないお正月

藤井寺市 若松雅枝

庇い合う膝痛老いの初詣で  
五年前に買った服だが一帳羅  
買物のついでに歩く四温の日  
デフレかな年明けコート半額に  
百均とユニクロ老いも行ってみる

藤井寺市 増井ヨシ枝

ALS生還という闘病記  
川柳も少し添えてる闘病記  
闘病記盲た方がCDに  
闘病記なんにもないが我が宝  
一冊目亡夫に供える闘病記

藤井寺市 俣野登志子

まだまだともうの間で揺れている  
お節の味見過ぎておそばをギブアップ  
塗箸は嫌いとうどん逃げまわる  
今はまだ過去省みる暇はない  
作るのが好きあげるのはもっと好き

藤井寺市 太田扶美代

ごく稀に大金持を夢に見る  
ぼんやりとあしたを想う出刃庖丁  
旅ごころ故郷は水の美味いとこ  
ローカル線レトロ情緒によく出遇う  
宝物母が笑っている写真

藤井寺市 高田美代子

まあいいか言いたい事はあつたけど  
厄介なオニいっぴきが出て行かぬ  
角界のごたごたを聞く国技館  
言い訳の癖が直らぬ青リンゴ  
歳は歳なりにやれたらそれでいい

藤井寺市 津田シルク

小春日にいそいそとする孫の世話  
松茸が我が家素通りして春に  
太鼓橋かかさず参り無信心  
行きなれた阿倍野で右往左往する  
リハビリの日にち薬という治療

箕面市 広島巴子

張り切つて母に戻つたお正月  
幼子の笑顔泣き声皆宝  
冬籠りしてもグーと鳴るお腹  
窓越しにはーと観察冬の空  
葉ポタンのお色直しは雪化粧

守口市 井上桂作

前向きな姿勢でまずは新年を  
縄のれんくぐつて見たいお正月  
青いバラ花のビジネス花盛り  
反骨は直らぬものよ親が親  
デフレ防止総力あげて対策を

八尾市 笹倉 ひろし

威厳枯れ今はヨチヨチ元社長

足腰は弱いが嫌味だけ達者

ユニクロで並びデフレの渦となる

礎石跡掘って卑弥呼が近くなる

雑踏に温もり求め独り者

八尾市 村上 ミツ子

お節なくても正月はやってくる

正月も牛乳飲むの忘れない

スーパーで買物忘れ立話

冬の寒さに耐えて菜っ葉は甘くなる

ともすれば追い詰められている善意

八尾市 高杉 千歩

親孝行ひとりじめして歳の春

三世代ビールで乾杯孫二十歳

多目的ホール我が家の六畳間

介護度の話題白熱老人会

馴染めない歌で紅白寝てしまい

八尾市 宮崎 シマ子

福の神謝りながら通り過ぎ

もがり笛冬と一緒に遠ざかり

里山は雪解け水を待ちこがれ

踏み込んで聞けぬ夫のもの思い

妻をけなすとたちまち起る豆台風

阪南市 山本 柳昌

押す引くの波長乱れる倦怠期

やれ嬉し子はそれなりの城を持ち

平城京言霊宿る風の音

陽が沈む経費節減する早寝

未熟やねしっぱ残して化けてはる

大阪府 桑田 ゆきの

親しさにスパイス利かす御忠告

好きな事言って言われて日向ぼこ

晩学の辞書の重みに湧く活気

七草の唄教えられタクト振る

これっ切りと言うて受けてる誘い酒

大阪府 澤田 和重

朗らかに生きれば病気逃げてゆく

おばはんに男子トイレが拉致される

神様の恵みが宿る笑い皺

自問自答ひとり芝居がうまくなる

七十五歳加速度つけて皺が増え

大阪府 米澤 俣子

失った若さを戻す術はない

ひと刺しがずばりの中泣き所

食べ放題の蟹へおばちゃん皆無口

はや十日戎に頼む好景気

ひと芝居もう打たなくてよい齡に

## 川柳塔の

# 川柳讃歌

63

木津川 計

うな井が安いはキット舶来物

古川 奮水

奮水さんのお年が察せられます。「舶来」は明治から使われ、いまでは死語になった代りに「輸入品」と言われます。只今の「洋品店」も明治・大正時代は「唐物屋」と呼び、舶来品を専門に売っていました。

僕の少年時代、舶来品は高級で高額でした。ところがブランド品は別にして、舶来は安物視される今日です。抗菌剤で育った中国産の鰻二百万匹を国産と偽って一昨年大儲けしたのは、大阪の魚秀という悪徳会社でした。

これ以上負けられまへん国産や

源田 八千代

ほう、「国産や」は負けられん断り言葉の決定打になりましたか。東京でも大阪でも値を安くすることを「勉強する」と言いました。ついに百貨店の売上上げは十二年連続の前年割れ。生活防衛時代なればこそその低価格志向

が流れてすのに、百貨店は不勉強なのです。こうしましょう、三月から一か月間、誰も百貨店へ行かんことです。バタバタ倒れます。在庫商品の叩き売りです。八千代さんと共に僕は「君が代」みたいに「万歳」と叫びますが、一寸過激な不買運動でしょうか。

生きてても良いのかと後期高齢者

板東 倫子

少々過激な言説を弄しましたのも、立場の弱い者が身をすくめて生きねばならぬ受難時代なればこそです。「ゴミのように細かく分別されてゆく（後期高齢者）（情報難民）」（寺下吉則）であります。

倫子さん、僕も今秋から後期高齢者です。

即ち互いに「ゴミ老人」なのです。「ゴミ」が大きな顔をして生きてられますか。人生の底辺で世を憚り、なおうずくまって底辺を掘り、目につかぬよう「どん底」の暮しです。

どん底をどんどん掘って水浸し

木本 朱夏

われらゴミ世代は、戦おうにも組織はなく、体力もなく、思い諦め、けつして這い上がるうとせず、なすことと言えば、なおどん底を掘る下降運動のみであります。

どんどん掘らず、どんどん東へ東へ、野を越え山越え、海を渡り、国をまたぎ、どんど

ん行くと、ついにわが家へ戻ってきます。すると西隣の家は世界で一番速い家やったのかと、僕は水浸しのどん底で考えるのです。毎日が遊びになると辛いなあ

片山 忠

水浸しになるほどどん底を掘るのも、三六五連休だからです。昔は失職したり、無為に暮すのを「遊んどりまんねん」と自嘲したのです。「勤労の美德」を賞揚した「大日本帝国」であります。「あかんやないかい、ブラブラしては」と叱責されて、ついにわれらゴミ老人は遊ぶことなく、「村の鍛冶屋」の末裔になったのです。遊びを知らぬ忠さんの老人の「辛いなあ」の嘆きがあふれます。嗚呼。幸せな人は足音まで軽い

持田 多輝子

忠さんの老人が足よりも軽く、口笛を吹きながら颯爽とゆく姿をあなたは想像できませんか。重たい気分、つらいころの、わけでも老人はとほとば、ヨチヨチ歩くしかないのです。すると「不幸せな人の足音は重く、幸せな人は足音まで軽い」道理であります。

ここは発想を変え、生き方を転換させるのです。「毎日が遊び」を幸せと思えば、人生は薔薇色です。忠さんの老人の退場です。

「上方芸能」発行人

# 自選集

板尾岳人

あつぱれと言うべきなのか脱獄王(板尾創路の脱獄王 2句)

島流しされても脱獄くり返し

たとう紙に男の意地をたたみ込む

冬の膝春待ちわびて旅に出る

四十九日すんで誰かが葱刻む

奥田みつ子

寒牡丹強く生きよと白く咲く

カラスまで不況不況と鳴き交わす

新聞に一喜一憂してひ・と・り

昨日は過去今日は新たな風に立つ

楽しいことと思えば脳も嬉しそう

河井庸佑

先走り墓穴を掘ったのを悔やむ

耳学問思わぬ時に役に立て

発想を変えて妥協点模索

勝ち目ない相手一矢は報いたい

旅土産隣へ果たす義理ひとつ

川上大輪

撒き餌には弱い魚も人間も

油断すると絵文字が話しかけてくる

オンリーワンだから私流でいい

ピラニアが泳ぎ回っている砂漠

旨いもの食べて笑顔を取り戻す

木村あきら

啓蟄だ地球の全て動き出す

瀬戸の浜見下す丘に川柳碑

ヒナ壇に草餅飾り春祝う

菜の花と共に繰り出す遍路笠

永久に流れも清き五十鈴川(伊勢)

小島蘭幸

比翼の句碑は初春千号を抱いている

ある決意塔を見つめているのです

石段の上には虹があるばかり

真面目なんでしょうか煙草を知りません

これでいいのだからこれでいいのだ皿洗う

小西雄々

国民に希望陛下の笑顔みる

春を待つ胸の蛍にメールくる

春雷にころげて落ちた嘘ひとつ

少子化はすすみベツトは増えつづけ

百歳の言葉に学ぶものがある

齊藤 姦

言うなればりんご二つに割った仲  
ハーマニーびったり合っている仲間  
潜りながら夢の続きを見えています  
稲の根が恋しくなった休耕田  
情熱が途切れぬように種を蒔く

塩満敏

願わくはピンピンころりなりたいな  
この秋も鶴彬忌やって来る  
今年こそ阪神さんよがんばって  
年寄ったダルマ眼鏡かけました  
火曜日はデイハウスに通ってる

新家 完司

妻不在終日小雪酒日和  
脈拍正常記憶回路不良  
中国路新車快適一人旅  
視界良好脳内濃霧注意報  
御蔭様水洗便所羽根蒲団

恒松 町紅

目も耳も悪くなったと鏡見る  
リハビリのつもりだったが使いすぎ  
珍しい来客顔は覚えてた  
写真帳昔の夢が撮ってある  
軍隊の話珍しがっている

津守 柳伸

門松にらしさを貰う初旅行  
三ヶ日飲まぬ葉の験担ぎ  
温暖の街ファミリーで混む南紀  
連泊で掃除断るキャッシュバック  
笹持って来い不況蹴散らす戎さん

遠山 可住

忘れもの訪ね人生ひとり旅  
特選の壺で少うしいびつなり  
ばあちゃんが南瓜を炊いている冬至  
吞んでたら喰えず喰てたら吞めぬ蟹  
そろそろの選挙か愛想よい笑顔

都倉 求芽

ただ歩くおまけの人生まだ来ない  
万歩計持たないけれど足の声  
ダイエツト足りない影と信号待ち  
水温む鯉と堀端を歩く  
しばんでる空春風を待っている

土橋 螢

あと五年生きるか五年日記買う  
み仏に合掌いのち新しく  
人生双六 八十歳にひと休み  
葉桜になるまで夢をふくらませ  
よろこんで笑って指を舐めている

中原 諷人

白い画布から春なりの活気づき  
わからない流れのままに花つぼみ  
リユック派の流行り進学祝いにも  
春なのに運転免許さようなら  
心配なことよ余命を計りかね

西出 楓楽

まだ若い証 腕腹立つことばかり  
瘡蓋を剥がしてくるモーツァルト  
明日ばかり思い患う寒椿

仁部 四郎

むくむくに着込みノラにはもうなれぬ  
自分に負けそうな日赤を身につける

林 瑞枝

お役所の用語に専用辞書が要る  
ベテランの仲人うまくカタカナ語  
古語辞典バラりとめくり目のうるこ  
閉会のことばが出番元助役  
敗戦の弁せつかちに長々と

気落ちして松の大樹の気を貰う  
ご一緒に珈琲いかがと呼ぶ電話  
あちこちから嬉し賀状の快ニュース  
デザイナ一の勉強美女がドイツ迄  
ドイツから葉書優しいドイツ人

前 たもつ

期待します平成生れ新成人  
欲があり枯れた文字にはまだ遠く  
キリストに会える気がする二〇一〇  
わが五体知らないことが多すぎる  
しなやかに危険信号受けとめる

政岡 未延子

勝ち組の群へ入っていく打算  
薄い赤だから人にはあげられぬ  
逆算をして余命表組みかえる  
組板を洗い終わって今日の幕  
ほがらかな太鼓だ朝の母の声

宮口 笛生

酒うましおせちもうましお正月  
正月の餅に一年しめくくる  
歌合戦正月此処に来ています  
初詣で人に押される杜晴れ  
年賀状友達みんな元気なり

三宅 保州

あくまでも生きていればの話です  
橋桁に今日も噂が引つ掛かる  
目に見えぬネットが絡み合う世界  
窓口で借りたメガネがよく見える  
根雪でもいつかは溶けるわだかまり

宮西弥生

まごころの一筆うれし春の文  
冬山の子報人より甘かった  
うなずいてくれた山だが人を呑む  
折り返す道にも芽吹き待つ蕾  
雑魚なりのポリシー脳を使い切る

八十田 洞庵

まだ来ないですかと笑う花時計  
見栄一つほしくて買った柿右衛門  
貧富の差知らない犬の青テント  
敢えてノーと言える勇氣ありますか  
霜降り頭やっぱりリストラされました

両川 洋々

夢を売る議員がなんの夢も見ず  
マニフェスト積んで泥舟出港だ  
喪が明けた心も春に染めようか  
さわやかな敗けだと自民ほめてやれ  
倦怠期ハートのヒューズ切れたまま

お湊抄

(つづき)

京都市 藤井文代

愚痴の種蒔けば芽が出る斜めから  
叩いた手収めどころが試される  
笑うだけで窮地逃れる三枚目  
若いんです若づくりではありません

温故知新

川柳句集『ふるさと』

須崎 豆秋

かかる夜に死ねば本望銀の月(防室主任2句)  
惜しからぬ命笑つてうちを出る  
情報情報今ふるさとに敵機あり  
モンベイのバケツ一杯よう提げず  
散髪屋仕事にかかる巻脚絆  
さすが戦争吉野山とも言わず  
法善寺鼻をつままれそうに抜け(燈火管制)  
お父ちゃん鼠に引かれなやと疎開する  
お月さんごんねながら負けました(終戦)  
食うものも食わず少尉に育てたが

初版 昭和29年11月発行  
再版 昭和30年4月発行  
再刻版 昭和60年9月発行

第117回 大阪川柳の会

日時 4月5日(月) 17時開場 18時締切(席題なし)  
会場 サンケイホールブリーゼ 八階 八〇三号室  
宿題と選者(各題二句)  
△ 運・泉・佳恵 △ 力・天根・夢草  
△ そこそこ・穴吹 尚士 △ 味わい・磯野いさむ  
会費 千円 欠席投句4月2日まで 本田智彦宛  
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4 706



川上大輪選

香南市 桑名 孝雄

一年の計に若しもを入れておく

八十になると誰彼好きになる

楢山へちよつと覗きに行つてくる

風の向き変われば僕もまだ翔べる

薬と酒を交互に飲んでクラス会

禁酒の刑一週間を無事に終え

鳥取県 齊尾 くにこ

くじけない辛いことには慣れている

ごまかしのきかぬ自分に手がかかり

約束を深夜の雪が邪魔をする

狼を隠す笑顔のバリケード

恋人未満ここからはミステリー

濾過された昔話が美しい

神戸市 山崎 武彦

横並びだった昔を懐かしむ

心まだ決まらぬうちに横向かれ

母ちゃんのチャームポイント斜め横

極上のワインで祝う真珠婚

寝転べば故郷へつづくいわし雲

癖のある僕を信じてくれますか

悔しくも縁の糸切る喪のはがき

螺旋階段のほりつめればパラダイス

冬空の冷たく澄んだ青がいい

ささくれた心に優しシクラメン

来年へやる気リセットする第九

本年は軸足ちよつとずらそうか

京都市 清水 英旺

台風一過子らが帰った日のふたり

ポーナスが顔だけ見せて行くローン

記念写真遠慮しながら前並ぶ

別嬪のレジを選んだのが迂闊

ポイ捨てに耐える無口な紙コップ

あいさつもそこそこにする年の暮れ

八尾市 寺川 はじめ

札幌市 三浦 強 一

名刺見て貌見て値踏みされている

締切りへ脳細胞が目覚ます

嫁と来た息子がどこか他人めき

丁髷にふと会えそうな城下町

心にはいつも右派左派中間派

どちらにも味方のようなまとめ役

紀の川市 宇野 幹 子

パンドラの箱から出した果し状

血の色の涙で送る子の柩

オアシスが涸れて重たい鍵の束

陰干しにしたい男の裏表

未だ重い尻尾引き摺る一年忌

雪しんしん殺意を抱いて降り積もる

大洲市 花岡 順 子

宝くじ気楽に回るルーレット

冷凍庫チンして食べる物ばかり

時々は暗示を掛けているやる気

筋書きをのせる舞台は出来ている

黙秘権わたしに不利な事がある

八起き目のたつた一歩が踏みだせぬ

高知市 松尾 憲 子

再会を期して己にムチを打つ

拜啓の後の言葉が出て来ない

挨拶のひとつひとつに出る素顔

幸せを感じ始めて増す不安

わだかまり消えて景色が広くなる

やれるだけやってみようかと年女

鳥取市 深澤 千恵子

気付いたら母とおんなじ小言いい

外で虎家に帰れば猫になる

燃えつきるほどの仕事も恋もせず

雪だるまどこか似ている孫の顔

ひとり旅横が気になる指定席

知らぬ間に買う気にさせるコマーション

雲南市 菅田 かつ子

花畑小さな夢を蒔いており

存分に笑った後の爽やかさ

嫁というやさしい杖にすがりつき

靴擦れの胼胝にもあつた青春譜

あの日から置いてきぼりにされた傘

百歳を生きてる顔の穏やかさ

神戸市 早川 孝子

照れている父母と並んだ三世代

ポイントにつられカードとお買い物

髪型を変えて春風吹いてきた

赤い実に今年の気力貯える

あいさつは心ほっこりまるくなる

御守と買った保険重くなる

大阪府 太田 としお

一周忌すんでボチボチ羽根ひろげ  
ぜいたくは敵住宅ローンすむまでは  
初七日を過ぎると急に老いてくる  
鮫鱈は深いところで欠伸する  
兄貴でも連帯保証できかねる

大阪府 高杉 力

待つたぞ成人の娘にビール注ぎ  
同窓会誰かええ人おれへんか  
家族旅行海外だけはついてくる  
足にきて眼にきて老いを受けとめる  
人生を語る屋台の湯気越しに

大阪府 安藤 なつこ

まん丸の元旦の月に運もらう  
虚礼とは言うが無ければわびしすぎ  
信じてるならクドクドと言わないで  
クリスマス神様だって遊びたい  
年の瀬にまずおちついてお茶飲もう

泉佐野市 稲葉 洋

寒色を弥生の風が消してゆく  
下駄箱の杖確めて花だより  
懐へ春のたよりは何時届く  
影にだけ背筋のばせと責めないで  
登りには見えない下り坂の難

茨木市 島田 誠一

左遷地の星がやたらと明る過ぎ  
後列の方から埋まる社の会談  
列島が風邪ひかぬよう温暖化  
ガラクタをまとめ買いする福袋  
トロイメライ最前列で舟を漕ぐ

河内長野市 山室 光弘

その内に一人芝居のあほらしさ  
妻の愚痴すぐ保護色を身につける  
思い込み自惚れ剥けてメランコリー  
針の先丸太のような自慢する  
老いの知恵苦水呑んだ賜物だ

河内長野市 針生 和代

孫と風呂お伽噺を浮かばせる  
露天風呂夫婦の灰汁を浮かせてる  
捻子ひとつ緩めて登る老いの坂  
捨て切れぬ欲をいっぱい持って古希  
今日という一番若い日を生きる

堺市 内藤 憲彦

神頼みまだ迷ってるお賽銭  
定年後自我にめざめて反抗期  
禁煙はあと一本を吸ってから  
提出日書き直してるマニフェスト  
事業仕分けびびっくり水が効き過ぎる

吹田市 二宮 栄子

玉砂利の一步一步に神の声  
お隣とおかず行ったり来たりする  
独り住み隣の風が暖かい  
見ないふり聞かぬふりして丸く住む  
十年日記たどれば若い歳に会う

枚方市 河田 洋子

自画自賛手習い楽し趣味の道  
夫から一度聞きたい誉め言葉  
欲しい物ただ見るだけのテレシヨップ  
する事がたくさんあつて元気です  
パソコンのゲームで遊び惚け防止

八尾市 中島 春江

一人とは淋しき暮し晦日そば  
弾むこと未だ知らずに飾り毬  
年金で笑顔見たさにお年玉  
お年玉玩具売場に吸い込まれ  
初泣きの顔が可愛とまたなかず

奈良市 加門 萌子

いつまでも地球は青いままが良い  
政治から逃げて庶民のあきらめ度  
似た者に成ってしまった凡夫婦  
嫁さんにそっくりな嫁寝めておく  
健康を下さいどうかあと少し

奈良市 岩本 浩二

午前様鍵を開けたらドアチェーン  
プライドは捨てて気楽に生きている  
五欲枯れ幻想だけで生きている  
握ります開けば運が逃げて行く  
極楽の扉を開く鍵が無い

和歌山市 福井 菜摘

歩のままに素直に生きて来た誇り  
輝いた過去は語らぬ再生紙  
今年こそこそがあるから夢抱ける  
優しさにいつかほころぶ鬼の面  
その先を言えば割れそうシャボン玉

田辺市 大峠 可動

春なのに椿一輪だけの庭  
十指みなリユーマチという仲間たち  
視野は雨右も左も水溜り  
手相からこぼれてばかり僕の夢  
歳月の裏も表も深い海

和歌山市 上田 紀子

優しさが後で届いてくる無口  
恵まれた日本で過食拒食症  
土壇場で腹が据わったのは女  
私も地球汚してきたひとり  
定年の今日をゼロから立ち上がり

和歌山市 磯部 義雄

尼崎市 藤岡 りこ

助手席で指令うるさいカカアナビ

お隣と親しくしてる高齢者

堅物の知人パチンコ台に居る

孫からのメールで曇る老眼鏡

評論家気取りで食べるラーメン屋

岩出市 村中 悦男

暖房費寒さに勝てぬ請求書

古い二人時に母かと思う妻

二人だけの夕餉を覗く窓の雪

ちよんと着た雪の帽子の無縁墓

トンネルを越えると雪に迎えられる

和歌山県 森下 よりこ

折り合いをつける鏡とにらめっこ

引き出物の皿はバザーに出している

キム・ヨナを見てから風呂に入ります

我がままな独りぐらしのお正月

スイッチを忘れごはんを待たされる

芦屋市 竹山 千賀子

深刻な会議かまわず出るクシヤミ

メル友より語る友待つ誕生日

自分史に亡夫の愛を刻み込む

ライバルが居るから若くしておれる

一皿に幸せのせた旬の味

恥ずかしさ誇らしさあり母校前

春一番山が生き生き呼吸する

捨てた品欲しいと言われ惜しくなる

ほどほどのお世辞ぐらいじや奢らへん

下手な料理も話上手でカバーする

加東市 安達 厚

古里の地蔵に昔のことを詫び

この寒さ散歩よいやら悪いやら

同じ人内科で出会い眼科でも

美しい人だが歩幅気にかかると

面白いことがあるかと輪をのぞく

篠山市 谷田 多美子

繕うて馴染んだ服が捨てられず

甘酒も辛酒もなく初詣で

にぎつてた手から賽銭はなれない

湯呑み二つ無言で除夜の鐘をきく

もみくちやでお願いをする初詣で

宝塚市 丸山 孔一

無精者マウス一つでショッピン

歩いてもいいよ完走目指そうよ

妻の留守生ゴミが無くプラが増え

声出して泣けぬ自分が情け無い

そんなことワシは知らんと犬が行く

ジャンパーは着てもふところまだ寒い  
西宮市 足立 茂

田舎では目と鼻の先十五分  
屠蘇気分やつと抜けたらもう二月  
味だけではやるお店の無愛想  
吉報を待つてトイレはあと回し

西宮市 寺井 秋果

手も足も少し汚れて折り返す  
人ひとり許せず仰ぐ空の青  
声高な仕分けで鼠一匹か  
友の訃やひたひた迫るものがある  
地酒とろりお国訛りへ弾む猪口

西宮市 吉井 菜々子

笑い皺神経痛も同居して  
哀しみは肋間にきて喉にきて  
誇らしく口笛吹いてわすれよう  
頼りないヒロインですぬ日記帳  
アクセルをペダルに替えてときめこう

鳥取市 稲村 遊子

理想論吐いた自分に飽きてくる  
耳にしてならぬ噂は裏口へ  
時差埋めるために昼寝をするつもり  
葬儀屋の親切カネに換えてある  
評価表職場の風が揺れている

鳥取県 西谷 悦子

足し過ぎて元の素朴さ見失なう  
差し伸べられた手に意地が崩れそう  
あちこちの隙間を埋める綿になる  
伸びる芽を摘んでしまった荷を背負い  
折りに触れ亡父の梯子が伸びてくる

米子市 野川 宣子

寅年も泣いて笑って三世代  
大虎小虎夢も膨れぬネオン街  
貸した手が打算的とは淋しいな  
子育てに打算なかつた子守りうた  
お互いが最短距離で聞く軒

竹原市 國 實力

チツチラとめじろ年始に来てくれる  
運のない手相しみじみ八十二  
へそくりの仕分け私も考える  
貧欲も無欲も人は笑うなり  
新調のマニフェストサイズが合わず

唐津市 吉富 節子

ロボットに介護されてる夢を見る  
判押してあれよあれよと田圃消え  
無口だが目に物言わせ黙らせる  
合の手が入らぬ淋し独り言  
窓際が居なくなつて不況風

札幌市 小沢 淳

人間の欲は十色の嘘を吐き  
近況を語り合う場の三回忌  
詰め放題詰めております朝の駅  
幕降りるまでの人生夢芝居  
歳月はドラマを泡の如く生み

藤沢市 加藤 スズコ

よだれ掛け変えて初春待つ辻地蔵  
右ならえ身辺整理先送り  
新年は夢のつづきで幕開ける  
生き抜いて至福の今日を生きている  
他人めく言葉あわてるお元日

岐阜市 平野 あずま

ニューイヤールウイーンの曲を聴く茶の間  
背伸びすると見えぬ足下の青い鳥  
日記帳去年のことはうる覚え  
湯豆腐の湯気が地酒を呼んでいる  
古き良き洋画で癒す冬の傷

豊橋市 藤田 千休

空港を狭い国土にちりばめる  
茶柱が今日の予定にゴーサイン  
耳打ちの話にろくなものはない  
球根に明日の夢が詰まってる  
華やかな宴のあとに待つ空虚

大阪市 吉川 弘泰

まだ男齒の浮く誘い踊らされ  
春はそこ土手の土筆も背が伸びて  
札束を何度数える手の温み  
楽しみな穴を探して春競馬

大阪市 寺井 弘子

招き猫両手上げたくなる不況  
本音聞き少し距離おく友の仲  
誕生日うれしくもなくやつてくる  
正直に本音を言つて恥をかき

大阪市 松田 聰

バタバタを楽しんでます年の暮れ  
絵手紙は下手なものほど味がある  
あたりまえその幸せに気づかない  
三連休終わる頃には休みボケ

大阪市 尾崎 ゆめ

劣等感も私のプライドのひとつ  
反対をするとは言わぬ土踏まず  
馬車になる南瓜が少し臆病で  
忘れてた葉挿んでいたことを

大阪市 山本 加お里

初暦今年こそはと種を蒔く  
夫病み夫婦の絆深くなり  
泡なしのお茶で乾杯おめでとう  
ヒロインをわが身にかえている涙

大阪市 平井露芳

下手な字が生きてる証扱賀状書く

輸入物アカン言うても蟹だけは

桜までと言わず紅葉も見ましようよ

年越した鬼も見守る民主党

大阪市 片岡松枝

戦中戦後思えばみんな耐えられる

三兄弟大中小の親おもい

儀式かな顔見せにくるお正月

喜怒哀楽みんな忘れて昼寝する

大阪市 笠嶋惠美

我が家でも仕分け取り組む大掃除

この一年私を見てた埃たち

福袋買わんとやはり落付かぬ

見上げれば朝の三日月疲れ気味

大阪市 橋村容子

大波に難破しそうな新政権

うまい餅昔は質搗きあつたはず

年明けてまだまだ唸る冷蔵庫

北風が威張っているから身が縮む

池田市 上山堅坊

一言も話す相手のいぬ夜長

レジ前で見栄と本音がせめぎ合い

寝酒止めきつと縮める胴回り

ツナ缶がいつも戸棚に二つ三つ

泉大津市 助川和美

体重も二十五パーのエコしたい

子は宝手当もらえる時が来た

定年後妻に越された年賀状

就職難孝行息子バラサイト

門真市 矢阪英雄

ピタミンを一錠増やし峠見る

同病が顔で合図の春の朝

笑い顔寒い大気へ投げかける

えり巻きをしつかりしめて一歩出る

河内長野市 木見谷孝代

足元を照らし続けた母がいた

お帰りの声の向うにある明り

浮かすなら食費と決めたメタボ腹

浮いて咲く蓮も根っこは泥の中

河内長野市 山本莞子

誉められて調子に乗ってけつまずく

困ったなビールも酒もアレルギー

ウーロン茶下戸も酔ってる振りをする

クリスマス指折り数え悩む金

河内長野市 谷久美子

賞味期限気にせず毒味買って出る

がらがらの店で店主は昼寝中

テスト中余白に書いたダルマの絵

浮上した疑惑献金母の金

河内長野市 梶原弘光  
ストレスが踏んばりどこで顔を出す

新米が空気を読んで酒を注ぐ  
反応の遅れに腹のくくり時  
凡ミスは痛い先ずは深呼吸

河内長野市 辻村洋子  
夢の中幾ら食べてもスリムです  
肩書きを退職しても脱ぎません  
オレオレと言わない息子育ててる

河内長野市 内海綾乃  
雛人形急いで仕舞いまだ一人  
現状維持朝晩計る血圧を  
携帯で話すのきらいメールのみ  
監視カメラ何処に行っても映される  
寒空にハローワークの長い列

河内長野市 木太久 正 一  
年賀状今年は欠けぬ友の顔  
初日の出日本列島幸祈る  
寅年の幸せ祈る八十四  
細細と続けた日記二十年

河内長野市 松岡篤  
肅々とお神酒も出ない初詣で  
お土産を悩み悩んで買いそびれ  
水虫もやはり冬眠するらしい  
貴方だけ安くしとくと売り込まれ

岸和田市 中岡香代  
四次元のポケをねだり困らせる  
お利口がいつまで続く猫被り  
現実を逃避している反抗期  
キャッチするところがずれる男女間

堺市 羽田野洋介  
気休めの言葉が招くすき間風  
なけなしの知恵をむりやり搾り出す  
真ん中が最善だとは限らない  
どの程度か雀の涙見てみたい

堺市 遠山唯教  
濃い味の料理を避ける老いの舌  
目出度さが金粉と舞う酔い心地  
毎日のチラシをチェックする暮らし  
年金で亀の歩みに似て生きる

堺市 澤井敏治  
休養をたっぷり取ってまた太る  
お下りのセーターもなし一人っ子  
ゼロの数かぞえ損ねて恥をかく  
お隣さんなぜか詳しい身内より

堺市 近藤治子  
賀状から一年振りの友の声  
近頃は早めに終わるお正月  
お年玉孫より嫁が喜んで  
問題を起こして親を振り向かす

高槻市 片山 かずお

子はみんな妻の味方で僕の負け  
さりげなく忘れたふりで身を躲す  
小さ目のコップで幸せを受ける  
愛されも疎まれもせず古稀近し

高槻市 初代 正彦

風貌は同期に見えぬ同期会  
願い事鳥居の前で先ず拌み  
美味しいなまた来て食べよこのお店  
朝寝坊眩しい朝日久しぶり

豊中市 荒巻 夢

いつからか葛湯が好きになってきた  
山茶花のうるさいほどの紅もよし  
成るようにしかならないと肚くくる  
平安を偲ぶ社の車止め

豊中市 源田 啓生

拍手にあれをこれをと願いごと  
平成っ子が舵取る日本見て見たい  
母鳩の愛が世間を騒がせる  
三ヶ日寝て食う平和いつまでも

富田林市 古田 千華

帰らねば雛が灯りを待っている  
大喧嘩の後で仰いだ青い空  
ゴージャスな花束にある伏字かな  
ゲーム中あちこちに立つ漣よ

寝屋川市 岡本 勲

年金で綱渡りする妻の技  
介護の灯さけて通れぬ歳になり  
五十円で愛を届けるポストマン  
左遷地に妻から届く着払い

羽曳野市 仲谷 真一

マニフェスト事業仕分けでしぼんでる  
肺がんの計報聞いても吸っている  
煙草代値上げをしても吸うだろう  
相席で隣りに座る美女二人

羽曳野市 松本 静子

寅年の娘と屠蘇を酌み交す  
高齢者どこに住むのか悩む今  
此の家で自由に住めと言う娘  
カラオケに落葉踏みしめ行く私

羽曳野市 森下 一知

鉄工所錆を残して閉じられる  
忘れ物輪ゴムの腕に思い出し  
病み上がりつつかい棒に頼り切る  
落ち葉にも光かがやく過去がある

羽曳野市 宇都宮 ちづる

よそゆきがタンスの中で若くなる  
淋しさが寒中見舞いに書いてある  
蟹鍋に助けられてる話下手  
下手な絵も絵手紙になり味が出る

独り旅何処まで続く財布底

枚方市 坂本 ミヨノ

粗大ゴミ溜まり上司に叱られる

お年玉成人の孫類染める

自慢しておせち詰めてる母の笑み

枚方市 小川 良吉

妻の愚痴聞くゆとりある松の内

さすがだね遺産もでかい首相殿

乳母車押す親寝る子さすが似る

友愛で政治がもつか気にかかる

藤井寺市 吉田 喜代子

明るくて寿命も延びる二〇一〇

一人居にコンロがしゃべる風呂喋る

使つてははずの機械に使われる

ありがとう自分にあげる感謝状

箕面市 寺井 柳童

流星群星を拾ったことがない

期待の目打打発止仕分け人

派遣切り歩き疲れた靴の底

四股名から想像出来ぬ出身地

八尾市 赤木 妙子

ポーナス商戦暮れを彩る赤い札

北の話聞かせておくれ渡り鳥

袋帯亡母の匂いがまだ消えぬ

手の届く位置が辞典の指定席

円高のチラシ握って急ぎ足

八尾市 田邊 浩三

ポーナスを両手で受けた妻何処

クリスマス過ぎたケーキの処理哀れ

未だ死ぬ孫と一献差すまでは

八尾市 前田 紀雄

冬野菜虫に負けない汗をかく

脳休む暇なし口も手も八丁

白い歯が覗いてきつと良い知らせ

広辞苑にない新語を孫に聞く

大阪府 西川 冷子

ティッシュさえ白紙に愛を感じてる

終着駅こんなものかな人生も

湖東行く比良は雪渓菜花咲く

防風林松の姿勢はみな同じ

大阪府 坂口 公子

寄つて来て嬉しいけれどと言う財布

他人の目へどうも私の地味好み

さしあたり要らないけれど半額デー

差し上げたならそれで気がすむ悪い癖

大阪府 高木 道子

ポチ袋正装させた皺の札

裸木をやさしく包む初景色

介護施設やさしい夕陽纏い附く

はずれ籤までも見直す年初め

大阪府 神野 千恵子

小春日にはこりほこほこうれしそう

顔を出すだけで幸せ感じてる

昨日とも明日とも違う今日を生き

魂が希釈されてる長寿国

大阪府 小栢 こずえ

早起きも試練と思う寒い朝

弛んだゴム取り替えるよう初仕事

子に羨けられて厳しく古い自立

若さ好き老いてますます派手ごのみ

大阪府 畑 中節子

幸せは自分で作る日々ベスト

掛軸のおしどり羨むお正月

茶柱を愛でて正月盛り上がる

新米飯五臓六腑で微笑みて

奈良市 矢野 良一

心身を火鉢炬燵で温める

傘忘れまたの逢瀬のねたつくる

幸せは目刺し沢庵お味噌汁

あちこちに好い顔見せてくれたびれる

奈良市 尾畑 なを江

久し振り酒の力も借りてみる

手応えのあるうちはまだ望みある

自惚れもひとつぐらいはあっていい

肝腎な時に返事を濁す人

奈良市 辻内 げんえい

都合よい独り合点が増えている

男やもめ案外家事をこなしてる

ふんわりのオムレッツ僕の自慢作

売れ残りのケーキを買った帰り道

奈良市 阿部 茶々

みな巢立ち雛の飾りはお蔵入り

事業仕分けほんとのドラマよりドラマ

急いでも急がなくても日は暮れる

ええかつこ止めて素直にいくつもり

奈良県 谷川 憲司

原因は加齢の所為と医者は言う

今年こそと言いつつ一年が過ぎ

急いでいるのに母からの長電話

クラス会思い出せない人がいる

和歌山市 根田 よしこ

お正月お節横目に鍋囲む

お年玉孫ら素直にママの手へ

枯れ菊もしっかり新芽抱えている

デイサービス老母は紅つけいそいそと

和歌山市 坂部 かずみ

初売りの声もガランとしたデフレ

丸餅もお節料理も小さめに

丸餅も年格好に形崩れ

ひとつぬけふたつ抜けてく家事仕事

岩出市 藤原 ほか

結び目に家族の絆確かめる  
なんとなくはずす指輪にある本音  
あの頃の眩しい君に出会いたい  
新年が明けても旅はまだ途中

海南市 小谷 小雪

足元を固め背面跳びをする  
しぶしぶの足湯の母も居眠って  
右足が世界旅行に行きたがる  
足音に温度差見える二人連れ

紀の川市 北山 絹子

今日も無事二人でグラス傾ける  
よく笑う嫁で空気があたたかい  
愛犬と絆結んでいる平和  
勧誘へ電話の声が柔らかい

紀の川市 辻内 次根

貧しさを忘れる辞書を捲る時  
腹ばいで読書している好い時間  
見る景色毎日変る滑り台  
心まで貧しくなってきた寒波

橋本市 石田 隆彦

今日もまた元気な証しほやいてる  
名将のもらすほやきに味がある  
アリバイをすらすら告げる勇み足  
アリバイはギブとテイクの飲み仲間

神戸市 木村 忠義

今の名であの銀行はどれですか  
パン・ケーキどの店の名も外国語  
おじちゃんと呼ばれうれいしいなと思う  
冬が好きみんなで囲む鍋の湯気

尼崎市 小池 幸子

退く時も進める時もあつてよい  
菜園のキャベツいきいき年を越す  
今朝も無事雨戸の告知ご近所に  
軽く言う百歳までの遠い道

加東市 岩本 美緒子

この里は平穏元旦陽を拝む  
賀状から元氣百倍八十の虎  
体重の増えありがとう鍋料理  
薄くなった髪のカットは娘に任す

加東市 黒崎 美紗子

娘宅の正月休み早く過ぎ  
賑やかな客の日あては福袋  
朗らかにお屠蘇にお重有難い  
家毎の玄関飾り個性あり

川西市 日野岡 和之

消した句をまた書き直す年はじめ  
寿命まで生きる極みの楽天家  
たかが老いされど老いても光る汗  
咲く咲かぬ天に任せて光る汗

篠山市 沢山啓子

迷い道色々覚えたり  
立ち上るつかまる枝の色を選る  
丸い石探すツアーに出てみよか  
自惚れにも賞味期限があつたんや

三田市 辻 開子

お年玉幼児に札を断わられ  
三が日済ませて二人粥する  
初詣で諭吉と一葉ふわりふわ  
裾の開く介護ズボンに助けられ

西宮市 株元玲子

貧乏神と手つないで年越える  
年賀状みんな違つてみんないい  
虎の威を借りて自分に吠えてみる  
言い訳せぬ友の笑顔がまぶしくて

西宮市 泉水冴子

子の前でそんな話はやめなさい  
わたくしの仕分け身辺整理する  
税務署に見せてやりたい句が並ぶ  
アイコン描けば狸になるわたし

三木市 山口久子

無事の顔迎えて始まる夕げの輪  
ひ孫増え暇なし隠居まだ出来ぬ  
初参り家内安全鐘をつき  
年金は孫ひ孫へのお年玉

鳥取市 近藤秋星

何はともあれ新年だ乾杯だ  
新年の抱負慌てずゆつたりと  
一年の早さ会う人みんな言う  
恐そうな虎が舞い込む年賀状

鳥取市 坂本なつみ

夢の中金に埋つて目がさめた  
くつ下買い孫は夢みるクリスマス  
成長期脳にぐんぐん枝葉伸び  
楽しんで爪はぐんぐん伸びてきて

鳥取市 橋谷静江

時どきは自分のために金使う  
ガラクタに見えるが私宝物  
新しい趣味に取り組む寅の歳  
テレビ見て習つたメニュー食すむ

鳥取市 津村律子

三箇日好きなお餅と寝正月  
雪を搔く仕事初めの四日の日  
七草のお粥胃もたれ調える  
辛いなら一ツ加えて幸にする

鳥取市 高浜 勇

死神のたまたま死角生かされる  
ざらざらの心をつつむ絹の肌  
味自慢あてにならない暖簾文字  
肝つ玉すえ直球をど真ん中

鳥取市 山口 千代子

招かざる客に笑顔の技を見せ  
外でドン家に帰れば妻の尻  
フランス料理よりも刺身が口に合う  
老いるほど短所も丸く口も減る

鳥取市 大前 安子

良い噂耳はほっこりピンク色  
耳寄りの話に夢中雪積る  
耳掃除互いの膝を温める  
耳拾う噂話も匙加減

倉吉市 藤 井 美津恵

墓参り線香立てて愚痴こぼす  
七草のお粥いただきまだ元氣  
寒い夜お酒をちよつと戴いて  
しめ飾りゆがんだままでとんど待つ

倉吉市 前 田 喜美子

給料に見合う予算がむづかしい  
突然の出費に予算笑い出す  
通帳の利息を探す虫めがね  
車間距離守る車は新車だね

境港市 中 井 虎 尾

温暖化なのにまだ不寒い冬  
この賀状きつとあいさつだ名前ない  
いろいろな虎が賀状であいさつ  
かえりたいただかえれないまよいみち

米子市 小 塩 智加恵

今朝の妻口をとざした貝となる  
息子から短い電話定期便  
消しゴムで消せる言葉は軽すぎる  
よく縮む背丈で棚の鍋取れず

米子市 吉 田 陽 子

プツリプツリと御縁を断って冬籠り  
とびついて買いたい物に手が出ない  
一行詩を杖に闇から立ち上がる  
財産は思い出話たんとなる

米子市 見 山 温 子

古希迎え子には従う日を送る  
寒い日は手抜き料理の鍋になる  
オルゴール秘密一杯詰めてある  
年金も孫の数だけポチ袋

米子市 竹 村 紀の治

一年の恥の書き初め年賀状  
仏壇へチラリと見せて切るメロン  
まな板も包丁も無い新世帯  
戸締りをして気にかかるガス電気

米子市 加 藤 正 二

老いの愚痴日記に吐いて気を晴らす  
日捲りにまず医者行きを書いておく  
日記書き老いの度合を察知する  
血圧が今日の暮しを指図する

鳥取県 田中 一 眸

柔らかい雪がヒールにイケズする  
シングルの弱音を知っているお酒  
乗客の残り香乗せた回送車  
ブランドのタオル雑巾には向かぬ

鳥取県 大塚 美代子

安売りに走り手が出る無駄使い  
結論を急ぎはまった蟻地獄  
坂道を登り花挿す石地蔵  
故郷に想い出探す過疎の道

鳥取県 下田 茂登子

小額の年金削り餅をつく  
赤い糸切れたまんまで年を越す  
黒星が続きトラブル三年目  
一言が不足で起きた友の仲

鳥取県 田口 清帆

新しいカレンダーかけて夢もかけ  
おめでとう笑いの種を蒔いておく  
ふるりの貝殻節に励まされ  
健康は気力体力向う意気

鳥取県 岡本 幸枝

スタートは亀を手本に慎重に  
力瘤見せる男のエネルギー  
指で輪を決めてきたよと自信の息子  
大晦日せわしく今日の充足感

鳥取県 岩崎 和子

天と地の交信しきり雷鳴よ  
難病を乗り越え今も元気です  
病室の深夜天使の姿見る  
のど飴を舐めてよ咳が気にかかる

鳥取県 吉野 いさお

年金の付いてる夫扱き使う  
街角のカメラ見ている虎の群  
横着をすればするほど伸びる爪  
もめ事は足して二で割る世辞に長け

鳥取県 鳥越 鬼一

老い二人ずれた会話も気にならず  
お願いだボクより先に逝かないで  
しきたりを創り出すのはむずかしい  
老犬が老人励ます寅の春

鳥取県 加賀田 志延

辛い日を辛いと覚えて今日がある  
これからの十年活かす種植える  
心が疲れたら旧い友と会う  
ここですと主張している門構え

鳥取県 飯野 菖子

奇跡です余命と言われまだ生きる  
願いごと聞いてくれない神がいる  
青い空孤立を誘う一万歩  
こそこそと動きまわって明日思う

鳥取県 岡村孝明

温泉を掘り当て過疎も観光地  
抜け道を探し虎口を切り抜ける  
行政へ苦言はマスクかけて言う  
部下のミス叱らず我慢する辛さ

松江市 柏井日出子

友は魔女虎の背乗りもする威力  
虎落笛万葉園の風土記丘  
ちらしにも目を通さない暮し守り  
初句会女神と見れば敵でなし

松江市 錦織禮子

威風堂々暖簾が誇る出雲そば  
小宴が大宴になる新春句会  
ストラップじゃらじゃら鳴らし孫が来る  
憧れの自由が丘の駅に立つ

松江市 相見柳歩

探すうち銀河の外へ出てしまう  
直線でいたいイジメを見た時は  
粉々にされてもこころ生きている  
大切なところでタツチネットする

松江市 松浦登志子

天秤に掛けて離婚か年金か  
口角を上げて自分を励ませよう  
一日の終わりに風呂でする仕分け  
漢字だめ数字に弱く口ばかり

松江市 山根邦代

年賀状あちこち痛い同い年  
添え書きはゆっくりでいい焦らずに  
ありがとう言えて安堵の日々になり  
その先を聞かない癖の早合点

雲南市 森山彰

くよくよを捨てて人生楽天家  
夢を追いロマン求めて古希の坂  
初日の出希望と光り交又する  
きらきらと人生くるくる万華鏡

雲南市 渡部好榮

妻の味あつてないよな表裏  
黒豆も煮えたもうすぐ除夜の鐘  
一年の終りを始めとして生きる  
愚痴聞いてくれる今夜も犬といる

雲南市 武島ちよえ

あの頃は良く働いたふくらはぎ  
しきたりを若い世代に変えられる  
義理と義理決めかねている板挟み  
皺の数人も大根も味が出る

安来市 原煩惱児

羨まし九億くれるママ達者  
正月の孫に与える秘密基地  
正月を孫と遊んで叱られて  
舞台裏晒し政治が味気ない

美作市 小林 妻子

香南市 近 森 功

民宿の女将みたいにお母さん  
休耕田古い畳が敷いてある

皿一枚割ってごきぶり雲がくれ  
朝帰りごきぶり夫婦のお出迎え  
転んでもだるまは起きる技を持ち

老眼では見えぬが指紋あつた筈  
雨の漏るくらしも痛いほど分かる

人生に定年はなし夢を追う

竹原市 六田 半徳

北九州市 小松 紀子

激動の年を清める雪積る

新年は四の五の言わず頑張ろう

お年玉配り終えたら一安心

老いは良し今出来ることやれば良い

賀状には自筆一言ありがたい

な・なにこれ託児所完備パチンコや

日航機乗客増やし高く飛べ

私の悪いとこ似てるDNA

広島県 若年 幸子

唐津市 北村 松風

娘を案じ祈るほかなく祈る

寒波くる杖に負担をかける足

テレビゲームばあちゃんだよと呼びに来る

晩年は駈足でくる誕生日

一日一笑元旦の計たてておく

正月に好い事あるか虹を見る

冬籠りだんだん視野が狭くなる

錆びついた脳潤滑に酒が効く

宇部市 高山 清子

唐津市 岩崎 實

屈辱をバネに男の意地を見せ

黒豆の一粒一粒にある光

横道にそれで話は盛り上がる

天空より音を消したる雪の舞

言葉の綾消され氾濫する略語

孫ピアノフルート席をあたためる

お隣を引き合いに出す妻の愚痴

配達に配達たのむ年賀状

今治市 渡邊 伊津志

シドニー 三谷 たん吉

草筆り滴る汗が呼ぶ笑り

ばれたなら払えば済むという総理

古里の母の匂いを手で掬う

金出さぬ亡き母親に今感謝

重箱の隅のヒントに気が付かず

政治屋が民の目線の底を這う

子のは子供に渡す女店員

よく喋る医者と政治屋当てにせず

メルボルン 藤原 ポン吉

片付いた机に咲いた年賀状  
引出しの隅に潜ますお年玉  
三日までお餅お節で和を保つ  
止めに跳ね初心に帰る書のちから

網走市 角谷 幸 甚

願いごと言いそびれた流星群  
肉野菜入れた闇鍋無国籍  
耳うちも熱い息ならいいのにな  
凶悪犯親の願いの名前だぞ

東京都 井上 つよし

一秒が重い人生ロスタイム  
人生の勝負を賭けるロスタイム  
たつぷりと朝寝楽しむ冬籠り  
カラオケで喉の奥まで大掃除

東京都 高岡 弥 生

年賀状一言書いておめでとう  
ありのまま私のことを受けとめて  
二十年経って年金もらえるの  
何故かしら夫より子が大事なの

八王子市 上原 酒 坊

冬の夜はかさかさ肌がせめぎ合う  
暖房は孫が帰れば弱くする  
元旦はまだ酔っている爛冷まし  
すみません 出さぬ人から来る賀状

横浜市 巖田 かず枝

子も孫も自分も褒めてワツハツハツ  
掘り火燵ないから犬を抱いて寝る  
マッサージチエアを犬に陣取られ  
孫相手財布も頬も緩みがち

栃木市 岡野 すみれ

威張ってもいいのよ億の持参金  
道化師が笑う悲しくまた笑う  
勘違い確かに払った払わない  
お月様怒り消えたらまたあおう

佐渡市 高野 不二

一億を想像しても買わぬくじ  
金借りる時思い出す人がいる  
男の方が隅っこで呑んでいる  
四日にはもう会う人に出す賀状

静岡市 渡辺 芳子

身体に良い事全部やったら身がたぬ  
今の世にやっぱりいいな義理人情  
死に急ぐわけでないのに月日過ぐ  
ありがと一杯言って生きている

江南市 脇田 雅美

縄飛びに五感一斉動き出す  
見てごらん隣の花壇きれいだよ  
愛とムチ効き目しつかり処方箋  
内緒だよ言った方から喋られる

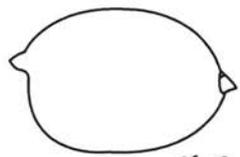
(藤井文代さんの句は51頁に掲載)

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)

(投句 七五六句)



く、ん

「耳」 三宅保州選

権力の耳は聞かない振りをする  
 耳打ちをされて大臣やつと立ち  
 基地移転あれは空耳だったのか  
 イヤリング女の見栄が揺れている  
 就活へピアスの穴が邪魔になる  
 鍋の耳片方取れて考える  
 片方だけ福耳なので便利です  
 裁つ前に先ずチェックする布の耳  
 飛行機にまだ乗っている耳の底  
 横文字になると聞こえが悪い耳  
 外国の街角で聞く河内弁  
 補聴器を外して今日をしめくくる  
 御機嫌が良いのか今朝は良く聞こえ  
 補聴器が猫の足音まで拾う  
 内緒事なら聞こえます一〇〇ヘルツ

米子市 白根 ふみ  
 羽曳野市 三好 専平  
 岐阜市 平野あずま  
 東かがわ市 川崎ひかり  
 西宮市 亀岡 哲子  
 羽曳野市 酒井 一壺  
 阪南市 森村 美花  
 海南市 小谷 小雪  
 大山市 吉田 幸子  
 東かがわ市 清川 玲子  
 シドニー 坂上のり子  
 八尾市 生嶋ますみ  
 藤井寺市 伊藤アヤ子  
 吹田市 太田 昭  
 和歌山県 岩本美智子

「耳」 高田美代子選

春の耳行進曲が鳴り響く  
 耳立てて春の足音聞いている  
 サクラサク派手に喜ぶイヤリング  
 耳の痛い言葉も添えてお年玉  
 聞かせても上の空です反抗期  
 聴く耳は持たぬ只今反抗期  
 聞く耳を持たぬ反抗期の扉  
 耳よりな話迷がさぬらほの耳  
 巢立つ日のレールの音が耳にある  
 五十年聞く耳持たぬ人と居る  
 子の勝手最後まで聞く母の耳  
 お隣に油断召さるな地獄耳  
 耳障り無くて中身も無い話  
 イヤリング付けて女の耳にする  
 空耳か君が好きだと風が言う

八王子市 播本 充子  
 紀の川市 北山 絹子  
 堺市 西村りつえ  
 堺市 源田八千代  
 大阪市 奥村 五月  
 鳥取市 倉益 一瑠  
 羽曳野市 吉川 寿美  
 和歌山県 堀 富美子  
 鳥取県 細田 裕花  
 岸和田市 雪本 珠子  
 大阪市 小泉ひさ乃  
 尼崎市 春城 年代  
 鳥取県 竹信 照彦  
 吹田市 須磨 活恵  
 豊中市 源田 啓生

ヘッドフォン耳にええことあらへんよ

耳に栓回り道して一休み

馬耳東風健康管理しています

年金の話になるとよく聞こえ

五十年聞く耳持たぬ人と居る

なつかしい声に耳から振り返る

よく聞けば何とわたしの早合点

ああ聞こえなくてよかつたひとり言

両耳で聞くからこそその紋所

この耳にフィルター掛けて暮らしたい

囁きを聞く耳たぶの有頂天

聞く耳が多くて前へ進めない

両方の耳から聞けば覚えませぬ

のんびりと狸寝入りも耳タンポ

コトコトとダンボの耳を煮だむ冬

家中の咳を知ってる母の耳

聞く耳に徹し介護を任される

妻の味耳かきほどの匙加減

耳として味わっている吟醸酒

王様になれそうロバの耳になる

パンの耳揚げて昭和の味をかむ

戦後史に未だ借りがあるパンの耳

大阪市	古今堂蕉子
岩出市	藤原ほのか
松江市	小川 注湖
美作市	小林 妻子
岸和田市	雪本 珠子
大阪市	大川 桃花
枚方市	小林 わこ
大阪市	神夏磯典子
羽曳野市	徳山みつこ
羽曳野市	宇都宮ちづる
香芝市	大内 朝子
堺市	志田 千代
豊中市	江見 見清
東大阪市	北村 賢子
和歌山市	古久保和子
大阪府	米澤 俣子
河内長野市	山岡富美子
神戸市	山崎 武彦
樫原市	居谷真理子
樫原市	安土 理恵
大阪市	笠嶋 恵美
大和郡山市	坊農 柳弘
西予市	黒田 茂代

裁つ前に先ずチェックする布の耳

有頂天の耳に届かぬアドバイス

異動月社宅の壁に耳が出来る

もの音で通じ合ってる老夫婦

ひとり言よく聞こえる老いの耳

補聴器を付けた男の聞かぬ耳

耳よりな話など無し八十五

不都合は聞かぬ存ぜぬロバの耳

初孫の福耳ばかり褒めてくれ

すばらしい音楽耳があつてこそ

補聴器を付けてはつきり聞くうわさ

耳鳴りに気付いてからの長い坂

耳二つ人の意見も聞くために

休日の耳にやさしいモーツァルト

ライバルの活躍ぶりが痛い耳

筆談に切り替えましょか老いの耳

元気だと耳に残った母の声

聞きたくもない話また聞かされる

掘りだした埴輪の耳が聞いた謎

なつかしい声に耳から振り返る

聞き耳を立ててストレス溜めている

よく聞けば何とわたしの早合点

海南市	小谷 小雪
高槻市	佐甲 昭二
東京都	井上つよし
熊本市	永田 俊子
富田林市	片岡智恵子
三田市	福田 好文
豊中市	安藤寿美子
河内長野市	村上 直樹
八尾市	高杉 千歩
河内長野市	水谷 正子
加西市	金川 宣子
和泉市	横山 捷也
神戸市	山田婦美子
芦屋市	黒田 能子
犬山市	金子美千代
熊本市	岩切 康子
神戸市	早川 孝子
藤井寺市	伊藤アヤ子
大阪市	伏見 雅明
大阪市	大川 桃花
大阪府	米澤 俣子
枚方市	小林 わこ
大洲市	花岡 順子

お気づきでしょうかあなたは耳年増

一粒の真珠を耳に通夜の席

聴診器並当れば響く樹の鼓動

喝采に耳を立ててる舞台裏

耳打ちで聞いた話は火事の元

耳鳴りに混じるあの夜のセレナーデ

春の耳行進曲が鳴り響く

耳よりな話たんぽぽ持つて来る

ストレスを溜めない耳の風通し

聴く耳も蓋する耳も持ち合わせ

両の耳閉じて聞こえるものがある

風に耳貸したばかりに胸騒ぎ

耽読の少女の耳を陽が透かし

遮断機を抜けた耳の好奇心

逆転があるかも知れぬ耳洗う

闇に掌をかざして耳を置いてくる

イエスマンの耳に退化の跡がある

米粒の乗る耳たぶを持つている

秀句

パンの耳彷徨う道を問うている

三半規管まだ覚えてる子守歌

青い鱗を研ぐ少年の耳ピアス

高槻市 片山かずお

吹田市 穴吹 尚士

和歌山市 磯部 義雄

枚方市 伊達 郁夫

西宮市 山本 義子

奈良県 渡辺 富子

八王子市 播本 充子

京都市 三宅 満子

京都市 松本としこ

大阪市 津村志華子

大阪市 井丸 昌紀

札幌市 小沢 淳

網走市 角谷 幸甚

紀の川市 宇野 幹子

大阪市 谷口 義

松山市 高橋 宏臣

青森県 松山 芳生

大阪府 初山 隆盛

京都市 坪井 孝一

大阪市 森田 明子

海南市 堂上 泰女

聞きたくない話へ重い両の耳

目も耳も年相応に衰えり

耳鳴りは雑木林をぬけてくる

若者の敬語を知らぬ耳がある

ちよっと耳貸したばかりにえらいこと

ひよっこりと耳鳴りがきて居座った

外国の街角で聞く河内弁

戦後史に未だ借りがあつたパンの耳

両の耳閉じて聞こえるものがある

にこにこ聞こえぬ話聞いている

聞く耳をもつて人間幅が出来

耳よりな話は夢のシャボン玉

斎場の扉が閉まる音を聴く

通り抜け自由の耳を持つてます

いつの間にポリウム上げて見るテレビ

耳奇りな話老犬聞いている

耳二つ持つて話を聞き漏らし

母子寮の壁には耳が生えている

秀句

耳に耳欝てる罪と罰

世話好きな耳がご近所歩きする

耳にしたことは黙っていられない

京都市 都倉 求芽

鳥取市 近藤 秋星

藤井寺市 太田扶美代

河内長野市 山岡富美子

八尾市 村上ミツ子

八尾市 生嶋ますみ

シドニー 坂上りの子

大和郡山市 坊農 柳弘

大阪市 井丸 昌紀

鳥取県 羽津川公乃

羽曳野市 永田 章司

海南市 堂上 泰女

弘前市 福士 慕情

和歌山市 喜田 准一

河内長野市 植村 喜代

大阪府 高木 道子

雲南市 菅田かつ子

唐津市 山口 高明

三田市 上垣キヨミ

鳥根県 伊藤 寿美

篠山市 藤井美智子

高槻市 片山かずお

# 愛染帖

## 新家 完司 選

寝屋川市 籠島 恵子

明日のこと考えるからケチになる

(評) そう、明日のことを心配すると今日を楽しめない。生きている保障など何もない未来のために残すより、今日のために使おう。

吹田市 穴吹 尚士

灰皿は吹きっ晒しのビルの外

(評) だんだん追い詰められて、今では全館禁煙。屋外で震えながらたむろしている愛煙家たち。それでも止めないのはアツパレ!

八尾市 高杉 千歩

仏さんに匂い供えてひとり鍋

(評) 夏には夏の思い出。冬には冬の、共に過ごした風景がある。鍋は「ひとり鍋」だが、ほとけさんと一緒に温もっているのだ。

茨木市 藤井 正雄

鍋のままラーメンすすする妻の留守

(評) ラーメン丼はあるが、使うと洗わなければならぬ。鍋のままでも味は一緒。男が一人になるとだいたいこのようなもの。

大阪府 初山 隆盛

ワクチンを打ってほんわか日向ぼこ

(評) ほっと一安心。これでこの冬も何とか無事に過ごせそう。予防できるものは予防して、のんびりほんわか心と身体を労わろう。

藤井寺市 鴨谷瑠美子

こわれもの注意と書いたベアカップ

(評) せっかく結ばれたカップルも、二分六秒に一組が離婚しているという。カップは壊れてもかまわないが、ベアはお大切に!

寝屋川市 岡本 勲

料金は着払いよと辛届く

(評) 宅配便代を払うぐらいなら買ったほうが安いようなものだが、想いを込め愛情を込めて育て上げた芋は一味違うだろう。

神戸市 田中 章子

高齢者いばつていたらいいのです

(評) とかく肩身の狭い思いをさせられ、卑屈になりがちな高齢者。この国の繁栄を支えてきたのだ、と胸を張って遊び回ろう。

西宮市 片山 忠

肩書きがないから名刺作らない

(評) 自信がある人は肩書きに頼らない。肩書きのない名刺もスッキリしていいものだが、寂しければ「自由人」「風来坊」など如何?

豊中市 水野 黒兎

また妻と猫語で話す冬籠り

地の中で春を忘れぬ固い種

橿原市 安土 理恵

わたしの翼折った男の妻でいる

うどん屋のメニューの端に「中華そば」お酒のめばほほは満点の妻になる

松江市 三島 淑丘

飛び跳ねるカレーうどんにご用心

草食系のお巡りさんに守られる  
ストーブで焼き芋もする爛も落ち  
かじかんた手から小銭が零れ落ち

和歌山市 古久保和子

狭いことしたら大事なものが減る

享年という神様のご結論  
繕えばまだスカーフもわたくしも  
どうしても先にゴメンが出てこない

橿原市 居谷真理子

本人は以下同文が気に入らぬ

会釈したマスク美人は誰だろう  
申カツを一度食べたいガード下  
日本の素敵な言葉お陰さま

鳥取市 岸本 宏章

老人会なんて言う会には行かん

北風は寒い無職はなお寒い

四条畷市 吉岡 修

越年のセンチメンタル除夜の鐘

枚方市 丹後屋 肇

初詣今年は何を願おうか  
太田 昭

海南市 堂上 泰女  
子のために築いた城に帰らぬ子

堺市 奥 時雄  
生き残り総会になるクラス会

鳥取県 山下 節子  
カルテにははつきり歳が書いてある

唐津市 坂本 蜂朗  
一年生朝の挨拶まつ四角

高槻市 初代 正彦  
省エネに新車が良いと妻口説く

朝日浴び通天閣が威張ってる  
西宮市 牧瀨富喜子

七草や部屋にはほりの吹きだまり  
豊橋市 藤田 千休

独善的と言われた晩の寒気団  
八王子市 播本 充子

膀胱に我慢を強いるコンサート  
高槻市 佐甲 昭一

ロケットに休憩させる不況風  
のろろと思ひ出探る裏通り

好きなだけ言葉に出せぬだけのこと  
米子市 小塩智加恵

石碑代ほどの貯え持っている  
坊様の訓話が受ける老人会

着のみ着のまま自由に生きて眠る猫  
坂上のり子

顔隠すマスクが癖になってきた  
安来市 原 煩悩児

初詣で頭上で鈴が鳴りやまぬ  
大阪市 小泉ひさ乃

墓石のカタログこんなにも格差  
札幌市 三浦 強一

黒光りするまで豆を煮てる春  
海南市 小谷 小雪

無防備の居間だと気付く震災日  
岸和田市 井伊 東吉

久々の寒波は神の試練かも  
篠山市 円増 純子

手招きで電車の座席ゆずられる  
鳥取県 竹信 照彦

寺参り靴まちがわれそのまんま  
孫たちにラーメン作り誉められる

晩酌は手酌有は有りあわせ  
大阪市 森田 明子

3D思わずずれてみたくなる  
道化師の笑顔は泣いているようだ

診察券失う老母を叱れない  
誰宛に遺書を書こうか冬の月

おふくろはいつも元氣と子と思ひ  
プランコも揺れぬ団地のお正月

夜更かしと早起き すれ違い夫婦  
弘前市 高瀬 霜石

帽子から鳩をとり出すマニフェスト  
和歌山市 木本 朱夏

犬の世話無断でボクに決まってるた  
京都市 坪井 孝一

小包の母の手紙を先ず探す  
唐津市 市丸 晴翠

ユーマアを充電してる三が日  
神戸市 山口 光久

橋の真ん中で息子とすれ違ふ  
親切な人と交差点を渡る

息を引き取り女の顔になった母  
独りの正月気楽なものを見栄を張る

体内を浄化したよな白い息  
鳥からは冬の私が籠の中

年賀状見ながら餅を裏返す  
成人というよりまるで七五三

ちらし寿司母の自慢の紅生姜  
堺市 加島 由一

老いたかなみんなやさしくしてくれる  
のびのびと暮せば伸びてくるいのち

香南市 桑名 孝雄

黒石市 相馬 一花

東大阪市 中岡 妙  
ルミナリエみんな笑顔で上を向く

和歌山市 福本 英子  
野良猫の餌やり暮れも正月も

京都市 都倉 求芽  
歯磨きをたつぷり元旦の顔洗う

高槻市 安田 忠子  
エプロンをきりりと締めて事始め

三田市 福田 好文  
達筆な人は手書きで来る年賀

鳥取県 斉尾くにこ  
オシャレ他娘に学びお正月

大阪市 川原 章久  
帰省子は客扱いの三が日

八尾市 生嶋ますみ  
七草粥ほわつと心温まる

浜松市 岡田 史郎  
七草粥ペンペン草も食べて春

弘前市 岡本 花匠  
七草粥凡夫の願ひまた増える

藤井寺市 太田扶美代  
パソコンのバから始めてみることに

三田市 北野 哲男  
捨てられぬ昭和がつまる天袋

堺市 宮本かりん  
こつこつと歩くだろうなこの先も

京都市 高島 啓子  
切るところハサミマークが付いている

鳥取市 土橋 螢  
年金をもらい徘徊癖がつく

大阪市 古今堂蕉子  
愛してただけは真心入れて欲し

八尾市 宮崎シマ子  
ベレー帽被っているが詩ができぬ

羽曳野市 森下 一知  
レギュラーの怪我で回ってきた日差し

米子市 政岡未延子  
お茶にする時だけ意見一致する

唐津市 樋口 輝夫  
噂ほど美人じゃないと二度も見

大阪市 榎本日の出  
寝る頃にうなづいています洗濯機

池田市 上山 堅坊  
宿冷衣ずらり乾杯待ち侘びる

西予市 黒田 茂代  
靴音にとつても聡い犬の耳

大阪市 岩崎 公誠  
妻に負け部長にも負け酒に負け

鳥取県 加賀田志延  
ストッキングはいて締めてる気のゆるみ

青森県 松山 芳生  
骨壺を満杯にする量はある

大阪市 津村志華子  
筆まめの便りも途切れ友が病む

河内長野市 松岡 篤  
仏壇で清く生きよと父の顔

栃木県 岡野すみれ  
御先祖の宝手放す暮らしむき

河内長野市 坂上 淳司  
ふるりの墓石雪の綿帽子

和歌山市 田中 みね  
飽きるほど生きてやろうか娘等泣くぞ

鳥取市 池澤 大鯨  
鼻をかむたびに入れ歯がはずれかけ

西宮市 泉本 冴子  
ルイ・ヴィトンわたしと馬が合いません

西宮市 藤本 直  
メール打つ絶対絵文字など入れぬ

岸和田市 森元ふみよ  
十五階屋根の向こうに日が落ちる

藤井寺市 津田シルク  
コンビ二弁当妻は今頃露天風呂

加東市 中上千代子  
恙なく食べて静かな冬ごもり

大阪市 小谷 集一  
二日酔い耐えて覚える酒の味

鳥取市 平尾 菜美  
雑用も詰めてやれやれ万歩計

弘前市 福士 慕情  
昨日より美味しくなっていたカレー

寝屋川市 森 茜  
私をすぐ手なずける電子音

堺市 村上 玄也  
標準語喋ると賢そうに見える

鳥取市 高浜 勇  
枝に刺す速鬚百舌のメッセージ

三田市 上垣キヨミ  
講演の横道だけが頭に残る

八尾市 吉村 一風  
木枯らしを受けてベダルで街をゆく

藤井寺市 若松 雅枝  
陽たまりの母の十八番はわらべ唄

和歌山市 喜田 准一  
敵しさをハローワークで教えられ

倉吉市 松本よしえ  
葉のむために三度も食事する

網走市 角谷 幸甚  
笑顔して喪服モデルのしなやかさ

大阪市 柴本ぼっは  
銀狐の襟巻詐欺師みたいやな

大和郡山市 坊農 柳弘  
恋人は恋人同十馬が合う

鳥取県 平木 公子  
揃って元気意外とそれが難しい

高槻市 富田 美義  
敵よりも老いる心が恐ろしい

和歌山市 玉置 当代  
医者と手を組んでゴールへひた走る

三田市 堀 正和  
配当は一割でしたジャンボくじ

芦屋市 黒田 能子  
丈夫です太い足でもかまわない

松江市 松浦登志子  
家中を電波時計にして安堵

八尾市 前田 紀雄  
句会の梯子受験生より敵し

藤井寺市 俣野登志子  
褒められて煽てにのつて疲れてる

宇部市 平田 実男  
だんだんと増える診察券と敵

鳥取市 吉田 弘子  
脇道に逸れた授業が懐かしい

奈良市 矢野 良一  
散歩したついでに拝む地藏さん

高知市 松尾 憲子  
ジグザグに進んで今日も日が暮れる

和歌山市 磯部 義雄  
介護したしないで揉める遺産分け

池田市 栗田 久子  
明日もまたどんな笑いが待つやうら

鳥取市 武田 帆雀  
同じ種から貧乏性と出世型

紀の川市 辻内 次根  
ぶどう酒のポリフェノールが良いみたい

尼崎市 小池 幸子  
だんだんと床に着くのが早くなる

大阪府 奥村 五月  
遠慮せず大の字になる妻の留守

東かがわ市 川崎ひかり  
お土産のチャイナ語読めず食べられぬ

富田林市 中井 アキ  
宝石はないが普通の子が五人

堺市 大隅 克博  
爪楊枝ぐらいの杖にまだなれる

京都市 三宅 満子  
コーヒーは濃い目右脳に浸みわたる

大阪市 野田 栄呼  
積雪にゴルフバッグが泣いている

鳥取市 土橋はるお  
白壁の土蔵に入れる物が無い

京都府 松本としこ  
としよりになったと思う身の動き

藤井寺市 鈴木いさお  
居酒屋へ行けばいつでも同じ席

弘前市 今 愁女  
節約も食べ物だけはたんと食べ

東かがわ市 木村あきら  
防潮林今日も雄々しく村守る

鳥取市 倉益 一瑠  
骨粗鬆症だけど遊びは止められぬ

枚方市 小林 わこ  
運が向いてきたようお腹すいてくる

大阪府 澤田 和重  
まだ脈がありそう笑顔くれたから

箕面市 出口セツ子  
立ち位置を確かめながら生きている

大阪市 太田としお  
勝ちすぎた民主小沢もタイガーも

# 誹風柳多留一篇研究 55

山口由昭・小栗清吾  
伊吹和男・山田昭夫  
増田忠彦  
清 博 美

422 若旦那に笠を張ツたやう

山口 原典となる万句合の前句「粋なことかな」から本多髻の形容と取る解がある。本多髻は本多忠勝の髻に由来するといわれ、江戸の中期以降長羽織と共に遊治郎の間で流行した。『守定護稿』の図などを見ると、古来の本多の他の兄様本多、疫病本多、金魚本多、団七本多、など色々なバリエーションがあるが、いずれも月代を広く剃り、髻を高くして比較的細めの髻である。また、髻に油を付けないのも特色であるという。

しかし、黄表紙の絵などを見ても、「額に笠」という形容が、いまいちピンとこない。どこからどう見ると笠を張ったようにみえる

のだろうか。月代の形が笠のように見えるのだろうか。むしろ「額に傘」で、細い髻を閉じた傘に連想すれば出来ないことはないのだが。流行に乗って粋がつている若旦那の句であることは間違いないさそうであるが、どこから見た何処の形容なのだろうか諸賢のご教示を。

かみゆひハ本田を母にことわられ

明四義3

かしへ行事など本田ひしかくし 安六梅2  
山田 礎の通り本多髻とするには無理。これは置き手拭いの一種の「吉原冠り」（大戻冠り）のことでしょう。

清 關犬額ではないかと思うのだが……。

423 ぶつかえりそうにつきやハかしこまり

山口 ぶつかえる「打返」は、ひっくりかえる。勢いよく倒れる。（日国）

「つきや」は白を引いてくる搦き米屋のことだが、信州など田舎から来る無骨な男と相場が決まっている。どういう場面かは定かでないが、米搦きを頼まれた家の座敷か板の間に招き入れられて正座し、緊張している様と考えられる。食事でも振る舞われたのかもしれない。とにかくひっくり返りそうなほどかしこまっているのである。その純朴さがよく出ている。

台所の敷居へつきやこしをかけ 明三義6  
さんまをハはつかしそうにつきや喰イ  
安元仁5

小栗 正座であろう。

清 同。

424 さしかねをこつさには入レ遣ふなり

山口 こつざ「骨挫」は、背中をかくのに用いる道具。まごのて。はいれ「菌入れ」は、下駄の菌をいれかえること。また、それを業とする人。（日国）

差し金は大工道具の一つで、寸法を測ったり角度を出したり、大工さんにとっては大変

重要な道具である。曲がり尺ともいわれる。この句では下駄の齒入れ屋さんが背中を掻くのに使つたらしい。大工さんではとても考えられないことである。家を建てる大工さんに比べて下駄の齒入れはややぞんざいな仕事と見られており、だからぞんざいなこともするとかやからかつて見ているのであるう。

納豆も呼ハにや下駄のはいれめき

明元信 4

おきアがれ下駄の齒入れも太子講

—太子講は建設関係を中心にする職人の講

一五六 17

小栗 ここで「こつさ」は、「こつさ」で「日国」では「少量であるさま。些細であるさま。些少」とあり、頼原退蔵氏は『川柳雑俳用語考』で、「些末、少量、けち臭いなどの意」とした上で、主題句を「大きい材木などをはかるのではないから、曲尺をこつさに使ふのである」とされている。その通りと思ふ。

さかいろんこつさな内ハいりりだし

明三宮 2

清 同右。

425 朝かへりしうとめこせの目がひかる

山口 朝帰りは男にとって気の引けるもので

あるが、入り婿の身になるとりわけであるう。本句の場合「姑」が出てくるから当然入り婿のケースである。

姑御前と言う敬称があるから武家で、男は旗本あたりの入り婿かもしれない。あるいは一般の家でも「姑御前」とややからかつて言っている場合もある。ともかく恐い目が光っているのである。

朝かへりころさされる気でつつと入り

明二仁 1

朝かへり女房かいふと御尤

明四礼 7

小栗 賛。入婿の朝帰りととは珍しいが……。

山田 目が光るのは嫁に対してではないか。わが息子は棚に上げての嫁いびり。

夜ル出すとこなたのせいと嫁へいひ

九 25

清 山田説賛。

426 下女腰をいたゞくやうにもんで居る

山口 単に下女が主人の腰を揉んでいるだけの句であるが、「戴くように」という形容が、相手を敬い、丁寧に揉んでいることを表している。商家にせよ武家にせよ、相手はこ隠居か当主などであろう。原典の前句が「うきくゝとする」であるから、これを下女の心ととれば、何かを期待しているのかもしれない。

下々心こしかいたいと下女をよび

天八満 2

御みんきよかなてるて光る下女か玉

拾二 9

小栗 賛。「一句にて句意のわかり安き」柳多留の句としては、下女の期待までは読みとれぬが……。

清 賛。単に下女の動作を描写しただけ。

427 ばん頭ハ女のぬけ荷斗かい

山口 お店者と呼ばれる日本橋の番頭、手代連中は吉原へも行くが、川一つ越した深川をひいきにしていたようだ。

番頭は一チの鳥居もこへたどら 安八松 2

深川で逢へば伴頭野暮でなし 傍三 29

などの句がこれを証明している。

小栗 抜け荷は、②店員などが、夜ひそかに店を抜け出して遊里などに行くのをしゃれていう語（日）。この「日国」の説明で解釈は尽きてしまうが、番頭は本業の商売では抜け荷をかうようなことはせず、買うのは専ら「女の抜け荷」（非合法の売春婦）ということかと思ふ。岡場所である深川の句に間違いない。

清 同右。

親しい

倉益 一瑤選



円周に親しい友を多く持つ  
ひと言が親しいなかを遠くする  
隙間風ほどほど通し仲が良い  
親しげに握手するのは選挙まで  
飽きるまで好きだと言ってくれますか  
ツーカーの中にもあった車間距離  
よいとこえ来たど久しいお友達  
親しさが擦り切れていく核家族  
親しみのハグを愛だと勘違い  
底辺を抜けて親しさと深くなる  
味噌醬油貸し借りをした路地の裏  
しんどさも親しい仲に潜んでる  
親しさが言葉つかいを荒くする  
親しさも温度差があるクラス会  
親しげに貧乏神が側に寄る  
ライバルも親しいうちに入れてある  
親しいのは単行本と置こたつ  
親友もここまでという保証印  
親し過ぎ言いたい事をよう言わぬ  
親しい仲刺激を合うどんぐりよ  
水虫と心ならずも不即不離  
饅頭を半分こする間柄

彩子 邦昭 勇 日の出 強一 はるお 碧 裕之 英子 福洋 (若)玲子 (山)節子 毅 淑 陽子 シマ子 可住 朝子 悦子 時雄 光久

親しさがちよつと踏み込むメール音  
親しみの持てるあなたの丸い鼻  
親友がずばり忠告してくれる  
親しんだ町の名消した新区画  
五欲みな豊んで集う酒の味  
親しみが沸いて心の鍵を抜く  
父と子の絆が太る腕相撲  
親しさが過ぎると愛の灯がともる  
冬の月親しい人を釣りにあげる  
親しみが埋蔵金は教えない  
親しさが垣根を越えた赤い花  
決勝戦親しい友も敵となり  
話ししたいことがあるので酒を出す  
ブレーキに油断親しさを破裂する  
將軍様親しく話しましょうよ

裕花 慕情 圭一郎 玄也 芳生 帆雀 岳水 一粹 みつこ 牙四 昌鼓 弥生 振作 千代 扶美代 一風 茶子 哲男 くにこ 霜石 播本充子

元線を抜いて家内に叱られる  
朝昼を抜いて出かけるバイキング  
まだ動くまだ使えると溜まるゴミ  
エコエコの大合唱を聞く地球  
一枚ずつ脱いで節約して昭和  
節約の音がたのしい貯金箱  
新米を横目に古米買い求め  
愛してる言葉節約して冷える  
オイル電化節約主義という手抜き  
家計簿の仕分けへ妻が燃えている  
誘惑に負けぬと財布ぎゅつと締め  
湯タンポと火鉢で冬を越す覚悟  
究極の節約はくが消えること  
さりつめて呪縛の解けた交際費  
我慢した日から小銭を仕分けする  
エコと言う殺し文句を手の内に  
女房に任せておこう抱き枕  
ケチやろか節約やろか紙一重  
節約を覚えてくれた不況風  
要るものと欲しいものとは区別する  
褒めことば節約してはなりません

次根 大朔 遡行 富子 古拙 弥生 俊子 花匠 志延 柳弘 慕情 (吉)幸子 いさお 淑子 柳波 銀波 くにこ 一花 敏治 千休 悦子 扶美代



節約

小寺 花峯選

無印をブランド品として熟れる  
暖房は節約出来ぬ共白髪  
姑の包丁しっぽまで生きる

節約の母のひび割れ愛おしい  
節約は美德と老母の背に学ぶ  
節約だ湯割り焼酎お湯が八  
ツギ当ては昭和の母の勲章か

節約は昭和と共に遠ざかる  
離婚劇愛を節約したらしい  
何もかも節約ある身の戦中派  
節約は余裕ある身の物忘れ

脳味噌を節約したら独り言  
節約はエコだと決めて生きる知恵  
千の風信し墓石は建ててない  
こぼれない程度にそつと注ぐ愛

節約の中にも夢の種は時々  
爪に火を点して脛を驚らせる  
マヨネーズ絞切り切つても立てて置く  
年金へ揺さぶりかける半値札

節約へ一歩踏み出すマイバッグ  
義理欠かぬ程度に老いの慰斗袋  
節電をして暗がりひとりごと  
放電の過ぎたサイフを引き締める

腹八分共に生きてる欠け茶碗

芳生

康子

典子

一粹

菜摘

振作

方子

冷子

碧

ゆきの

孔一

巴子

公誠

あずま

霜石

裕花

強一

和郎

正和

岳水

輝夫

螢

宇野幹子

ベスト

板山まみ子選



まだまだとベストの時期を取り逃がす  
ベストセラー評判ほどでない中身  
湯豆腐はベターお造りならベスト  
環境へベストをつくすこと誓う

ベストセラー読む気ないのに買つてみる  
貧弱な体ベストでかさあげす  
最善を尽して飲んでいるお酒  
スパコンへベストの顔が物申す

ベストだと信じて死んだ自爆テロ  
ワクチンは体調ベスト問うてくる  
さあ飲むぞ今年はベストコンディション  
全力を尽くした負けにない涙

反抗期親のベストが気に入らぬ  
あれば良いベストの職は望まない  
新政権ベストの壁に入るひび  
広告でベストセラーを知る過疎地

信頼をするのがベスト子の育ち  
くたびれた妻だがベストパートナー  
無位無名ベスト尽したデスマスク  
星よりは食のベストは旬の味

添い添けてベストだったと思いたい  
ペアルックベストぐらいが限度です

ヤドカリは上手にベスト探し出す  
伊達男下にこっそり着るベスト  
気が付けばベストセラーの虚偽記載  
最善を尽せば見える麴の底

言い訳をしながらベストセラー読む  
分相応これが私に丁度よい  
体調がベストな時は気もゆたか  
しあわせな今がベストと思いたい

ベストテン何でもランクつけたがる  
暇だからベストセラーを読んでいる  
今これが私のベスト人は人  
ベストセラー独りの夜を厭きさせぬ

愛された分だけベスト尽くしている  
身長はベスト記録のまま記入  
いい朝といい昼がありうまい酒  
チヨッキどこベストですかに返事せず

核のない世界平和がベストです  
いつだって今がベストで生きている  
脳の錆ベストセラーで掃除する  
微笑はベストうれしい送りもの

八十歳のベストで病夫看ています  
体調はベストふところ寒いだけ  
生きていることがベストと言ひ聞かず  
とびきりの笑顔飾る大往生

明子

正和

碧

酒坊

くにこ

克博

美智代

淑子

満子

順子

美千代

あずま

柳弘

時雄

霜石

敏治

振作

陽子

一花

檜代

シマ子

ミツ子

辻内次根

# 初歩ノ教室

題一メール

鈴木公弘

先月号に掲載した添削句に私の勘違いがありました。まずは訂正して、お詫びさせていただきます。

原 初競りの向う鉢巻良く似合う 紀雄

添 初競りに向かう鉢巻よく似合う

正 初競りの向こう鉢巻よく似合う

原句の「向う」を「向かう」の「か」抜けと誤解したことに尽きます。「向こう鉢巻」と読むべきでした。申し訳ありませんでした。

さて「メール」。近頃は年配向けの携帯電話機が普及し、写メールやデコメールの時代になりました。メール便もよく届きます。あるいはEメールを趣味にしておられる方もあるでしょう。機械は世につれ人につれですが、相手を強要する便利さは、時に心情を害し、迷惑になることさえあります。おそらく、その辺りを描いてくださるのではないかと予測して待っていました。結果、六十四人からご応募いただきましたが、さすが川柳家と思わ

せる関心の強さと視野の広さには驚かされました。全員、しっかりと描けていたと思います。これといつて特記することはありませんが、中には送り仮名を省略された方がありましたので、まずそれを訂正します。

【もう少し推こうしてほしかった句】

原 飯に風呂一斉メールが部屋に飛ぶ 振作

添 飯に風呂メールみんなの部屋に飛ぶ

中8です。多読多作に努め、早いうちになりズムを体得してしまってください。

原 三歳時メール見事にあやつてる 健柳

添 三歳児メール見事にあやつてる

原 遠い国孫から届くエアメール 久子

添 遠い国孫から届くエアメール

原 携帯メール独り暮らしを監視する 正二

添 携帯メール独り暮らしを監視する

原 メールとは違う気持ちの手紙です 嘉彦

添 メールとは違う気持ちの手紙です

小事かもしれませんが、正確を期してご注意申し上げておきます。

原 さり気なくメールに乗ってくる情菜 摘

添 さり気なくメールに乗ってくる情け

原 指運動泣かされながらするメール開子

添 指運動に泣かされながらメールする

上の部分が六音であつても七音であつても、

さほど問題にはなりません。できれば流れが

切れないように描かれたほうがいいでしょう。

原 今日も無事時間厳守に母メール ミエ

添 今日も無事時間守つて母メール

原 待つてますアートの誘いの美辞メール 泰

添 待つてますアートを誘う美辞メール

次からはメールの形態です。

①電話確認

まずメールそして電話で念を押す りこ

添 メール受け返信いつも電話する ヒロ

原 Eメール取り消すために電話する 堅坊

添 「Eメール取り消すために電話する」

原 Eメール確かかどうか電話する 安子

添 Eメール来る見たかと電話飛んで来る はじむ

②子・孫・若者

原 会話よりメールでつなぐ親子です 智加恵

添 孫からのメールは春のお知らせと 清

原 ひとり住む子からのメール眼を細め 俊子

添 新年のあいさつメール若者は なつみ

原 親が子に食事の希望問うメール みち代

添 そつけない息子のメール金おくれ 美紗子

原 メールなどせんとたまには顔を出せ 敏治

③妻

原 会話なくメールで交わす倦怠期 酒坊

添 妻からの迷惑メール拒否できぬ 憲彦

原 諍いの妻にメールで言うごめん 孔一

④便りの手段

原 手紙からメール世代が逃げて行く 正彦

添 メール増え賀状へるのも淋しいな こずえ

「メール増え質状減るのも淋しいな」

お便りが軽く消え去るメール便 かずみ

ペンだこがメール打つ指止めている 千恵子

⑤失礼なこと

黙祷中そぐわぬ音が鳴り響く 紀雄

「音」だけでは携帯メールの着信音とは言

い切れません。要工夫。

人の死を絵文字で送る非常識 いさお

喪中までメールで送る若い喪主 義雄

⑥恋

ジェラシーが爆発しそう恋メール 幹子

恋文をメールにしたら笑われた 憲司

メールから不倫していた事が暴露 秋星

ラブラブのメールに絵文字たんとおある ちづる

誤字メールきて恋しさがスツと冷め ふみ子

情緒より結果を急ぐ恋メール 篤

⑦指

指先のメール飛び交う電車内 唯教

早々に送れぬメールもどかしい 宣子

携帯のメール難儀な太い指 光弘

メール打つ指きつつきのように見え 治子

⑧多種多彩

連絡網メールですます地区行市 節子

声出ないメールが苦手ストレスに 綾乃

メールから絵文字のポーズ心あり 文代

小春日にメールで会って古着市 ミヨノ

数打てか迷惑メール飽きもせず 志郎

おばちゃんは領きながらメール打つ 宏造

メールにも人の性格表れる 弥生

「現れる」のほうがいいかと思えます。

命よりメールの方が大事です 勇

着メールときめき開ける程もなし 冷子

【入選】

メールでは身分の上下分らない 啓子

うっかりとメールで尻尾掴まれる 志延

悲しさは迷惑メール知ってる 律子

淋しがりメール打たねば眠れない 紀子

写メールで生のふる里飛んでくる 孝代

エコメール行間の文字読み切れず 玲子

【佳作】

メールする相手も居ないひとりぼち 恵美

真夜中にメールがとどく雪だより 弘子

こうのとりの餌はあるかとメールする 孝明

メール打つその手は漢字覚えな 隆彦

さよならの後にメールを待っている くにこ

【今月の推せん句】

メール打つ表情みんながまの顔 谷久美子

どっしりと構え、一点を睨んで黙々と打ち

続ける顔を「ガマガエル」になぞらえた着眼

の良さ、見事です。私も実は携帯メール狂で

すが、他人の前ではなるべく打たないように

します。

声のないメールにはいと言つてやる 高木道子

強烈な一発ですね。確かに多忙を極めてい

るときのメールは迷惑に近いものがあります。

それだけ電波は律儀で、指示されたとお

りに目的を達成しようとしています。でも、叱ら

ないでください。悪いのは着メールではなく

発信者なのですから。

風呂トイレ行って来ますとメール入れ 梶原弘光

これはまた律儀なこと。「おたく」の城を

突き抜けたメール魂ですな。笑えます。

余談ですが、私の知人に旅の先々からいつ

も自宅に電話を入れる方がおられます。病人

や要介護者がおられるとは聞いていませんの

で、報告なのか奥様への欠かさぬ愛情なのか

知りませんが、ここまでやれば、奥様にとつ

て解放感どころではないでしょう。過ぎたる

は及ばざるがごとし。

【私の句】

顔色の見えないメール誤解生み

いくたびも墮ちるメールの出会い系

(登載漏れの方は役員が添削して返却します)

お願い 投句用箋の雅号の欄にはお名前だけ

でなく、姓も必ずお書きください。

# 秀句鑑賞

同人吟山本 希久子

— 2月号から

川柳塔誌は今年の九月号を以て通算千号となり。大正十三年二月麻生路郎師により川柳塔誌の前身「川柳雑誌」は創刊されました。爾來八十七年、時代は変わっても川柳は、

それぞれ生きた時代を詠み、人間風詠の文芸であることに変わりはありません。また「句は人なり」とも言われましたが句にはおのずと人柄が表われてくるものです。想いも表現も個性だと思えます。

この度秀句鑑賞をお受けし数日をかけて熟読した同人欄の約千六百五十句にはそれぞれ個性の彩りがあることを実感しました。

これまでの私は編集の立場にあつたので句を味わうより校正の目で字面を追つてばかりいたようです。この度はじっくり心に響く句と対話しながら鑑賞させていただきました。

ちよっぴりの優越感を引き出しに

徳山 みつこ

優越感も誇りもあまり表に出さぬ奥ゆかしさを持つておられます。しかもそれを持ち歩くバッグに入れるのではなく、人目の届かぬ

引き出しにそつとしまつておられるという小道具の使い方にも、感性がうかがえます。

大金は落すが拾うのは小銭

奥 時雄

総じて人生は得をすることは少ないと云うことでしようか。まず慎重に大金を失わぬよう欲張らず、地道に生きることが結局は得策だと言つておられるように思いました。

西暦や昭和・平成ややこしい

松本 よしえ

今年西暦二〇一〇年、昭和を教えれば八十五年、平成は二十二年という年です。我々の世代では昭和の通年が一番わかりやすい気がします。私など生きて昭和百年を迎えるのは難しいねと、同年と話しております。他に「平成と西暦覚えては忘れ 千歩」の句がありました。

バリアフリー畳のへりに蹴躓き

山田 耕治

六畳の座敷はバリアフリーのはず、それなのに極くわずかなへりの布に引つかかった

足、全くの不覚。そして老化という見えぬ敵がいるようです。私も昨年家の中のたたきで転んで右肘を骨折、全善治に半年かかりました。自分との戦を止めた敗北者

中宇地 秀四

敵は身の内にあり、いつでもせめぎ合う二つの心。そして葛藤を繰り返しながら生きていくのです。弱き人間、自分との戦を止めた時こそ人生の敗北が待っています。死ぬまでの戦であり迷い続けるのは人間の宿命です。

子に問えばネットに聞けと言うばかり

堀 正和

今の世を鋭く突いています。どんな問にも即時答えてくれるインターネットという怪物、以前はおばあちゃんの知恵袋といつて経験豊かなお年寄りは重宝がられたのですが、もう年寄りには不要とばかりに、後期高齢者とひと括りにされて遠ざけられるのは何とも納得のいかぬ話です。

松園の絵から鼓の音がする

田浦 實

日本画家上村松園さんの描く美女の舞う姿には動きが感じとれます。そして鼓の音すら聞こえてきます。真に魂のこもった芸術作品とはこういうものでしょう。また句の作者の感性も素晴らしいと思えました。

エレベーターに舞い込んでいたイチヨウ

高島啓子

立春の響き小川が歌い出す

栗田久子

落ち葉踏む音に孤独が深くなる

森田明子

「川柳は森羅万象との出会ひである」とは  
橋高薫風前主幹の言葉です。出会ひは感動で  
あり川柳が生まれるきっかけでもあります。  
三句共に季節を感じた川柳の目や耳です。

一行も書かず鉛筆が折れる

古久保和子

原稿用紙に向かつても一向にペンはすすま  
ず徒らに時は過ぎてゆくばかり。そんな気持  
の焦りが伝わってくる句です。

過去の栄光自慢するたび人が去る

福田好文

「栄光の日も一日は二十四時 薫風」どんな  
輝かしい栄光であっても時が過ぎると色褪せ  
日々忘れ去られていくものです。過去の栄光  
にひたるばかりでは進歩ありません。それ  
を口にする度、人にはそっぽを向かれ、自分  
には更なる栄光への試練が課せられるのです。

暇という毒を食らってから太り

太田昭

人生の達人とは上手に暇をみつつける人だと

思います。ほどほどの暇は暮しに必要ですが  
何もしないというのは人間を駄目にする毒物  
だと言っておられます。忙しいと言いながら  
時間を無駄にしている私、そして暇な暮しに  
憧れている私にとって、この句にゴツンとや  
られた気がしました。厄介なことにこの毒は  
一度味わつたら止められぬという甘美な味な  
のです。

酔うて候月よわたしとワルツなど

西口いわゑ

こういうリズム感のよい楽しい句に出会う  
とほっとします。ほろ酔うてワルツのリズム  
に乗る相手はお月さん。「遊びせんとや生  
まれけん」嫌なことは忘れ余生を大いに楽し  
まねば。お酒をたしなまれ、生き上手の作者  
を見習いたいものです。

マヨネーズで和えて本音をつやむやに

木本朱夏

どんな素材でもマヨネーズで和えるとそれ  
なりの旨味がでます。料理は素のまま、万能  
のマヨネーズでこまかせば小鉢一品出来上が  
り。本音はあからさまにせず、上手にマヨネ  
ーズのころもにくるむ、円満に世を渡るコツ  
なのです。遊びのころで作りながら、ちゃん  
と真理をついておられる技巧派の朱夏さんな  
らではの句です。

掃く人に遠慮しながら散る銀杏

福本英子

風にさらいながらためらうように地に落  
ちる銀杏、上手に季節のシーンを切り取っ  
ておられます。

掃く者にとって落葉は、遠慮なく掃いたあ  
とから舞い落ちる不埒者のように思われ勝ち  
なのに、遠慮しながら散っているという受け  
とめ方の違いは、とりも直さず作者のやさし  
さだと思えます。

太陽を浴びると泣いた雪だるま

石倉美佐子

「雪達磨春を迎えに行つたきり 螢」を思  
い出しました。螢さんの句を特攻隊として散  
つた仲間へのレクイエムと薫風前主幹は解さ  
れました。美佐子さんの句も、頑な心が太陽  
のようにぬくいひと言により溶け、なごむ体  
験をされたのかなと深読みをした次第です。

紙面が尽きましたのでその他に残る句を  
挙げさせていただきます。

手のうちを見せてしまつてからひとり

牧 渕 富喜子

手裏剣が口から飛び出さないように

居 谷 真理子

ツインビルもはや初老になつてきた

太田 扶美代

# 秀句鑑賞

— 2月号から

籠島恵子

新聞の余白に一句書きとめる

孤独とは言わず孤高という誇り

岡田幸生

思わずそうそうと、呟いてしまいました。一刻も早く書き留めたい時は、新聞だったりレシートだったりして。二句目、誇り高く暮らされている後ろ姿が感じられました。

がらくたを捨てる勇気を娘から

三浦千津子

五年前母が亡くなりました時、同居していた義妹に頼むのは大変と思い、妹と母の物を整理しましたがそれは大変でした。もったいないと思いつつもタンスを空っぽにしたものです。心がけていても増えております。

言いたいこと言えは割れそうシャボン玉

福井菜摘

そつとそつとしておかなければ壊れます。息詰めて見守って下さい。

九十八男やめめの針仕事

飯土井健翁

わが家でも「ボタンぐらい自分でつける」と言いだした夫に、小さな針箱を渡しています。

忙しく生き忙しく死んでゆく

安藤なつこ

明日の予定があるのに死んでしまった。なんて言うのが理想だと思っているのですが。

アリバイがないのでここで目立つとく

山室光弘

思わず笑ってしまいました。でも居直るよりほかないですね。満員電車の中では両手を上げておくと言う男性のようです。

報酬は自分で決める主婦である

尾畑なを江

自分に御褒美という。自分で褒めるばかりじゃつまらないなんて思っていました。ホントそうです。

北風に押され脱線したくなる

大峠可動

脱線できる内が華かも知れませぬね。

日の丸の裏にはためく星条旗

三谷たん吉

外国におられて、日の丸への思いは日本にいる者とは、また違うのでしょうか。万感の想いが感じられました。

嫌な事笑ってすます歳になり

河田洋子

暖冬と聞いてうれいしい歳になり

安達厚

年齢を重ねるといふ事ですかね。嫌でも悟る事が起きてくるのですから。

温暖化は困るが正直なところ寒さに負けており、若い頃の暑がりな嘘のようです。

欲のない人でもどうにも攻めあぐむ

片山かずお

賄賂などもつてのほか、取り付く島もなく、扱いにくい人なのでしょう。

もういいな充分義理も果たしたよ

羽田野洋介

高齢の両親が、お中元やお歳暮の手配をしているのを見た友人は、たとえお世話をしたとしても、高齢の方から御礼を貰おうなんて思っていないから、もう止めるよう言ったとか。十年くらい前に聞いた話ですが、義理がたいご両親だったのでしょうか、いい助言だったと今も思い出します。

そのほかいいと思つた句です。

空模様心変わりを買められぬ

高山清子

杖になる木が見つからぬ冬之道

矢阪英雄

# 麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

不死鳥

水の垢

配給をさへも流して生きんとす

背の高さまでも負けてることを知り

白米の弁当へ眼の多いこと

学驚へ父まだ若く母強し

お見外れをされて戦闘帽を脱ぎ

起重機の如く働いたのもしき

兼務兼務 東條さんへ続く気か

翻へる袖はなくとも美しし

朗らかさ柔道着ほどつづくって

牛老ひて家族のようにいたはられ

諦めてもらった夫ですと云う

腕白がそうかやったか体当り

看護婦となって仏印だよりかく

泰にいるそうなど稲の草をとり

軍属の自信講道館五段

哀史一篇南欧に陽は沈む (伊無条件降伏)

お膳が出たのに印度がまだ来ない (全印度よ立ちあがれ)

衣料切符持つてるだけで気が強し

戦術にしては断食すねたよう

祖国あるのみ旋盤工となり

許嫁釘ぐらるはつけてくれ

をかしきはいつが孫の話する

ベンチャラを電話でまでもまくしたて

敵前上陸僕はふじみにて候

# 本社二月句会

二月九日(火)午後一時  
アウイーナ大 阪

コートが重く感じられる、二月とは思えない暖かい日に、初出席二名を含め百三名の出席で二月句会が開催された。

お話は前たもつ相談役。「句碑を訪ねて」と題された。

今、話しておかなければ散逸してしまつとの想いの阿萬萬的氏に代わり私が話しておきます、との事であった。内容は萬的氏から引き継いだ話、前たもつ氏自身の十年日記、同人の方々から提供を受けた写真や色紙など、多彩な資料に基いていた。

麻生路郎、中島生々庵、西尾葉、橋高薫風など歴代の主幹の句碑建立のいきさつを、色紙や大きく引き伸ばした句碑の写真などを利用して、楽しく興味をそそる語り口であった。弓削川柳社と麻生路郎師の深い関わりがあつて、弓削の駅前に立派な句碑が建立されたなどと、柳歴の新しい私達の知らない秘話が続いた。尾道文学公園、弓削川柳の小径公園、白鳥黒川温泉、白鳥中央公園に、生々庵、葉

薫風の歴代三師の句碑が建立されている。

俺に似よおれに似るなと子をおもひ 生々庵  
うき草は浮きくさなりに花が咲き 路郎  
温泉や座りらんかに寝る羅漢 葉

うろこ雲一枚こぼれ亡母の恋 薫風  
最後に「薫風先生と句碑を訪ねて」と題しても良かったかなと往時を振り返られた。

(能子記)  
月間賞は高田美代子氏(藤井寺市)に輝く。

(司会)美籠・昭(脇取)蕨子・扶美代  
(受付)桃花・美智子(清記)光久・善純

席題「眩しい」 吉村 一風選

翔んでいる人が眩しく妬ましく  
朝帰り答めるように陽が昇る  
満ち足りた笑顔眩しい披露宴  
娘の挙式眩しく見えて涙ぐむ  
惚れて眩しく女の顔が光つてる  
ひと言で眩しいひとになりました  
眩しくてまともに見れぬ片思い

青春の汗が眩しい甲子園  
がんばれジャバン眩しいほどの金メダル  
春うらら眩しい孫のランドセル  
厳格で眩しいほどの父でした  
隅っこ男眩しい論を吐く

百歳の母の笑顔のまぶしさよ  
老いの瞳に眩しい孫の晴れ姿

眩しくて細い目がより細くなり

華燭の典吾が子眩しい母の胸  
新天地へ旅立つ姿眩しすぎ

ライバルの若さ眩しく見てしまふ  
眩しいほど輝いている嫁今朝  
冬木立こもれ日眩し春はそこ

眩しいな頼まれたこと忘れてた  
ひと筋の道が眩しい鶴彬

振袖の二十歳の孫に見とれてる  
万物へ眩しく照らすこ来光

遠くから眩しい方を拝んでる  
ふくらんだむねが眩しい孫娘

とつとき笑顔眩しいランドセル  
ポランテアの汗は眩しいほど光る  
退院の目には眩しいものばかり  
健康はとでも眩しいことである  
自立する子が嬉しくて眩しくて  
太陽がお早うと顔出している

人間もダイヤも光るまで磨く  
嫁がきて眩しくなった台所  
眩しくも淋しくもある子の巣立ち  
酔うほどに妻が眩しく美しい  
真つ白な地図が眩しい子の巣立ち

赤ちゃんの笑顔がとても眩しくて

登志子

キヨミ

満子

美籠

光久

舞夢

勝弘

ダン吉

さくら

賢子

耕治

柳弘

保州

扶美代

朝子

義

太郎

良一

光久

千里

賢子

尚士

一步

地 路地裏の家にも眩しいほど朝日 扶美代

天 煙し銀眩しい過去は語らない 好

妻の汗いつも眩しく見えています

兼題「ジャズ」 山田 葉子選

父さんはジャズのリズムで葱ききむ 朱夏

眠れぬ夜ラジオのジャズに小半時 庸佑

軍歌からジャズ夢みたいチェンジした 修

若き日の煙草覚えたジャズ喫茶 郁夫

爺ちゃんがジャズを歌っているお風呂 美花

若い日にシングシングで血が騒ぎ 靖博

リハビリの骨に染み入るモダンジャズ 則彦

セブンティーン少背伸びをしたジャズ 登志子

サッチモがやっぱりジャズの王様だ 勝弘

貧しさをジャズに託して吹くベットの 見清

ジャズが来てパパマと呼ぶようになり 義

北風小僧ジャズを踊っているような みつ子

ジャズ喫茶出たら演歌の街だった 時雄

敗戦の哀しみジャズにかき消され 無限

サックスの音色鳥肌たつてくる 朱夏

コココーラとジャズで日本の間が明け 昭

デキシシーを踊るスカート花になり 時雄

スイングジャズと夢分け合った青春期 良一

貧しさが青春だったジャズ喫茶 富美子

大阪に元気をくれる綾戸智恵 楓楽

ジャズ知らず氷川きよしに夢中です さくら

恋文にジャズチケットが踊り出る 公誠

ピカドンが軍歌をジャズに変えた夏 弘風

英語でジャズを歌えるけれど喋れない 弘一

アフタービート五線譜すてとんでいた ばっは

ジャズダンスリズムにのれたのは昔 みつ子

馴れ初めも別れもジャズが響いてた 菜々子

生気溢れる心の叫び貰うジャズ 俶子

もう一度ジャズを踊ってみたい脚 美代子

老骨を二十に戻すラゲタイム 好

ジャズメンがハートブレイクぶつ飛ばす 富子

傷だらけの青春疼くジャズビート 富子

夕焼けの廃墟に風の運ぶジャズ 恭昌

トランペットソロに脳天揺さぶられ 女也

テネシーワルツ心の海をかき回す 扶美代

民主主義とジャズがジープに乗ってきた 耕治

ジャズ聞くと脳細胞が踊り出す 朝子

輝いていた青春のツービート 好

幻のサッチモを聞く異人館 卓

デキシシーにこころの芯を揺すられる 楓楽

ジャズピアノ聴くたび違う語り口 卓

兼題「杭」 江見 見清選

奔流の中にきりりと父の杭 哲男

年金の杭につながるよく遊ぶ 雅明

根回しの杭はしつかりたく打つ 房子

羽目はせず少し手前で妻の杭 賢子

大好きな男に杭を打っておく 朝子

ふり切って一度に杭が抜けました わこ

亡父の打った見えない杭に止められる 葉子

根回しに一本杭を打って置く 章久

杭打てば猫も会釈して通る 登志子

口開けたままの締まらぬ杭の跡 則彦

折り返し今日から杭を抜いて行く 千恵子

母の打ったか細い杭が効いている 扶美代

その杭を抜いたら堰が切れるだろ 理恵

どん底のやりくり杭が知っている 唯教

焼け棒杭に火がつきそうで逢えません 昭

杭抜いて逢いに行きたい人がいる 瑠美子

しだれ桜杭にもたれて吠えています 義

生きた証に小さな杭を打っておく いわゑ

乱杭歯入れ歯になつてよく笑う 時雄

杭打つと空地の顔が生きてくる 太郎

私に杭がなければ走りだす 順子

生命線越えた杭から招かれる 葉子

用心の杭打ち過ぎて出られない シマ子

お互いに杭は見せない嫁と母 日の出

目指してた杭がブカブカ浮いている 千恵子

妻の杭太くなつて定年後

さくら

臆病な杭で打たれたことがない

理恵

しがみつく年金という細い杭

美智子

図書館で古い雪崩に杭を打つ

富美子

病む母の杭になろうとする介護

柳昌

中立の杭は深目に打つておく

無限

また杭を打たれた貝になつてこう

月子

三度目は正座をさせて杭を打つ

好

ひと言をいうたばかりに人柱

美代子

杭を打つ植も痛みを分けている

郁夫

翼老いつなぐ杭などいらぬ夫

すみ子

人

郁夫

国境の杭が地球を狭くする

郁夫

地

堅坊

ふらふらと揺れるが抜けぬ杭でいる

直樹

天

直樹

彈痕のない戦後史に杭を打つ

直樹

軸

直樹

目に見えぬ杭に繋がれ傷だらけ

直樹

兼題「たんまり」

志田 千代選

お正月のつけたんまりと来る二月

喜子

戦利品たんまり持つて娘が帰る

雅明

たんまりと儲けて猫と暮らしたい

房子

たんまりをワンコインから始めます

ふりこ

たんまりと溜めれば癖が高くなり

シルク

汗の無いたんまりならば遠慮する

キヨミ

詰め放題の作戦立てているチラシ

保州

たんまりの母のへそくり知らなんだ

桂作

たんまりと溜まったものはゴミばかり

弘風

たんまりと空き缶だけが残される

菜々子

がめつい奴にたんまり貢がされました

理恵

たんまりと貯めてだーれも寄せつけず

恵子

たんまりの時間に見合う金が無い

すみ子

たんまりと貯めてはるのに一人もの

さくら

たんまりと金はあるが愛がない

一步

たんまりとお金があるけど病気でず

善純

たんまりと褒美あげると誘われる

マイム

たんまりを当て込む株がしょぼくれる

靖鬼

たんまりと積んでも秘密はばらさない

ふりこ

菓子箱にたんまり無理を詰めて来る

シルク

たんまりと稼ぎますケチになり

好

たんまりと貯めてはるのに薄着する

正雄

たんまりと貯めてたんまり決める主婦

好

たんまりの報酬悪の匂いする

東吉

たんまりとあつても値切る癖がある

扶美代

たんまりの遺産の札に墓参り

宏子

豊かかモノモノに縛られて

真理子

たんまりとない年金に申告書

耕治

たんまりとせしめたらしい孫の顔

理恵

いずれにしてもたんまり溜めた幹事長

勝弘

飢餓の子に山と届けよチョコレート

保州

兼題「本物」

村上 玄也選

戦争がすんでも地雷埋まっている

啓子

たんまりと聞けば小鳩が目につかぶ

直樹

たんまりもないが子分を可愛いがる

月子

紙袋たんまり溜めて妻が逝く

堅坊

たんまりと持っていそうな赤ら顔

美花

人

富美子

CO2たんまり地球儀があえく

昭

地

昭

たんまりに慣れほどほどじゃ物足りず

昭

天

昭

へそくりもたんまりちよつとハワイまで

月子

軸

月子

ためること知らずに生きたキリギリス

月子

兼題「本物」

村上 玄也選

本物はどこか一本筋がある

准一

本物の花には四季の味がある

美義

本物と念を押すから持つ疑惑

庸佑

本物の女性を凌ぐ色っぽさ

いさお

本物へたましい刻む匠の手

富子

本物が持つ品格はいぶし銀

美智代

見る人が見れば本物だった壺

なぎさ

本物で流行り廃りのない形

扶美代

言い訳はしない男のど根性

尚士

本物の論吉嘆いている格差

無限

本物はデンとかまえて揺がない

シルク

純粹なところで拝むこ来光  
 本物にこだわる現場主義通す  
 本物か確めないでおく家宝  
 本物ならばもつとしますと骨董屋  
 生きざまは本物だった父の骨  
 本物を持っているので動じない  
 人望がイミテーションと気付かせぬ  
 本物と信じています葉指  
 ビチビチの肌とどんな化粧も適わない  
 節高い指に本物なじまない  
 本物の友情だろう平手打ち  
 子が生まれ本物になる父の顔  
 本物が喋ると空気が変わります  
 本物と思つた恋が贅気楼  
 本物は奈落の底で立ち直る  
 健康家に老母の野菜ほんまもん  
 本物かどうか叩いてみたくなる  
 本物は預けています貸金庫  
 本当の父かと母に聞いてみた  
 贋作のほうか手間暇かけている  
 本物は本物らしく光つてる

公 誠  
 天 笑  
 宏 子  
 弘 一  
 朱 夏  
 い わ ゑ  
 美 龍  
 千 恵 子  
 葉 子  
 楓 楽  
 良 一  
 俣 子  
 太 郎  
 す み 子  
 ふ り こ  
 恭 昌  
 靖 鬼  
 美 智 代  
 志 千 代  
 時 雄  
 い わ ゑ  
 佳  
 生みの母の愛で義理の子育てあげ  
 本物の凄さコビーが知り尽くす  
 新聞で包み真心差しあげる  
 本物を観て形容詞出し尽くす  
 本物は今隅っこで船を漕ぐ

人  
 にせ物の方がおいしい味おんち  
 地  
 本物は何も足さない飾らない  
 天  
 造反者あれが本物かも知れぬ  
 軸  
 真贋を見分けられない色眼鏡  
 兼 題 「抱 く」 河内 天笑選  
 かる鴨の羽の下から雛の首  
 こわごとと新米ババが抱くややこ  
 抱くひとをつぶさに感じとる赤子  
 抱き癖が付きますからと孫とられ  
 抱き方が違つと愚図るババの守り  
 抱きあげた母の軽さに息をのむ  
 卒寿過ぎ小さな母をそつと抱く  
 ややのことなりゆく母を抱き締める  
 大志抱く杉を見守る山の精  
 椿ほろり風の女神に抱かれる  
 煩惱を山ほど抱いて八十路ゆく  
 フリーターだつて明日の虹を抱く  
 ウエストが太くて腕が回らない  
 再会に握手で足りず抱きつかれ  
 抱き合わせ要らないのが増えてくる  
 生駒山そつと河内を抱いている  
 猫抱いて寝てます今日は寒いから  
 抱つこ抱つこと下が生まれてからあまえシルク

月 子  
 好  
 昭  
 好  
 卓  
 好  
 千 恵 子  
 實  
 月 子  
 好  
 卓  
 好  
 千 恵 子  
 實  
 月 子

ハグの時だけ夫フランス人になる  
 悲しみをいつまでも抱く拉致の海  
 抱きあげた女重くて取り落とす  
 しつかりと抱かれた人に裏切られ  
 階段の手摺みんなに愛撫され  
 もんもんと眠れぬ夜の抱き枕  
 挨拶の抱擁にまだ慣れてない  
 膝小僧抱かえ格差に耐えている  
 抱きとめてくれる人ありやんちやする  
 ひそかにひそかに抱いているのは少女趣味  
 鼻提灯返り咲く夢抱いている  
 このままで帰すもんかと抱きしめる  
 虎の子を抱いてはあちゃん取り仕切る  
 嫁した娘の部屋に抱き枕がひとつ  
 佳  
 たつぷりと時の流れを抱くワイン  
 もう僕を抱くのは仏さまか鬼  
 妻の手は僕を抱くのを忘れたか  
 抱かないで下さい溶けてしまうから  
 マシユマロのような天使を抱き上げる  
 人  
 陽に抱かれ風に抱かれて子は元氣  
 地  
 東にして抱いてくれます母の胸  
 天  
 春をたっぷりだいて花芽ふくらみぬ 高田美代子  
 軸  
 現行犯前も後ろも羽交絞め

昭  
 楓 楽  
 時 雄  
 ばつは  
 義 子  
 朋 月  
 見 清  
 朱 夏  
 い わ ゑ  
 恵 子  
 恭 昌  
 瑠 美 子  
 す み 子  
 和 夫  
 朱 夏  
 修  
 蕉 子  
 保 州  
 キヨミ  
 み つ 子  
 蕉 子

# おどろおどろ

毎月24日締切・35句以内厳守

編集部

## 岸和田川柳会(大阪)前月分 仲谷 弘子報

稼ぐのは京のまねきの役者はん  
 賀状出すその日に届く喪の知らせ  
 あれこれと妻指図する十二月  
 八十路越す十二月ほど嫌な月  
 電卓も壊れ始める十二月  
 十二月無理せず炬燵で丸くなる  
 相続のセミナー要らぬ我が家には  
 現実右左往のマニフェスト  
 現実貧困率の高い国  
 再婚の祝いメールだけに濡れ  
 映画館出ればまさかの雨に濡れ  
 鉄人と呼ばれ一層努力汗  
 歯科内科更に眼科に足伸ばす  
 ありがとうの笑顔一層ボランティア  
 欲の虫更に一言だつた悔いている  
 追い撃ちの一言だつた悔いている  
 手のひらをこぼれて落ちる福の神

つかさ  
 はるえ  
 俊昭  
 浅子  
 香代  
 呂万  
 茂  
 淳風  
 東吉  
 和美  
 昭  
 若芽  
 隆昭  
 義泰  
 柳風  
 ダン吉  
 泰弘

脳トレでこぼれた記憶驚いでる  
 もみじの掌こぼれるほどの夢のせて  
 来る年へ笑みがこぼれる梅一輪  
 網棚の上でシューマイ自己主張  
 倦怠期卓でシューマイ冷えている

## 和歌山三幸川柳会 武本 碧報

ジャングルジムから見た本物の夕日  
 本物の息子が騙すはずがない  
 本物の鷹になれずにピーヒョロロ  
 白磁の皿に本物の秋を盛る  
 本物を見分けるまでの授業料  
 本物で生きる女の小生意気  
 ほんものの貧しさを見るあばら骨  
 本物の薔薇でいつかは枯れていく  
 本物やホンモノやとしやべる指輪  
 本物の愛の拳は痛くない  
 本物の看板重い三代目  
 本物を求め畑へ辿りつく  
 本物の医者が小島で汗を掻く  
 本物の人間が乗る宇宙船  
 人並にカードを持って雲に乗る  
 和え物にするほどカード持ち合わず  
 レッドカード息の乱れを論される  
 甘い癖レッドカードがたしなめる  
 衝動買いさせるカードが疎ましい

幸子  
 力子  
 仁緑  
 珠子  
 蛙城  
 和子  
 義雄  
 順一  
 桂香  
 准一  
 章子  
 嘉平  
 起世子  
 柳昌  
 登美代  
 東吉  
 かずみ  
 幸  
 昇  
 好男  
 みね  
 豊太郎  
 碧  
 絹子

カードローンに走らせたのは赤いバラ  
 わたくしの内緒守っているカード  
 一人より二人花札から学ぶ  
 カードなど持たぬと父の太い指  
 お灯明あげると話したくなる  
 保育器の中で命の灯がともる  
 晩学へ熱い想いの灯がともす  
 悲喜もこも抱いて夜景は美しい  
 喜怒哀楽呑み込み街の灯が点る  
 見残した夢が余生の灯を点す  
 徘徊の背を見守る常夜灯  
 足して二で割れば普通になる答え  
 普通よりちよつと背伸びをしたワイン  
 爆音や事故は普通のことですか  
 ありふれた顔で覚えてもらえない  
 普賢段で光る私で暮らしたい

## 竹原川柳会(広島) 古田 太虚報

孝子  
 美花  
 次根  
 イセ  
 美子  
 保州  
 仁子  
 町子  
 当代  
 菜摘  
 幹子  
 紀子  
 朱夏  
 ダン吉  
 武  
 俣子  
 房子  
 白狐  
 敬子  
 輝恵  
 節夫  
 慶子  
 蘭幸  
 半徳

追憶の人へと走る雲である

シルバの夢追う今日をしかと生き

追いかけておいでと笑う穂一つ

ふるさとに残した夢を風と追う

宝とも思う私の杖がある

子宝に恵まれました茨道

目の前に有るから気付かない宝

贖作でいいの母から貰ったの

歳月が彫ったこの貌だからです

磨いてるうちに宝になった石

宝船虎を描いて乗せようか

仏教伝来宝のこして千の風

大声で笑って今日を浄化する

最後には私がいまるときめられず

笑うのもご馳走となる忘年会

牙をむく私の中に虎がいる

ブランコに乗った笑顔よそのまま

川柳らくだの会(鳥取)

岸本

宏章報

領有権宇宙にまでも拡大す

保証印押さず冷たい仲となる

孫育て打算抜きだが大仕事

虎の尾を踏んで一人前になり

とつときの笑顔おんなの打算なり

ライバルの視線冷たく背で流し

嘩然とす二位で駄目かに首かしげ

笑子

幸子

比呂子

汎美

規代

淑子

一路

民恵

静風

万年

栄恵

力

厚子

太虚

栄香

千枝

史子

連れ添って打算などないお人好し

不景気もどく吹く風か虎がいる

献金へ打算はないという不思議

損得を考えてから橋渡る

川柳塔みちのく(青森)

小寺

花峯報

びつたりと合ったスボンのバンド穴

びつたりと寄り添う旅もあと僅か

ほどほどの運だと信じ生きている

出遅れた本気 幸運だったかも

遠い日よ運命賭けた夏帽子

海女さんが未だ潜る気か風を読む

びつたりと二人三脚ボクと影

残り香の形見に潜る母が居る

策略を練る水面下での謀議

コスモスにびつたり風と子の笑顔

びつたりと寄り添って飛ぶ赤とんぼ

五千年眠り続けた埴輪の目

母さんの寝床に潜る日曜日

地下道であやつり糸を切っている

行間へ逆転劇を潜ませる

運命に流され小石丸くなる

千羽鶴かずを数えるまでもない

つきのない俺に囁く菩薩さま

開運の兆しすみが咲くように

告げ口のとても上手な白い皿

善江

邦昭

宏章

せつ子

一路

きよし

柳子

洋子

ヒサ子

あすなろ

美鈴

一吞

銀波

ふさゑ

雅城

愁女

井蛙

黙人

岳水

花峯

慕情

一花

苜

五楽庵

佳句地十選 (2月号から)

根岸方子

四季の膳お着の国に住む誇り

初雪をなめた旧友消えてゆく

あなたには言われたくない顔のこと

じいちゃんのおしゃれはヒゲも染めている

暗号の漏れていないとする悲劇

こっそりと生きがいくれた風の私語

点と点結んで根っこ太くする

母の背に何度詫びたか親不孝

手鏡に反響しますまだ女

ネジ巻いた分だけ動くふりこです

朝子

雅城

いさお

公誠

順風

和香

小雪

孝子

義子

ちかし

川柳塔唐津佐賀

仁部

四郎報

墨をすり正座の賀状遠い夢

新しい蘭草の畳古稀の妻

リハビリの尻を見舞がまた叩く

新しい靴が踵に噛み付いた

日帰りで買い物ツアー釜山港

三月やシャッター街も雛祭

温泉のガラス一重に鯉泳ぐ

勝視

輝夫

蜂朗

晴翠

高明

四郎

實

高知川柳社

小川てるみ報

雨漏りさんご文化遺産と言われても

三郎

若者の文化を煽るファッショ誌

正倉院のロマンにあふれる秋日和

薪のご飯の文化を捨てた世の驕り

六十路来て着物文化に目が開き

髪の色十人十色染め文化

異文化に触れて見たくてバスポート

踏み分けた道に文化の灯が点る

必要にせまられてきたエコ文化

温暖化文化は後に戻れない

やがて来る月で地球を詠む一句

ざわざわ風荒れる日の古戦跡

赤ちゃんと焼き餅やいて荒れる兄

荒ぶ子の乾きに母の涙壺

日本で二つ試したキノコ雲

真二つに割れたお皿にある未練

晴れ姿二つ並んで祝酒

二つとない命大事に生きる術

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

茶子報

一合の酒が本音をしゃべり出す

いい気分朝のやさしい声を聞く

御世辞でも若い若いという気分

いい気分部屋中ランの香り満つ

堅美派カードの恐怖未だ知らぬ

北風小僧冬を奏するトタン屋根

胸にバラ飾って歌い若返る

正躬

三千世

千鳥

和江

哲史

てるみ

幸子

和広

健

典雄

ふき

京子

美々

忠

房恵

徳子

栄美子

切符二枚ください春の二人連れ

言の葉を少し飾った年の功

いい気分なので鬼門も恐くない

今はずもう履けぬヒールよ飾りもの

火の神が振り向くほどの髪飾る

飲み過ぎてイエローカード持たされる

飾る家心のスキを持ち歩き

気分いい昼寝を乱す雪おこし

松飾り幸せそうに見える朝

いつかきつと片道切符神がくれ

残高ゼロカードのいのち切れました

いい気分人の集まる日向ほこ

着飾ってみてもメタボの目立ち過ぎ

人形を飾って部屋を和らげる

会員のカード割引してもらおう

少しでもお役に立っていい気分

曾孫九人の写真飾って独り部屋

カードの裏に鬼が居そうで持てない

貯えはまあまあとしいいい気分

メ飾りしない宗旨に慣れてきた

妻が病み飾りになった茶器と花器

晩酌の猪口一杯でいい気分

松露川柳会鳥取

小西 雄々報

尊敬する恩師の姿忘れられない

人柄を父の背中に教えられ

螢

孔美子

盛桜

節子

実満

みさ子

小生

美代子

(岩)和子

くに子

小鹿

永子

かおる

(巖)和枝

かつみ

みどり

惣子

露子

満

睦子

重忠

茶子

智恵子

鈴枝

遼くんの一挙一動みる育ち

竹割ったような人柄だいですきだ

人柄に親も納得縁結び

過ぎし日へ父の頑固さ偲ばれる

人柄へいつしか増えた村役目

につこりと笑顔で人の話さく

忍一字耐えて師走の風にあう

人柄を見抜いて蝶も飛んでこぬ

川柳塔わかやま

川上 大輪報

自分史にとまどき花の詩を編む

心が渴きそうに丸ごと毒を飲んで

今年こそ五弁の花を咲かせよう

寒梅に凜々しさもらう古希の春

細胞は進化を遂げて強くなる

大声で笑うと聞く叢椿

聞か猿になる耳栓をして生きる

耳に栓が道を行くかたつむり

忘れたい過去思いきり栓を抜く

もう時効心の栓をぬいてやる

夫婦の栓ねじ切れそうで繋いで

ときめきに心の栓がはずれ出す

イケメンがハートの栓を抜きに来る

身の錆を洗って風呂の栓を抜く

逆風にもまれ芝居が巧くなる

万策がつきて芝居の幕を引く

豊枝

弘子

公美枝

和代

信雄

静江

正光

雄々

徑子

翠子

三男

和香

ほのか

真里子

登美代

よりこ

寿子

紀久子

美子

小雪

大輪

利治

めぐみ

英子

一人芝居にあなたの水が欲しくなる  
濃過された過去が眩しく見えてくる  
おめでとう眩しい命無菌室

眩しくて斜めから見る君の顔  
一文字の愛の眩しさと曇らせぬ  
よしこ

眩しげに二人を照らすお月様  
生きている眩しい朝に深呼吸  
赤ん坊の視野に眩しい陽の光り

和歌の海眩しく光る初日の出  
冤罪が晴れて勝訴の旗映える  
品性が匂う眩しいほど匂う

3Kは「友愛」だけで乗りきれぬ  
孫のひくピアノの音もジングルベル  
鳩の巢はセレブ季節はデフレでも

歳末の商い合戦幕開けだ  
本音バラオブラートからこぼれ  
亡き母のように生きると今思う

周りの舵が同じ方へと流される  
虎の尾を避けて傘寿をのり越える  
またぎきの話は外へ持ちださぬ

温暖化僕も一肌脱ぐつもり  
草に寝て宇宙の人になります  
約束で咲いたつばきに札を言う

今日という日が昏れてゆくありがと  
不具合いが移動してゆく老いの坂  
チャンスよく掴む回転早い鬼

これ以上とがれぬ細い昼の月  
勤労を称え小春日和の今日

ぼたる川柳同好会大區 水野 黒兎報

三ヶ日雑煮たつぶりまたメタボ  
初夢で富士を見た人さがして  
センサーがすべてを決める町議会

普天間を世界が視てる新政権  
Uターンの足を引っ張る銀世界  
世界一取る中国に恐怖の目

忙しない時間区切りのバス旅行  
たつぶりの嫌み残して養母帰る  
孫が来た仏のようなじひの笑み

捨て身です火の粉をあびて見る覚悟  
フラツシユを浴びて挨拶読めません  
世界はひとつ平和はどこにある

世界より重い命を今生きる

川柳茶ばしら(愛知) 板山まみ子報

雪の朝やつと届いた年賀状  
風雪に耐えて啓蟄やつと春  
炭タドンなくても子等の雪だるま

降りしきる雪へ飛び出す孫の頬

恵子 柳童 契子 いさむ 長一 春代 宇乃子 桂子 祥風 幹治 正子 久子 信男 黒兎 勝

瑞枝 壽々子 蘭

まだお湯をはじくアラカン雪の肌  
大寒波犬はむくつと雪の中  
大雪だ明日が休みであつたなら

わたの花(大阪) 西川 義明報

バザーからバザーへ流れ生きるゴミ  
急ぐことないよスローライフで山下る  
加速する財政悪化マニフェスト

真似できぬ魔性の女が持つ魅力  
寄り添う妻の手が温かい春の宵  
二人共B級グルメ口に合い

あの人はとらえきれない万華鏡  
物忘れ若さがほしい記憶力  
晩秋を照らす紅葉や人の波

議論を一息つけばお茶の友  
ボーナスを無いよりましと拝む妻  
法話聞くと正座自然と背筋伸び

リハビリの明日を信じて靴の紐  
釣り談義だんだんかくなる魚  
鳩山さんやれない事は言わないで

あこ紐に進軍ラツパ速く聞く  
居場所だけコンパス内に決めて  
ボーナス袋不況の風も入ってる

晩酌の酒をビールに変えてみる  
長電話やつぱり逢つて話します  
帯封のついたボーナスもろた夢

ますみ はじむ たえ子 美代子 耀一 知佐子 民

君江 博子 愛子 宏至 義明 いつふみ 宏 正春 妙子 俊子 晴美 浩三 孝子 和子

美千代 百合江 まみ子

言い足りぬ言葉きつちり愚痴に出る 一風

八尾市民川柳会(大阪) 宮西 弥生報

透明が好き清らかな水が好き  
螺旋階段一段ごとに澄む空気  
千羽鶴祈りの中にある未来  
もう少し澄めば入学するめだか  
成人式むかえてやめる酒タバコ  
大好きな春が来るのを待っている  
七草のみどりが春をつれてくる  
葬式も結婚式も同じ服  
冬の空まつすぐ澄んで父が逝く  
草萌えて私を誘う旅(ころ)  
風雪に耐えて未来へ彬の碑  
未来図に書き込んでおくころざし  
式典は母親たちのファッションショー  
魂よ光れ来世は私と  
芽え芽えと私を照らす冬の月  
犬の分まで払ったお賽銭  
裏方の式取仕切の割烹着  
薩摩芋に未来を託す自給率  
産産へ家族の時計刻み出す  
図式からはみ出す深い情がある  
略式の招待へ赤っ恥  
宗次郎の笛から華になる挙式

寿之  
よしみ  
加央里  
秋子  
まつお  
芳香  
朝子  
いさお  
あかり  
一風  
賢子  
扶美代  
武人  
奏子  
惠  
ダン吉  
欣之  
草風  
留里恵  
森子  
柳伸  
弥生

西宮北口川柳会(兵庫) 黒田 能子報

続々とボロが出てきたマニフェスト  
連続の行事にもたぬ身とお金  
続柄手っ取り早く従兄弟です  
初夢が続いてほしいよい出足  
草食の男が続く菓子売場  
大トラを子猫に変えたママの技  
虎描いたつもりがいつか猫に化け  
かくし味程度の変で変りなし  
七光り大きすぎると妬まれる  
片隅のわれにも春の光あり  
新しい光が生きるアイバンク  
心にも光がともる御堂筋  
電飾の街買うものもなく急ぐ  
初詣閃光浴びる日本髪  
生きてます光と陰を踏み分けて  
逝く時も光のままの母でした  
おどけてもライムライトは哀しくて  
光り物いっぱいつけて妻が跳ぶ  
月光をたよりに急ぐマイホーム  
光るまで傍で磨いてあげますよ  
稲妻に横の女がしがみつつき  
後にも目があるような母の背な  
仏堂の一番奥にさす後光  
虹の色全部使って厚化粧

毅  
キヨミ  
弘子  
茂  
浩司  
盛夫  
いたる  
わこ  
りこ  
一兆  
折杭  
光子  
耕治  
奮水  
美籠  
忠  
直  
正和  
歳子  
光久  
朋月  
美代子  
求芽  
祐康

いつの日も叱つてくれる亡母がいる  
一・一七甦りくる鎮魂歌  
フルムーンまるで懺悔の旅だった  
すつきりと古い受け止めてから元氣  
お互いに生きてますよと賀状くる  
貧乏神財布の中で寝てしまひ  
スリーサイズ崩れて妻が天下取る  
一切の妥協を嫌うバラの朱  
大丈夫診察券が五枚ある  
はつぽつと何とかつなぐ老いの坂  
一本の薬になりたいボランテア  
富柳会(大阪) 古田 千華報  
さばさばを美德としている妻がいる  
用意した妻の食事を一人食べ  
さばさばと歩けば見える風の彩  
十二月顔もハートもノーメイク  
嫌な事全部忘れて澄し顔  
乖離する心を覗く鱈雲  
すつからかん君に捧げて悔いは無し  
こだわりを手放すことでシンプルに  
古着から聞こえる母の子守唄  
目覚めれば眺め微笑む古時計  
これからは控え目に溶く自分色  
古伊万里にさらわれ冬を飲んでる  
私は今日も古びたまま生きる  
章子  
比ろ志  
秋果  
哲子  
江美  
基輔  
哲男  
孝一  
二英  
萬的  
美津子  
壽峰  
札  
鐘造  
和子  
七朗  
高鷲  
未知  
安希子  
佳子  
武人  
登子  
晴美  
千恵

さつぱりと明日へ落ちるのは覚悟  
 モナリザと恋に落ちよう美術館  
 赤とんぼ亡母とわたし空を翔ぶ  
 その涙さばさばしたと言いながら  
 受け入れて自分を崩さない古武士  
 大河ゆつたり忘却の風に触れ  
 知らない街で古い私を脱ぎ捨てる  
 竹割ったようにさつぱりした女  
 一点に確かなバツクトス送る  
 皺の手に触れ癒されてゆく絆  
 空缶のころげる音に冬がある  
 古美術の価値は汚れを憚からず  
 やがて冬たった一人の子守唄  
 黄昏たわたしに神は手をぬかぬ  
 三代目しつかりせよと古時計  
 花迷路ひよっこり母の眼と出逢う

仲雄 奏子 華 惠 欣之 紅紫朗 よりこ 寿之 よしみ アキ 鬼焼 信子 森子 千華 田鶴子 留里恵

百人一首興じた昔友いづこ  
 幸せだ朝日を浴びて畑仕事  
 肩肘を張らずに浮けば見渡せる  
 マグロ船朝日になびく大漁旗  
 沈んだり浮かんだりして世をわたる  
 あめんぼのように生きてるこの私  
 故郷を想えば浮かぶ人がいる  
 雲海に両の手広げてた朝日  
 地球危機どこ吹く風と初日の出  
 国旗あげ朝日拝めと言った父  
 寝た切りのベット朝日の応援歌  
 この時刻母も朝日を拝む頃  
 梨園の灯揺れて子役の初舞台  
 青春は朝日となつて萌えた日々  
 おーい雲お前気楽に浮いてるなあ

正一 たけし 孝代 英美 輝子 正子 啓二 靖博 一慧 芳野 三和子 けい子 和子 和代 淳司

川柳ささやま(兵庫) 遠山 可住報  
 晴耕雨読こんな余生が待っていた  
 変らないただ一色の日本晴れ  
 先輩のばたばたあわれ聞く訃報  
 成層圏越えて響かせ和の太鼓  
 空模様気になる法話聞きながら  
 台風の雨戸の音が寝つかせぬ  
 晴れやかに元氣溢れた入社式  
 五月晴手作り弁当ヒクニツク  
 晴れ晴れとした顔結果が書いてある  
 幾山河ばたばた越えて古希の声  
 大空に風船一つ落し物  
 夕焼けへてるてる坊主うれしそう

純子 二英 美紗子 啓子 多美子 開子 照代 かほる 幸子 美智子 哲男 可住 くに子 八重子 賢 あきら 放任 よしみ 弘 いさむ 初恵 ひかり

長柳 会(大阪)

村上 直樹報

寄り添って杖に柱に初日の出  
 ゲーム機にテレビ取られてふて寝する  
 夫婦仲ゲーム遊びで五十年  
 伝統をしつかり守る嫁が出来  
 母の顔思い浮かべる墓参り  
 床の間に張り子の虎は晴れ舞台  
 体重計片足だけでそつと乗る  
 世界中マネーゲームの後遺症

直樹 もこ マサ 光弘 武男 エミ 正博 正美

ロース川柳会(兵庫) 山崎 君子報  
 誰だった会釈返してすれ違い  
 身辺整理は軽ういのりで始めよう  
 よくごらん紙に表と裏がある  
 後期高齢翼広げていざ翔ばん  
 その紙を提出すればもう他人  
 軽いジャブ効かせて若さ見せておく  
 寒風に紙漉く人の束ね髪  
 千代紙がはんなり癒してくれました

藍 義子 みつ子 貴代子 哲子 年代 いわゑ

川柳塔なら

坊農

柳弘報

賑やかに振る舞う袖に去る悪魔  
天国でいつかペアーを誓い合う  
お互いに無口で素つ気無い夫婦  
賑やかに喋る男のあかんたれ  
伝統のパンカウ思う寮歌祭  
伝統の重みに耐える庭の苔  
頬笑みで壁をつくらぬ花の精  
ペアルック年の差婚の妻自慢  
賑やかに振る舞っている店選ぶ  
洒らしてはならぬ篝火の伝統  
逝った友花いっぱい送りたい  
賑やかな女もこくり終電車  
仏壇が賑やかになる御命日  
伝統の踊り手がない村おこし  
賑やかな航跡瀬戸は夕焼けて  
三割が大きい壁になる打率  
賑やかな男の通夜は賑やかに  
壁に耳聞かせてやろう相聞歌  
必勝へあなたとペアーを組むつもり  
賑やかな宴会になる七回忌  
錯覚の愛かも知れぬペアルック  
ふるさとの誇りを担う輪島塗り  
でこはこのペアーがどうにか丸み帯び  
伝統を凍と受け継ぐ薪能

カズ子 隆之 さざ恵 次郎 彰治 とし子 芳子 萌子 翠公 紀雄 弘風 章久 比呂志 のりこ 修 恭昌 真理子 和夫 一風 柳弘 道子 富子

闇の壁さぐる光の見えるまで  
信頼のかたちでつなく命綱  
灯も音も消して二人の小宇宙  
一つ傘生きて夫婦の五十年  
壁破る勇氣へ風が味方する  
紙を濡く里百年の灯を守る  
最高のペアー優勝旗の涙  
好きな人へ命あずけて腕の中  
人間の爆発りオのカーニバル  
一子相伝バトンしつかと子が握る  
ぶつかってくるのを壁は待っている

あかつき川柳会(大阪) 山本 柳昌報

明日の芽に水を注いだ冬の月  
明日の風読めと司馬遼叱咤する  
明日ひらく書に猜疑心はない  
信じられぬ明日の風は乗り捨て  
金婚記念いよいよ明日になりました  
限界と思えば明日が委縮する  
予定空白の明日淋しそう  
ミサイルの届かぬ位置で明日を詠む  
フキのとう準備出来たと出番待つ  
S.Lの煙に生きる気を貰う  
鶴橋でむくむく起さる腹の虫  
八十路なおむくむく色気食い気あり  
冬木立風は迷わず天へ抜け

理恵 美千子 良一 洋子 朝子 國治 美智子 隆盛 卓 寿美 孝子 郁夫 克己 富美子 昭 太郎 紀乃 美花 柳弘 忠昭 見清 勝弘 武 いわゑ

どんな風吹こうが僕はマイペース  
風待ちの港の猫とねんごろに  
風当たりものともしない父の腰  
寒の風老母のかき餅干し上る  
新しい字が風まかせとは情けない  
ブランコを包む優しい風が舞う  
逆風の章自分史が熱くなる  
風流がコンビニーターに押され気味  
旅人の心を掴む鶴の句碑  
煩惱を靴に詰めて旅に出る  
置き葉富山から来た旅の人  
白地図を一枚持って旅に出る  
在宅も略式も罪起訴は起訴  
財務相何か訳有り辞任する  
歴史的チャンスこの一票で決める  
極限の儉約をして生きている  
派遣村なくても生ける世の中に  
米紙すら気配りして小沢評  
このごままで先進国か派遣村  
沖繩の痛み我が身の傷みとも

川柳花の輪(大阪)

妻谷 重風報

寂しくて吠えているのに人は散る  
こんなとき吠える総理がでんものか  
悪人に吠えないベツト飼っている  
吠えてもだめ女心は変わらない

一歩 朱夏 哲男 柳昌 丹吉 篤 房男 集一 シマ子 楓楽 和雄 美世子 紀雄 美智子 一行 半蔵門 鈍甲 みつ子 克衛 重風 やすの ミヨノ

これも在庫娘一人と三毛一匹  
もう終り君への愛は在庫切れ  
在庫処理腦の引き出し空けておく  
不意の客有合せでもプロの主婦  
こせこせと削ってみてもまだ足らず  
こせこせに四捨と五人で聞いている  
こせこせと口出しすぎて村八分

南大阪川柳会

吉川 寿美報

皿洗い主夫を侮つてはならぬ  
ピカピカに鍋磨いてる妻無口  
ピカピカの花嫁さんがVサイン  
職が無くイルミネーション綺麗だが  
ペンも恋もあなた任せになる時効  
失敗が笑い話になる時効  
学徒出陣ドラマクイズにするなけれ  
もう百寿時効は問わぬ寒椿  
奪い取る恋泥棒に無い時効  
執念の靴が時効を追いつめる  
カルシウム足りず若者すぐ切れる  
気短が打った釘だとすぐわかる  
年越しの打つ鐘の音が響く除夜  
煩惱に打たれところろ生きている  
父の打つ釘は急所を外さない  
先手打つ快感に酔う言葉尻  
母さんの涙の平手効きました

一幸 芽田暮 音成 善栄 風 泰子 薫 柳伸 弘子 弘風 勝弘 柳弘 集一 憲太郎 清 克己 直子 太郎 章久 たもつ 楓楽 なささ 滋郎

切り札を抱いて勝負に打って出る  
名人のほんやり打ったのが妙手  
更年期それより望む高年金  
デフレでは歓喜の歌は唄えない  
風雪に堪える根性は持っている  
COPPI嘲るように寒波来る  
化粧せずピチピチ肌で年を越し  
八月はピカピカしてた民主党  
直線をいつも曲って描いている  
のんびりと欠伸している昼の月  
ピカピカに磨きたいな僕腦の脳  
今ならばサラッと許すあの浮気  
一たす一は一でしかない老いふたり  
嘘でない生の演技で裁かれる  
裌をつけていんぎん無札なり  
いらつかずしつかり看護逝つた母  
心打つ言葉メモっている手帳  
米国にいらつとき見える基地移転

川柳若葉の会大阪

宮崎シマ子報

遠距離の母が気になる冬將軍  
ホームステイ距離を縮めたおもてなし  
程の良い距離を保って嫁が好き  
酔いっづれ家までの距離わからない  
地中海行つてみたいが遠い距離  
イブの夜街はひかりの海となる

栄子 一步 りか 忠昭 志華子 和雄 弘泰 尚紀 郁夫 昌紀 あや子 叡子 寿美 清成 修 ルイ子 山久 東吉 シマ子 洋子 烈 弘直 慶子 ますみ

京都塔の会

都倉 求芽報

好きなように泳ぎなさいと母の海  
忘れたいのにしっこく胸のうち  
幸せといえれば幸せ 今日も暮れ  
ほろほろの辞書も妻より愛おしい  
大粒の涙ほろほろ演技賞  
亡母の文ほろほろにしてまた甘え  
事業仕分ほろほろと出る無駄遣い  
ほろほろと落せる涙武器とする  
ほろほろ苦言おとしころが決まらない  
ポロポロの心に妻が傘をさす  
秋の名残りがほろほろになる吹きだまり  
楷書のように勤め迎えた定年日  
女房が書いたメモ手にデバ地下へ  
恥かかぬ程度の漢字だけ書ける  
無重力体験出来た二日酔い  
身勝手な大人へ叛旗振る子供  
後悔を繰り返し買う福袋  
年の瀬に時が流れる恨めしさ  
後悔の痼ころに蹲る  
悔やんでも悔みきれない一票差  
自供した後悔背負う法の網  
いい人を演じ歯がゆい自己嫌悪  
後悔をバネにしている人もある  
後悔を二、三ころに年を越す

能子 加津子 喜美子 則彦 とし子 朝子 満子 公子 葉子 美義 昌乃 比ろ志 英旺 福子 ますお 庸佑 綾子 ふりこ 欣之 輝美 文代 孝一 宏子

本当を言えずに嘘をまた一つ  
価値観を変えて後悔ふりすて  
猫と住みもう後悔はしてません  
次からは約束しない雪だるま  
後悔をするたび蛇は脱皮する  
後悔ぐらい何回でもしています

川柳塔打吹鳥取

野口 節子報

高級な竹輪も中はがらんどろ  
どうしてか竹輪はみんな筒ぬけだ  
掃除機にタオルも吸つてうなり出す  
表彰状の筒だけが邪魔になる  
竹筒に灯りを入れて町おこし  
この句を作る瞬間みんな互角です  
かすら綱互角引き合う花湯の夜  
飲めぬとも互角にあわす酒談義  
幸不幸互角の渦にシエイクされ  
お隣さん僕に劣らぬ家を建て  
俺お前互角夫婦の喜寿祝い  
こちらが互角と思えばむこう屁のカッパ  
この写真どちらも美人迷う僕  
口だけは年を取つても互角です  
金持ちも僕も死んだら燃えるゴミ  
人気度は互角お日さまお月さま  
貰うなら黒毛和牛か松葉蟹  
新総理母のお金で支えられ

かずお かしこ  
としこ  
和友  
典子  
啓子  
求芽  
美代子  
美美子  
善江  
螢  
貴恵  
和子  
久芽代  
美知江  
みち子  
楨元  
勝憲  
克枝  
清  
公恵  
芳光  
完司  
三津子  
泰輔

孤高とはいうが支える人がいる  
六十年農を支えた力瘤  
持ちつもたれつだんだん冷めて氷河期か  
また一人国支える子誕生し  
年金が折れそうな腰支えてる  
太陽におんぶに抱っここの地球  
健康をニンニク漬けで支えてる  
無駄遣いするなど母の応援費  
骨折の苦い記念日松葉杖  
威張つても妻の支えでやつとこさ  
御先祖の田畑を食つて生きのびる  
繕つた嘘を支える次の嘘  
支えられ支えはせずに古希をすぎ  
貴方柱私屋根ですよろしくね  
刑務所で秘書は先生支えてる  
魂を二本の足で支えとる

城北川柳会(大阪)

伊達 郁夫報

美しいうちに散つてる寒椿  
きな臭い話は耳に蓋をする  
強い寅栄光浴びて飛躍する  
蓋を取り心の暗を解き放つ  
指二本シツと押える口の蓋  
蓋開けてグレンミラーを聴いている  
何描こう今年の白いキャンパスに  
器量より笑顔よしにと育てられ

玲坊  
重忠  
勝誉  
道子  
たけ代  
龍枝  
義人  
紀の治  
泰山  
滋  
節子  
いさお  
駿三  
紀美恵  
くに子  
石花菜

道化師の描いた笑顔が汗で泣き  
マニユアルの笑顔がぎこちなく笑う  
人が好き笑顔と感謝忘れない  
婚活か一目散のポチの春  
叱るのが愛なら許すことも愛  
的を射る三十三間堂の春  
エレベーター私が乗るとブザー鳴る  
耳に蓋嫌な話は避けている  
スイッチを入れると竜馬まかり出る  
断家も楽屋じゃそばは箸で食う  
古希越えてチェンジアップや隠し球  
言うなれば大当りですわが女房  
その胸にヒットするまで叩きます  
満面の笑みで朝日がまた昇る  
びっくり箱の蓋が秘めてるサスペンス  
許すとは言わぬが父のいい笑顔  
難敵は私の中にある私  
ゆつたりと輪廻の海を浮き沈み  
めでたさも下の下年明け職さがし  
せいぜいがとじ蓋ほどの立場です  
苦勞した母は笑顔で乗り越えた  
アリバイのない空白に蓋をする  
リハビリの一步一步に明日の夢  
割れ鍋の蓋がこのごろ威張り出す  
進むにも引くにも義理の糸からむ  
亡母さんの風に押されて進む道

縣作  
郁夫  
ルイ子  
麗  
章久  
かずお  
勝弘  
弘風  
東吉  
求芽  
一步  
和夫  
明子  
賢子  
志華子  
満州夫  
直樹  
克己  
修  
正  
集一  
満作  
たもつ  
倫子  
朝子



放浪の船が時折座礁する  
放浪の真似妻の掌でする  
悲しみを仏に託す遍路旅  
放浪の旅はテレビで我慢する  
沖繩の願ひ米軍基地撤去

はびきの市川柳会(大阪) 徳山みつこ

秋草 玲坊 美代子 美津恵 照彦

松茸とお会いできずに年が暮れ  
オ리지ナル松はまっくりでおひなさま  
松ぼくり絵の具塗られるデイハウス  
道行くと大きな松の木があった  
松手入れ庭に冬日を呼び入れる  
自慢の松亡母と一緒に枯れました  
どうしたの聲が集まる松葉杖  
普天間の松はアメリカ大嫌い  
やがて芽を吹こうただ今汗まみれ  
雪の下耳をすませば芽吹く音  
北風に吹かれて木の葉フラダンス  
嵐吹き我が母黄泉へ旅立つた  
松茸も蟹も飽きたと法螺を吹く  
一陣の風が形勢覆す  
吹く風に無常感じる喪の報せ  
腰曲げた海老を真中に祝ひ箸  
ラツキいな妻の努力へありがとう  
幸運はいつも私の側にある  
沈む日のボクに寄り添う影法師

ちづる フジ 敏 雄太 泰子 喜久子 悦子 いさお ダン吉 千鶴子 正子 真一 六点 庸佑 章司 美喜 一壺 アヤ子 扶美代

体にはびたり値段は合いません  
相性はびつたりでした別れたの  
身勝手な寒い夜だけへばり付く  
老夫婦うなずきあっている阿吽

尼崎尾浜川柳会(兵庫) 田原 一兆

みつこ ヨシ枝 光男 美代子

塩送る受ける相手も読み深い  
電話セールス相手分からずすぐに切る  
猫に似た可愛い寅が来た賀状  
百均で買う一年の予定表  
お相手は人もうらやむ玉の輿  
認知症母が笑って返事する  
胸の内いやいやしてる妥協案  
宴会で偶然らしく相手する  
今年から真つ先に言うありがとう  
頼りない寅がイビキをかいている  
頭から信じてないけど拝む  
頭からメザシを食えと叱られる  
春なんて未だ言葉だけよく冷える  
盗み酒やめて二十歳の杯を上げ  
カラオケにいやいやついて来て十八番  
聞こえないふりしてるけど聞こえてる  
裏切らぬ相手は犬と影法師  
また足を踏んだ初心のパートナー  
叱られたように自分の子を叱る  
待たなれ相手に不足ない仕切り

柳明 江美 亀与子 茂幸 五月 伊サミ 孝一 政江 朋月 靖鬼 奮水 美代子 耕治 祐康 紀彰 乃 かずお よしひさ

この頭ドナーの役に立ちますか  
幸せの元をたぐれば妻の音  
さばさばと捨てた故郷が今恋し  
言葉なく貴方の胸を打つこぶし  
天井と夜更けの咳を聴いている  
繕って昭和のいのち飾り立て  
弱点をさらして軽く生きていく  
先頭に容赦はしない向い風

川柳さんだ(兵庫) 北野 哲男

キヨミ 全彦 哲男 里江 菜々子 美義 求芽 美籠

表札の夫婦のなごり薄い文字  
日溜りに肩寄せ合って冬を越す  
天地に守られ丸い雑煮餅  
天と地に感謝しながら農作業  
天と地と人の愚かさ震災忘  
ルミナリエ光の中へ生者死者  
その石はあなたの側で光り出す  
エコ時代蛍の光窓の雪  
目に光る娘嫁がす父の目に  
すつぽりと雪の山暮亡夫に会う  
静かだな六甲おろし消えた冬  
静かだな孫いたずらの真つ最中  
朝帰り静かにそつと上にぎり  
昼静か振り子時計のよく動く  
こじ開けた瓦礫にかすか呱呱の声  
掌を合わせ開ける包に故郷の味

美紗子 茂山 千代子 祐康 婦美子 淑子 ひとみ 雅司 祐美 一子 ちあき 歳子 一良 彰 哲夫 キヨミ

自動ではないぞとドアに書いてある  
年あけて十年日記重さ知る

正和  
宣子  
お日さまが豆の蔓にもおはようさん  
おはようが飛び交う朝が大好きだ  
前向きの夢に追い風味方する

みつこ  
のん子  
好  
新成人老いへ向かつてスタートす  
太陽を私と言われたのは昔  
連れ添った人が太陽だった頃

皆揃い朝日差し込む祝膳  
昵懇の神を作り初詣

忠  
喜代子

おはようと言えぬ相手がいる目覚め  
おはようと言えぬ相手がいる目覚め  
おはようと言えぬ相手がいる目覚め

公誠  
雅明  
扶美代  
かりん  
綾乃  
千代  
としお  
ゆきの  
清晋  
世紀子  
舞夢  
健吾  
山彦  
愿  
像山  
篤子  
天笑  
雅子  
童之介

高速度遠くの町を引き寄せる  
どことなくほっこりしてるうちのトラ

一泉  
順子

朝帰りはようさんと床に入り  
眉引いてゆっくり自分見ています  
リビングの上座下座が分からない

神風は吹くと信じた少年期  
スタートはスルト関西持つて旅  
鈴振つてあなた神様使い過ぎ  
人生の再出発へ鈴を振る  
すれ違つたほほえみきつと神さままだ  
新春に早やシユレッダー動き出す

寅年の女が牙を研いでいる  
下戸の家遠慮した酒まじで出す

朋月  
好文

過敏感さわるとすぐにジンマシン  
満面にゆとりの笑みを見せるフラ  
おはようさん花に水やる通学路  
おはようさん明るい声のランドセル  
おはようと鶏鳴けぬ町の中  
ママさんの夜のおはよう板につき

かすみ  
桂作  
桂昭  
茜  
麗  
集一  
仁清  
とし子  
栄二  
朝子  
洋

寒い朝あたたかかった父の足  
好奇心以外に異状ない体

章子  
哲男

おはようとおはよう板につき  
敵だからわざとおはようございます  
おはようのたつた四文字に和ませられ  
お呼びしていないが黄砂海を越え  
おはようと鴉が騒ぐゴミ出し日

体外受精神の領域もてあそぶ  
神さまのお陰を生きている日向はこ  
神さまはきつと見ている陰の汗  
泣き言は言わぬ母さんは太陽  
大声で叫んで見たいた青い海  
神さまよりも夫信じて居るわたし  
スタートの誓いが胸の底にある

川柳塔さかい(大阪) 河内 月子報

まあ素敵雪のお宿の水いらす  
寝たきりへおはようさんと手を握る

冬虹  
惠勇

おはようとおはよう板につき  
敵だからわざとおはようございます  
おはようのたつた四文字に和ませられ  
お呼びしていないが黄砂海を越え  
おはようと鴉が騒ぐゴミ出し日

おはようとおはよう板につき  
敵だからわざとおはようございます  
おはようのたつた四文字に和ませられ  
お呼びしていないが黄砂海を越え  
おはようと鴉が騒ぐゴミ出し日

珍客へコンビ二頼るおもてなし  
欠伸する客へ焦っている前座

日の出  
玄也

おはようとおはよう板につき  
敵だからわざとおはようございます  
おはようのたつた四文字に和ませられ  
お呼びしていないが黄砂海を越え  
おはようと鴉が騒ぐゴミ出し日

おはようとおはよう板につき  
敵だからわざとおはようございます  
おはようのたつた四文字に和ませられ  
お呼びしていないが黄砂海を越え  
おはもと鴉が騒ぐゴミ出し日

巻き返しゆっくり潮が満ちてくる  
笑顔から得るものがある好感度

時雄  
育園

おはようとおはよう板につき  
敵だからわざとおはようございます  
おはようのたつた四文字に和ませられ  
お呼びしていないが黄砂海を越え  
おはもと鴉が騒ぐゴミ出し日

おはようとおはよう板につき  
敵だからわざとおはようございます  
おはようのたつた四文字に和ませられ  
お呼びしていないが黄砂海を越え  
おはもと鴉が騒ぐゴミ出し日

おはようで仕事始まる北新地  
年度ゼロ同土で夫婦続いてる

和夫  
さくら

おはようとおはよう板につき  
敵だからわざとおはようございます  
おはようのたつた四文字に和ませられ  
お呼びしていないが黄砂海を越え  
おはもと鴉が騒ぐゴミ出し日

おはようとおはよう板につき  
敵だからわざとおはようございます  
おはようのたつた四文字に和ませられ  
お呼びしていないが黄砂海を越え  
おはもと鴉が騒ぐゴミ出し日

一年生のおはよう逢う過疎の村  
一杯の酒が生き生きさせてくれ

妻子  
朋月

おはようとおはよう板につき  
敵だからわざとおはようございます  
おはようのたつた四文字に和ませられ  
お呼びしていないが黄砂海を越え  
おはもと鴉が騒ぐゴミ出し日

おはようとおはよう板につき  
敵だからわざとおはようございます  
おはようのたつた四文字に和ませられ  
お呼びしていないが黄砂海を越え  
おはもと鴉が騒ぐゴミ出し日

来客もなく孫も来ず寝正月  
おはようでタツシユをつけて朝を出る

直樹  
唯教

おはようとおはよう板につき  
敵だからわざとおはようございます  
おはようのたつた四文字に和ませられ  
お呼びしていないが黄砂海を越え  
おはもと鴉が騒ぐゴミ出し日

おはようとおはよう板につき  
敵だからわざとおはようございます  
おはようのたつた四文字に和ませられ  
お呼びしていないが黄砂海を越え  
おはもと鴉が騒ぐゴミ出し日

おはようでタツシユをつけて朝を出る

唯教

おはようとおはよう板につき  
敵だからわざとおはようございます  
おはようのたつた四文字に和ませられ  
お呼びしていないが黄砂海を越え  
おはもと鴉が騒ぐゴミ出し日

おはようとおはよう板につき  
敵だからわざとおはようございます  
おはようのたつた四文字に和ませられ  
お呼びしていないが黄砂海を越え  
おはもと鴉が騒ぐゴミ出し日

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 惠子報

太陽を背に受け子等の影くらべ  
キミと言う太陽抱いて生きている

美江  
寿子

おはようとおはよう板につき  
敵だからわざとおはようございます  
おはようのたつた四文字に和ませられ  
お呼びしていないが黄砂海を越え  
おはもと鴉が騒ぐゴミ出し日

おはようとおはよう板につき  
敵だからわざとおはようございます  
おはようのたつた四文字に和ませられ  
お呼びしていないが黄砂海を越え  
おはもと鴉が騒ぐゴミ出し日

病む妻のまわり飾つてクリスマス  
忠央

川柳ねやがわ(大阪) 前月分 籠島 惠子報

忠央

順番はあなたの前で終ります

郁夫

ざりざりまでアナログテレビ見るつもり

麗

生かされてまだ見ぬ明日が待っている

たもつ

山茶花の朱のひとひらにある音符

柳弘

木枯らしに私も耐えている蕾

洋

薔薇を恋う棘があろうとなかろうと

鈍甲

ざりざりに追いつめられて牙をむく

三郎

コンビニはマスク外してから入る

仁清

このままで終わりたいくない初デート

栄二

七彩の棘を持つてる出合い系

かすみ

再審の決定やつと闇終る

ルイ子

十二月おでん煮ながらスクワット

さち子

ざりざりまで耐えた言葉は丸う出る

一風

ざりざりの中の贅沢妻の知恵

義明

薔薇の棘には一切触れぬ花言葉

弘一

棘抜けてトラと有馬の湯で和解

寿子

介護の灯さけて通れぬ歳になり

薫

矢面に立った棘を抜いてくれる妻

亜成

ざりざりのにざりこぶしが震えてる

茜

自分史の終りはきつとアリガトウ

弘風

はんなりの京都言葉に棘がある

賢子

ざりざりを生きた戦争忘れない

朝子

歳ですと言って無難に逃げてくる

搏泉

森繁の知床節もビデオだけ

尚世

冬薔薇苦勞話はひたかくす

恵子

わかあゆ川柳会(鳥根) 松本はるみ報

ハルウララ負けた馬券も捨てられず

伸子

盃の底にこたわり沈ませる

ちよえ

爽やかな夜明けの今を生かされて

かつ子

四捨五入ゆらぐ野心に風の音

はるみ

素朴な愛昔の母は強かった

好栄

ゆらぐたびとどきとどきしていた華のころ

恵美子

あれこれとゆらぐ心の日記帳

聖子

自分史に夜明けの記事がみあたらぬ

博利

舌論も乾いた胃腑にとどかない

清泉

六甲川柳会(兵庫)

伊勢田

殺報

ばらが散る恋の衣をぬぐように

いわゑ

今年こそ竜頭蛇尾にならぬよう

光久

書き初めに恥ずかしながら愛と書く

春香

震災の話題が増えて一月紙

礼甫

待ちわびる孫はまだかとポチ袋

政一

福袋抱えるように出したゴミ

登美子

書初めに夢を託して太く書く

(山)弘子

不況風追い出すように初笑い

弘

一月は事のすべてに初がつき

基輔

お正月還らぬ子にも祝い箸

武彦

初日の出水平線に寅をみる

悦子

着信も雅な曲にお正月

順子

親戚のランクをつけるお年玉

毅

まず褒めて後でゆつくり言うつもり

能子

気持ちよく褒めたボールはよく弾む

和郎

褒め過ぎた天狗の鼻を持って余し

浩司

褒め言葉出ぬままそつと茶を入れる

美恵子

古希すぎてほんとううれしいほ言葉

(朝)弘子

お正月孫の笑顔に褒め言葉

繁義

告白のチャンスに声が出ぬ内気

夏子

ハラハラと人恋い銀杏逢いにくる

千賀子

絵手紙がふるりの風連れてくる

洋一

古希迎え口数増えて酒も増え

孝子

君に会い新しい夢歩き出す

盛夫

いつの世も保守と革新夢芝居

寛子

老いの身に地球の自転速すぎる

恵子

ぐちつても酒の肴は好み出し

義行

食べないと決めた途端に腹がすく

忠貞

クラス会孫の話で盛り上げる

武臣

晩酌を妻のお酌で仲直り

美穂

ピンチとチャンス裏と表でせめぎ合う

無限

枕木の詩は古里へと続く

みつ子

影あればこそその光よ輝きよ

楓楽

七人の敵に元気をもらってる

則彦報

豊中もくせい川柳会(大阪)

藤井

しがらみを捨てたら飛べそうな明日に

紀乃

懇ろになつたは犬の散歩から

庸佑

母鳩の愛が世間を騒がせる

啓生

おひとりさまおわす語らず日が暮れる  
 かくれんば気付いて欲しい揚羽蝶  
 神様と懇ろになるお賽銭  
 嘘ひとつ大目に見てる昼の月  
 虎連れてまだ残照の道を行く  
 式解けて寒波一気によつてくる  
 根回しをされても凛と咲く椿  
 懇ろの半歩手前で退く打算  
 うそかまことかにかく話はおもしろい  
 世が進み人の心に水溜まり  
 ライバルはとにかく先に褒め殺す  
 半眼の猫とまじろむ日向ぼこ  
 とにかくね生きてるだけでいいんだよ  
 玉砂利の道晴れやかな人の波  
 思いついたらとにかくじつとして居れぬ  
 お互いにあつと気付いて笑いだす  
 何つくとにかく大根買うてくる  
 懇ろの悔みに施主の目に涙  
 拳骨が育ててくれた亡父の愛  
 幸せと勘違いしそうな笑顔  
 のんびりと過ごし私になる時間  
 満ちたりているかと覗く寒の月  
 ケアハウスを太った野良猫がのぞく  
 涙ふきはつきり見えた道標  
 女の道ころころくすぶつてる噂  
 道半ば風が背中を押してくれ

佐和子  
 きらり  
 千恵子  
 隆  
 早人  
 佳恵  
 幸雀  
 都代子  
 満寿巴  
 則彦  
 十八娘  
 夢  
 巴子  
 千枝子  
 堅坊  
 寿美子  
 千代  
 寿之  
 恵  
 美義  
 田鶴子  
 見清  
 よしみ  
 萬的  
 美智代

冬木立梢は天を突く構え  
 冬の坂何時しか歩幅揃つてる  
 懇ろになつて変わった風の向き  
 冬空に立つ老木の声をきく  
 引き返す道あり亡父が立つている  
 川柳塔まつえ吟社鳥根 三島 浜丘報

求芽  
 華  
 澄子  
 葉子  
 森子  
 寿代  
 薫  
 房子  
 和歌子  
 スズコ  
 蘭  
 昌枝  
 治代  
 たえこ  
 英子  
 幸代  
 禮子  
 柳歩  
 きみえ  
 紫晃  
 知恵子  
 桂子  
 畔  
 日出子

未来へと今日のライバル明日の友  
 指折つて溢れんばかり友出来る  
 すぐ集う大根めしを食べた仲  
 男の友よりは女の友がいい  
 友情の握手生命線のびる  
 初鏡男の好きな顔になる  
 運掴む初詣ではお洒落する  
 大福茶自作の茶碗点で初める  
 可愛いな抱いた初孫腹を蹴る  
 初ものを肴に初春を注いでいる  
 ベンと脳休めて孫と初笑い  
 翠洋 会大阪 安土 理恵報

ちえこ  
 芳恵  
 幸子  
 茂美  
 たけし  
 螢  
 美智子  
 政子  
 注湖  
 町紅  
 浜丘  
 叡子  
 知之  
 げんえい  
 富子  
 れんげ  
 正雄  
 集一  
 日の出  
 千歩  
 尚士  
 満作  
 すみ子  
 理恵

虎の尾を踏まないように車間距離  
おせっかい過ぎて虎穴に迷いこむ  
後門の虎をいつでも視野におく

虎は皮俺は自筆の墓残す

ドア開く飛び込んで来た笑顔

鏡開き体重計は無視してる

開けたら閉めて私の心風邪を引く

結んで開いて老母は可愛い二度童子

時折りに開き直って吠えてみる

仏壇開き久方ぶりに父と酔う

酒豪家の口を開けば飲む話

具たくさんの味噌汁一日が開く

世相どうあれひっそり開く梅の花

梅開く届かぬ人へテレパシー

いにしえのロマンの扉開く土器

### 米子住吉川柳会鳥取 渡辺多美子報

ばらしては見たが足りない埋蔵金  
今年こそ思った今年暮れて行く  
神さまが時々罰をくだされる  
寒いギャグ連発しても好きさなひと  
おそろしい塩田のあくまここに居る  
太鼓が鳴ると駆けつけて浜で網を引く  
鯖寿司と郷土のおかし子に送り  
異国にて身ぶり手ぶりでみやげ買う

桃花 捷也 希久子 茶々 舞夢 弘子 蕉子 恭昌 浩二 照子 義 志華子 みつ子 楓 楽

### 鳥根県 灘分川柳会

## 20周年記念川柳大会

とき 3月28日(日) 開場10時 締切12時  
ところ 平田文化館(二畑電車「雲州平田」駅)下車徒歩10分

参加費 二千元(灘分20年誌・大会誌・昼食  
事前投句宛先 〒691-0001 出雲市平田町  
1322 新宮 健一 締切3月10日

欠席投句 千円(切手不可・3月10日迄)  
兼題と選者 各題2句

「籠」天根 夢草選(大阪)  
「像」但見石花菜選(鳥取)

「冗談」佐々木 裕選(鳥根・浜田)  
「じゃけん」竹治ちかし選(鳥根・出雲)

「講演」内田 久枝選(鳥根・松江)  
「缶」渋谷由紀子選(鳥根・益田)

「触」事前投句 吾郷 敬一(謝選)  
(主催)

前夜祭 3月27日(土) 18時30分  
割烹温泉「ゆらり」

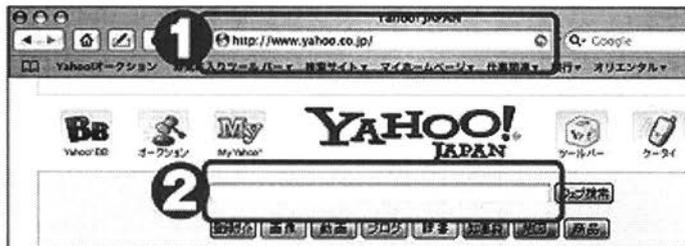
電話0853-621234 会費三千元  
申込締切日3月10日 新宮健一

(事前投句、欠席投句、前夜祭)  
宿泊 各自予約をお願いします(3月27日)

メイプルホテル TEL 0853-6220700  
ホテル堀江 TEL 0853-622218

ホテル幸野屋 TEL 0853-631133

- 1 「http://www.senryutou.com/」を打ち込む場所です。
- 2 こちらはアドレスを直接打ち込む場所ではなく「川柳塔」など検索ワードを打ち込む場所です。



川柳塔のホームページの  
アドレスが変わりました  
左の図のように打ち込んで、検索  
してください。

# 狂句と川柳

井上桂作

## 一 はじめに

狂句という言葉は誰でも知っていると思う。だが狂句とはなにかと聞かれると、満足に答えられる人は極めて少ない。初めて川柳及び系譜を明らかにした『前句源流』の著者中根香亭も、その概念は、すこぶる曖昧である。

「狂句とは世に川柳と称するものなり」といい、前句付が江戸は明和の頃に至り変化を生じて、狂句となりたりと記している。

狂句とは普通、おどけ句、滑稽な句の意である。これが連歌などでは、何も考えない無心の句をいい、俳諧の場合は風狂の句すなわち、常軌を逸した句をさすことが多い。

川柳二五〇年の歴史の中で狂句期と呼ばれたのは、江戸末期の狂句期、明治の新川柳期の約八十年とされている。結局、江戸は文化・文政以降の知的遊戯に墮した川柳を指していることになる。

## 二 俳風狂句

明和二年、「柳多留」初編が世に出たころは前句が省かれ、一句だてとなっていたが、この頃はまだ狂句という呼び名はなかった。そうして現実に命名された「名称としての狂句」と、後に狂句と呼ばれるような性格をもつた「風調としての狂句」と混同していた。狂句的風調は、江戸時代は文化のころから盛んになるが、これは狂句と呼ばず「前句」とよばれていたようである。

狂句の命名者が四世川柳だから、その四世が風調までねじ曲げてしまったかのように受け取られた。それまで正式な呼び名がなかった「独立単句」に名称を与えただけの四世が、諸悪の元凶のように見做された、つまりはお門違いであった。

## 三 狂句の名称（表面上の名称）

狂句という語が文献に表れるのは、二条良基の連歌論書『連理秘抄』にあげられたもので、「これは定まれる方（向き）なし、ただ心ききて興あるようにとりなすべし」として、つまり、気が利いて一興あるいいかたをすると言ふことである。共通した語は「利口」「利舌」など、いずれも軽みや機知をさしていいと思われ。

同じ著者の『筑波問答』では、無心連歌が狂句にあたる。「吾妻問答」では、「連歌師の俳諧と申すは狂句のことに候なり。また俳諧体と申すは、利口などしたる様の事に候なり」と定義づけている。

我が国における俳諧の初出は古今和歌集で、俳諧歌五十八首である。歌でない俳諧は『滑稽句』で狂句と同義であり、それが二百年をへだてて無心（地下）連歌として蘇ったということである。

## 四 おわりに

鶴彰全集の編者である一叩人氏は、その編書の序に「前句付（いわゆる古川柳）は、後世に功罪相半ばする罪を残したしたが、その功たるものの一つは、反抗批判精神を根幹とした風刺詩的川柳を庶民の中から汲み上げた事である」。中略・・・江戸幕府の言論圧迫下に狂句化した川柳を、正しい姿の復興に努めた井上剣花坊を中興の祖とするならば、後略・・・と述べ、「折角庶民の中から吸い上げた風刺詩的川柳も徳川武家政権により、言論圧迫されて狂句化されてしまった」と嘆いている。武家による厳しい統制あったのは事実だが、なるべくして成りたつた狂句には、川柳の一時代を支えた存在意義がある。

実際に「狂句排撃」とか「川柳の改革運動」などというのは、後世になってからのレトリックだ。新川柳という概念を広く普及させた剣花坊も、当面の否定対象である狂句については、正確な理解をもたないまま、時代の流れに気がついたら、状況が変わっていたという面白い寓話が残っている。

句会名	日時と題	会場と投句先
豊中 もくせい 川柳会	15日(月)午後1時40分締切 運ぶ・催促・ショック 自由吟	豊中市中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	16日(火)午後1時から 古墳・切る・童話・ぼんやり 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
岸和田 川柳会	20日(土)午後1時半締切 数字・せめる・だしぬけ アリケート	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川柳 ねやがわ	21日(日)午後2時締切 春雨・ペット・輝く・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	21日(日)午後2時締切 こなす・小豆	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
南大阪 川柳会	22日(月)午後1時から 裁判員・磨く・だんだん ナレーター	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪府中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
岬川柳会	22日(月)午後1時半締切 人柄・ローン・慕う	淡輪17区集会所 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳クラブ わたの花	26日(金)午前9時半から ランドセル・鼻・余生 自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0834 八尾市萱振町1-16-1-501 田邊浩三
川柳塔 すみよし	27日(土)午後2時半締切 空・笑う・ポーズ	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
和歌山 三川柳 幸会	27日(土)午後1時から 鼻・リズム・欲しい	和歌山商工会議所4階 第2会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
はびきの 市川柳 民会	28日(日)午後2時締切 宿・声・パワー・「煙草」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうも 吟社	28日(日)午後1時より 互角・ギャラ・心打つ	鳥取駅2F シャミネホール 〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原美雪
京都 塔の会	29日(月)午後1時開場 〇〇線・湧く・注文	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
松露 川柳会	29日(月)午後7時半締切 入学・ハンケチ・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡若町溝口757-3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

### 3 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な	4日(木)午後1時開場 咲く・栓・中心	奈良市立中部公民館4F 近鉄奈良駅④番出口 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城北会 川柳	6日(土)午後1時開場 座る・合図・ノート・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	6日(土)午後1時から 明日・そろそろ・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
倉吉会 川柳	6日(土)午後2時締切 水・気味・遅い	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
西宮北口 川柳会	8日(月)午後1時開場 萌える・並・こつこつ・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩2分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市高度町2-19-515 山本義子
尼崎 尾浜会 川柳	9日(火)午後2時締切 庇う・頼る・いよいよ・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川柳 同好会	9日(火)午後1時半締切 夫婦・練る・どこまで	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
川柳塔 さかい	12日(金)午後1時から あとで・中毒 「ほしの(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
あかつき 川柳会	12日(金)午後2時締切 身体・恵・悲しい・時事吟	ねむかホール (新谷町第2ビル3階) 地下鉄[谷町6丁目]駅③番出口から南へ2分 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川柳大阪	13日(土)午後2時締切 ストレス・裏・拍手	地下鉄御堂筋線天王寺駅「東研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 まつえ	13日(土)午後2時締切 景色・本番・語る・ふっくら	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
川柳塔 みちのく	13日(土)午後5時締切 階段・当番・にこにこ	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川柳塔 打吹	13日(土)午後1時から 瘤(こぶ)・間違い・破る	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
八尾市民 川柳会	14日(日)午後2時締切 会話・姿・狙う・雑詠	八尾神社内 西郷会館 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 わかやま 吟社	14日(日)午後1時開会 びしゃり・底・鏡・乳製品	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14 川上大輪

# 柳界展望

○21年10月17日神戸川柳大会にて、同人の特選。

何故だろうどんどん妻が若返る 太田扶美代

○21年11月7日NHK学園全国大会にて、同人の秀句。

ファの音の中に時々閉じこもる 太田扶美代

○平成21年度いずも大賞の同人の受賞。

天動説知らぬ振りして回る月 小豆沢歌子

○21年12月13日に第28回鳥取県没句川柳供養大会が開催された。同人の天位は次の通り。

悪役の椅子から肝つ玉みがく 鈴木公弘

冷やめしを覚悟正義の道歩む 春木圭一郎

## 柳界展望に情報をお寄せ下さい

川柳大会の同人の最上位句(特選、秀句、天位など)や、川柳界での同人の動向、句集の出版、住所・電話番号の変更などを、編集部にご連絡下さい。(但し掲載できない場合もあります。)

## 春・夏の川柳大会の開催予定をご連絡下さい

大会開催日より三ヶ月は余裕の時間を見て頂かないと、紙面掲載に間に合わないケースがあります。

落ち葉舞う老後のつむじ風強く 鈴木公弘  
行く末はみんなカルシウムのかげら 新家完司

○京都塔の会の平成21年度年間成績は次の通り  
最優秀賞 山田葉子。一位 榎本宏子。二位 山田葉子。三位 高島啓子。四位 藤井則彦、富田美義。五位 片山かずお。

○西宮北口川柳会の平成21年度年間成績は次の通り。  
カップ永久保持者 亀岡哲子。一位 小林わか、北野哲男。二位 河原野折杭、亀岡哲子。三位 奥田みつ子。四位 西口いわね、藤岡りこ。五位 山口光久。

○南大阪川柳会の平成21年度年間受賞。小谷集一。

○おかげようき川柳社主催第14回杉野十佐一賞大賞。次の人どうぞと穴が呼んでいる 高瀬霜石

▽出版 版△  
○新葉館出版通巻百号記念の現代川柳作家百名による「川柳作家全集」が、昨冬から今春にかけて順次発行されている。文庫本サイズ128ページ。同人の参加は次の通り。

板尾岳人 牛尾緑良  
塩満 敏 新家完司  
鈴木公弘 高瀬霜石  
三宅保州 山本蛙城

○須郷井蛙氏(同人・弘前市)は弘前川柳社百句第二号として句集「福寿草」を出版。

▽柳界動向△  
○木津川計氏(「上方芸能」発行人、川柳塔誌に川柳讃歌を寄稿されている)は4月7日(水)2時から、若屋市ルナホールにて一人語り「無法松の一生」を口演される。

## 新同人紹介

糞谷和郎  
公弘・毅・無限・光久推薦

寺川はじむ  
玄也・公誠・尚士推薦

○川柳オホーツク第8回全国誌上川柳大会は3月31日

国誌上川柳大会は3月31日  
投句締切で開催。投句料千円。投句用紙は便箋可。兼題は「進む」「雑詠」の二題。各題二句詠。「進む」の共選者に高瀬霜石氏。投句先 090-0033北見市番場町4-10 北見川柳社誌上大会係

○新誌友紹介△  
寝屋川市 鈴木 義明  
紹介者 富山ルイ子  
和歌山市 上田 紀子  
紹介者 木本 朱夏  
大東市 塩田 一行

○号記念大会関連③大阪川柳大会選者選任④各地柳壇交替選者の選出⑤同人2名承認。⑥定例確認事項⑦各部報告事項  
次回 3月5日(金) 10時。

川端 一步  
高原 英子  
紹介者 最上 和枝  
松江市 荒木 正興  
紹介者 三島 裕丘  
大阪市 永井 縣作  
紹介者 小谷 集一  
常任理事会 2月9日(火)出席20名。①代表者・役員

○新誌友紹介△  
寝屋川市 鈴木 義明  
紹介者 富山ルイ子  
和歌山市 上田 紀子  
紹介者 木本 朱夏  
大東市 塩田 一行

○新誌友紹介△  
寝屋川市 鈴木 義明  
紹介者 富山ルイ子  
和歌山市 上田 紀子  
紹介者 木本 朱夏  
大東市 塩田 一行

○新誌友紹介△  
寝屋川市 鈴木 義明  
紹介者 富山ルイ子  
和歌山市 上田 紀子  
紹介者 木本 朱夏  
大東市 塩田 一行

2010(平成22)年 第16回川柳塔まつり

# 川柳雑誌・川柳塔通巻1,000号 記念大会のご案内(予告)

1924(大正13)年に『川柳雑誌』の創刊以来、来る2010(平成22)年9月号を以て『川柳塔』は通巻1000号となります。

麻生路郎師の教えの元に全国の川柳同好の士が86年を費やして打ち立てたこの金字塔を、皆様方と盛大にお祝いしたいと思います。詳しいことは改めてお知らせしますが、とりあえず2010(平成22)年10月9日を予定に入れておいて下さいますようお願い申し上げます。

## 《 記 》

と き 平成22年10月9日(土) 午前11時開場・午後1時開会

と ころ ホテルアウィーナ大阪 4F 金剛の間

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 電話 06-6772-1441

おはなし 「路郎と薫風 — 牽引車の火と継承者の灯」

『上方芸能』発行人 木津川 計 氏

兼 題 「 虫 」 川柳展望社 天根夢草選

「 深 い 」 時の川柳社 平山繁夫選

「 渡 る 」 ふあうすと川柳社 赤井花城選

「 車 輪 」 番傘川柳本社 森中恵美子選

「 スピーチ 」 川柳噴煙吟社 田口麦彦選

「 価 値 」 柳都川柳社 大野風柳選

事前投句 「 千 」 川柳塔社 河内天笑選

記念品呈 「麻生路郎読本」・「河内天笑川柳句集」

## 川 柳 塔 社

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号201

電話 06-6779-3490

# 編集後記

☆この秋に川柳雑誌・川柳塔誌通巻一〇〇〇号記念の月を迎えます。一〇〇〇ヶ月という、割り算で八十三年になります。もうすぐ後期高齢者になる私もまだ生まれていない遙か昔です。その時代を偲んで川柳塔誌の記念号を発行します。☆表紙ウラに大きく告知していますが、皆さまから「私の珠玉の一句」を募集して九月の記念号に掲載を予定しています。何十年も昔からの同人も、最近入会された誌友も、川柳を始められてから今日までに詠まれ発表された句の中から、自他共に最高傑作と認める句をお寄せ下さい。☆私は川柳塔社に入会して十年を越えました。この機会に、初心から今日までの句作数を数えてみました。最初は通う川柳会は少な

ったのですが年とともにその数が増え、新聞投稿なども併せると年平均の作句数は二千句を上回っています。二万を越える川柳の中から、「私の珠玉の一句」はどれだろうと、早くも頭を悩ませています。

☆六月十五日が締切です。直前になって慌てなくて済むように、早い目にご準備下さい。どっさりの投句をお待ちしています。(尚)(専用柳箋を必ずご利用下さい。)

★春らしいものに紋白蝶の紋 薫嵐

★一出版不況2兆円割れ」とは、さる新聞の見出し。

一九九六年に過去最高の二兆六千億圓を記録して、その後は減少傾向という。そんな現状にあつて新葉館出版から、川柳作家全集が発刊された。参加人員は百人。★田口麦彦さんが新しい本を出された。飯塚書店発行「フォート川柳への誘い」。帯

## 川柳と無季俳句

### ひとつと

先日の新聞に「うたをよむ」と言う一文があつた。その中に無季俳句の秀作として、「戦争が廊下の奥に立っていた」や「憲法の前で滑って転んじやつた」渡辺白泉。私には俳句と言うより川柳に近いと思えるのだが、俳人が作るから俳句なのか。

眼の方の眼鏡の玉も拭く」日野草城、「露人ワシコフ叫びて柘榴打ち落とす」西東三鬼等もいる。未だ川柳とは滑稽や皮肉的なものと捉えている人もいる。俳句は短歌や連歌の前から発展してきた。無季俳句と川柳は俳句から季語を含めて自由に飛び立ったものだと思う。変化する時代に生き残るのは川柳かも知れない。その時文学的にも価値が高められて行くと思う。(源田 啓生)

に「詩のある川柳・イメー

柳も多い。

(朱)

□事務所にインターネット設備が入り、ホームページのドメインも新しくなりました。画面も追い追いかつて充実致します。お楽しみ下さい。

★自選川柳五十五句に書き下ろしコラムとプロの写真と絵画のコラボレーションが斬新。麦彦さん曰く「芸術は爆発だ！」と岡本太郎さんが叫びました。日本伝統の七五調文芸ももっとバクハツしていい。戦争や社会に対して問題提起した川

柳も思ふ。枯れることの美しさ

□手足の自由を失い以後口とつい刺々しくなります。だれもが刺を持っています。外に向いているか。内にむいているか。それだけのちがいです」と宮弘氏。刺が外を向かないよう気を付けて頑張りたいと思いません。(富)

ある。

ある。

# 川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(5月号)

地名

都府道都  
市道市  
県  
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



# 檸檬抄投句用紙

「椅子」 (3月15日締切)

5月号発表

高田美代子 選 — 共選 — 三宅 保州 選

B

A

--	--

地名
市都 道府
姓雅号

B

A

--	--

地名
市都 道府
姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



# 川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名		住所	電話	紹介者
〒		〒	〒	〒
年 年		年 年	年 年	年 年
月 月		月 月	月 月	月 月
から から		から から	から から	から から
半年 半年		半年 半年	半年 半年	半年 半年
9 5		9 5	9 5	9 5
8 0 0 0		8 0 0 0	8 0 0 0	8 0 0 0
0 0 円		0 0 円	0 0 円	0 0 円
該当の方に○をつけて下さい				

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

川柳塔社 (電話 06-6779-3490)

振替 009804298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい



# 「私の珠玉の一句」投句用紙

締切（6月15日）

発表（9月号）

同人・誌友（○で囲んでください。）

地名

道 県  
都 府

姓 雅 号

--

投句先

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

花野ビル201

川柳塔社



## 作品募集

5月号発表 (3月15日締切)

川柳塔 (8句) 河内天笑選  
 水煙抄 (8句) 川上大輪選  
 愛染帖 (3句) 新家完司選  
 檸檬抄「椅子」 (2句) 三宅保州共選  
 高田美代子選  
 波多野五楽庵選  
 三島浜丘選  
 一路集 (3句) 「修正」 鈴木公弘担当  
 「さまさま」 山本蛙城選  
 初歩教室 「虹」 (3句) 鈴木公弘担当

6月号  
 檸檬抄「巻く」  
 一路集「借りる」  
 「しずく」  
 初歩教室「飛ぶ」

## 本社3月句会

とき 3月5日(金) 午後1時開場・2時締切り  
 開場時間、締切時間を変更していません。ご注意下さい。  
 ところ アイーナ大阪 4階 金剛  
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441  
 おはなし 「あんな法則・こんな法則」 藤井則彦  
 兼題 「雪どけ」 山本義子選  
 「爪」 久保田千代選  
 「フック」 宮崎シマ子選  
 「是非」 松原寿子選  
 「固める」 河内天笑選  
 (各題2句以内)

会費 1000円  
 投句料 500円(切手可)

本社4月句会  
 7日(水) 午後5時から  
 兼題 「晴れ着」「右」「なんと」  
 「極楽」「削ぐ」

## 第28年度 夜市川柳募集

第10回 「骨」天根夢草選  
 ハガキに3句 3月末日締切  
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3  
 河内天笑方 川柳塔さかい

### 「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌集込みの投句用紙を使用してください。
  - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本誌集込みの投句用紙を使用してください。
  - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
  - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料76円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇一〇年(平成二十二年)三月一日発行

発行人 河内権治  
 編集人 穴吹尚士  
 印刷所 美研アト

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一丁目一四一七  
 花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話(0)六七九一三九四〇番  
 振替〇〇九八〇四二九八四七九番

オニザキの

すりごま

自宅の台所で始めた  
手洗いのごま加工・販売  
から50余年。  
オニザキでは、手作りの  
風味にこだわり、独自の  
開発した製法で、ごまの  
香りと味わいを最大限  
に引き出し、美味しい  
すりごまを作り続けて  
います。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ  
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎ 0120-30-5050

医療法人社団

# 湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) **6771-4861(代)**